松　任　市

浜相川・相川新遺跡

県営ほ場整備事業御手洗・出城地区
相川工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

石川県立埋蔵文化財センター

松　任　市

浜相川・相川新遺跡

石川県立埋蔵文化財センター

巻頭図版

航空写真（南から）

航空写真（北西から）

相川の遺跡から学ぶ（序にかえて）

中世においては、相川の地は「相河」の文字を当てたが、『源平盛衰記』巻二十八では、寿永二年(一一八三)五月、平維盛軍に追撃された源氏軍の退却路として「双河」の名が見え、中世以来、北国街道に近い農業地域として発達した地域であったと思われる。近年、この地域での遺跡分布調査が盛んに行われた結果、考古学的には、さらに古い段階から発達した地域であったことを明らかにしている。松任市街地西部の海岸付近、とくに小川町から倉部町にかけての臨海沖積地は、金沢平野の中でも、海岸砂丘が発達していない地域として特異であり、かつての海岸線がいくらか前方に位置して、沖積地の一部がすでに侵食されているとしても、日本海の荒波が打ち寄せる海岸近くにまで、集落が立地していたものと考えられる。その意味では、海岸線の長い石川県においても、特色ある地勢環境に置かれた地域と把えることができる。浜相川に位置する当遺跡からは、数点の土錘が出土している。おそらく前面に広がる海岸で、漁撈活動も行ったのであろう。

手取川右岸から大野川河口(金沢市)にかけての金沢平野海岸部は、一部砂丘地や氾濫原を除けば、極めて遺跡分布密度の濃密な地域であり、それは日本海沿岸でもとりわけ顕著な地域だと考えている。遺跡年代は、初期農耕文化を受容した弥生時代から始まり、古代・中世に及ぶが、やはり手取川扇状地の扇端部を占めることから、豊富な水資源(伏流水・自噴水)に恵まれ、水田耕作や畑作に好適な自然環境を形成していたからであろう。

本報告書で紹介されている浜相川・相川新遺跡も、弥生時代後期前半から古墳時代中期にかけての小規模な集落跡からなる複合遺跡である。発掘は、ほ場整備事業を原因とした小規模なトレンチ調査であり、検出した遺構・遺物も限られる。しかし、小発掘とはいえ、そこから得られる考古学的情報は、時には重要な問題を提供することがある。例えば、当遺跡では、弥生・古墳の過渡期を中心に、碧玉(緑色凝灰岩)製管玉などの玉類を加工していたことも明らかにされ、周辺遺跡での状況からも、この辺りが北陸における玉生産の中枢地帯に当たっていることを示唆している。

また、本書でも詳述されているように、北加賀を中心に「S字状口縁台付甕」・「パレススタイル壺」・「有文高杯」と呼ばれる加飾性の高い一群の東海系古式土師器片が出土することがある。当遺跡からも有文高杯などの破片が検出されており、古墳出現当時の北陸と東海地方とが、近江地域を経由して交流していたことを物語っていた。考古学的知見とは、例えば、このような小さな土器片の観察を通じて得られるものであり、その地道な知見を積み上げることによってこそ、より正しい過去の実像に迫ることができるのであろう。

ところで、古墳時代初頭の北加賀地方では、なぜ東海系の土器作りが行われたのであろうか。単に珍しいタイプの土器が流行しただけのことだろうか。おそらく、東海地方の人びとが何等かの目的をもって、北陸地方に流入(接触)したことを物語るのではあるまいか。そして、その目的とは何だったのだろうか。遺構・遺物の研究から、他地域との交流の有無を判断するのは、それほど困難なことではない。しかし、交流の背後にある社会的必然性を求める作業は、生易しいことではない。北加賀の特産物であった玉製品との関係などは、ただちに思い浮かぶことではあるが、現段階では単なる思い付きにしか過ぎない。それこそ地道で科学的な検証を積み重ねることが必要なのである。相川における小発掘からも学ぶことが多い。

所長　橋本　澄夫

例　言

1　本書は石川県松任市相川新町から相川町の浜相川地区にかけて所在する埋蔵文化財、浜相川・相川新遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡の発掘調査は、石川県農林水産部耕地整備課施工の県営ほ場整備事業御手洗・出城地区の相川工区の施工に起因し、同課の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが実施したものである。

3　調査の期間、面積、担当者は下記の通りである。

調査期間　平成2年11月6日～11月27日

調査面積　約240m²

調査担当　川畑　誠（石川県立埋蔵文化財センター　主事）、安　英樹（同　主事）

4　本遺跡の発掘調査および報告書刊行に係る費用は、一部文化庁から補助金を得たほかは、耕地整備課が負担した。

5　本遺跡の発掘調査から報告書の刊行に至るまでには、下記の機関、個人の協力を得た。

文化庁記念物課、石川県農林水産部耕地整備課、石川県松任土地改良事務所、松任市教育委員会、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会、株式会社吉光組、東相川町・相川新町・村井新町有志、大藪智子、岡本淳一郎、楠　正勝、出越茂和、原田　幹、藤重　啓、前田清彦、前田雪恵、吉田秀則

6　出土遺跡の整理については、平成3年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に作業を委託し、小屋玲子、馬場正子、正木直子が担当して行った。

7　出土遺物の写真撮影及び写真図版の作成は安が行った。

8　本報告書の編集・執筆は安が行った。

9　本文・図版・挿図についての凡例は下記の通りである。

(1)挿図の縮尺は図内に表示した。(2)方位はすべて真北を指す。(3)水平基準は海抜高(m)である。(4)挿図内の出土遺物に付された番号は写真図版のものと一致する。(5)出土遺物実測図の断面黒塗りは須恵器をあらわす。(6)出土遺物実測図のスクリーントーンは細かいものが煤の付着、粗いものが赤彩をあらわす。(7)出土遺物、特に土器の実測図中の器面調整の凡例は概ね下図の通りであり、本文中の記述では省略をはかる。(8)註・参考文献は文末に一括した。

10　本遺跡の記録資料、出土遺物は石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

目　次

本　文　目　次

第１章　発掘調査に至るまで……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　周辺の地勢……2
　第３節　周辺の遺跡……3
第２章　浜相川・相川新遺跡の発掘調査 ……5
　第１節　調査の概要……5
　第２節　Ａ調査区の遺構と遺物……9
　第３節　Ｂ調査区の遺構と遺物……23
　第４節　まとめ……37
第３章　北陸の有文高杯について ……41

写　真　図　版　目　次

巻頭図版　上　航空写真（南から）　下　航空写真（北西から）
図版１上　Ａ調査区柱穴（北西から）　下　Ａ調査区土坑（南東から）
図版２上　Ａ調査区１号溝（南東から）　下　Ａ調査区２号溝（南西から）
図版３上　Ａ調査区３号溝（南西から）　下　Ａ調査区４号溝（南西から）
図版４上　Ａ調査区１号落ちこみ（南東から）　下　Ａ調査区調査後全景（南東から）
図版５上　Ｂ調査区１・２号溝、２号ピット（南西から）　下　Ｂ調査区落ちこみ（南東から）
図版６上　Ｂ調査区４号ピット（南東から）　下　Ｂ調査区調査後全景（南東から）
図版７上　Ｃ調査区調査後全景（南東から）　下　Ａ・Ｂ・Ｃ調査区調査後全景（南東から）
図版８　出土遺物(1)
図版９　出土遺物(2)
図版10　出土遺物(3)
図版11　出土遺物(4)
図版12　出土遺物(5)
図版13　出土遺物(6)
図版14　出土遺物(7)

挿　図　目　次

第１図　浜相川・相川新遺跡の位置 ……1

第２図　分布調査区域と結果 …… 1
第３図　分布調査出土遺物実測図 …… 2
第４図　周辺の遺跡分布 …… 3
第５図　調査区の位置 …… 5
第６図　調査区全体図 …… 6
第７図　Ａ調査区土層断面実測図 …… 7
第８図　Ｂ・Ｃ調査区土層断面実測図 …… 8
第９図　Ａ調査区遺構実測図 …… 11
第10図　Ａ調査区出土遺物実測図（１） …… 12
第11図　Ａ調査区出土遺物実測図（２） …… 14
第12図　Ａ調査区出土遺物実測図（３） …… 15
第13図　Ａ調査区出土遺物実測図（４） …… 16
第14図　Ａ調査区出土遺物実測図（５） …… 18
第15図　Ａ調査区出土遺物実測図（６） …… 20
第16図　Ａ調査区出土遺物実測図（７） …… 21
第17図　Ｂ調査区遺構実測図 …… 24
第18図　Ｂ調査区出土遺物実測図（１） …… 25
第19図　Ｂ調査区出土遺物実測図（２） …… 27
第20図　Ｂ調査区出土遺物実測図（３） …… 29
第21図　Ｂ調査区出土遺物実測図（４） …… 31
第22図　Ｂ調査区出土遺物実測図（５） …… 32
第23図　Ｂ調査区出土遺物実測図（６） …… 33
第24図　Ｂ調査区出土遺物実測図（７） …… 34
第25図　Ｂ調査区出土遺物実測図（８） …… 35
第26図　Ａ・Ｂ調査区出土玉類実測図 …… 35
第27図　出土土器の時間的位置付け …… 39
第28図　有文高杯の文様の分類 …… 41
第29図　主要遺跡の分布 …… 43
第30図　北陸の有文高杯 …… 44

表　目　次

第１表　Ａ調査区出土遺物位置一覧表 …… 22
第２表　Ｂ調査区出土遺物位置一覧表 …… 36
第３表　北陸の有文高杯一覧表 …… 45

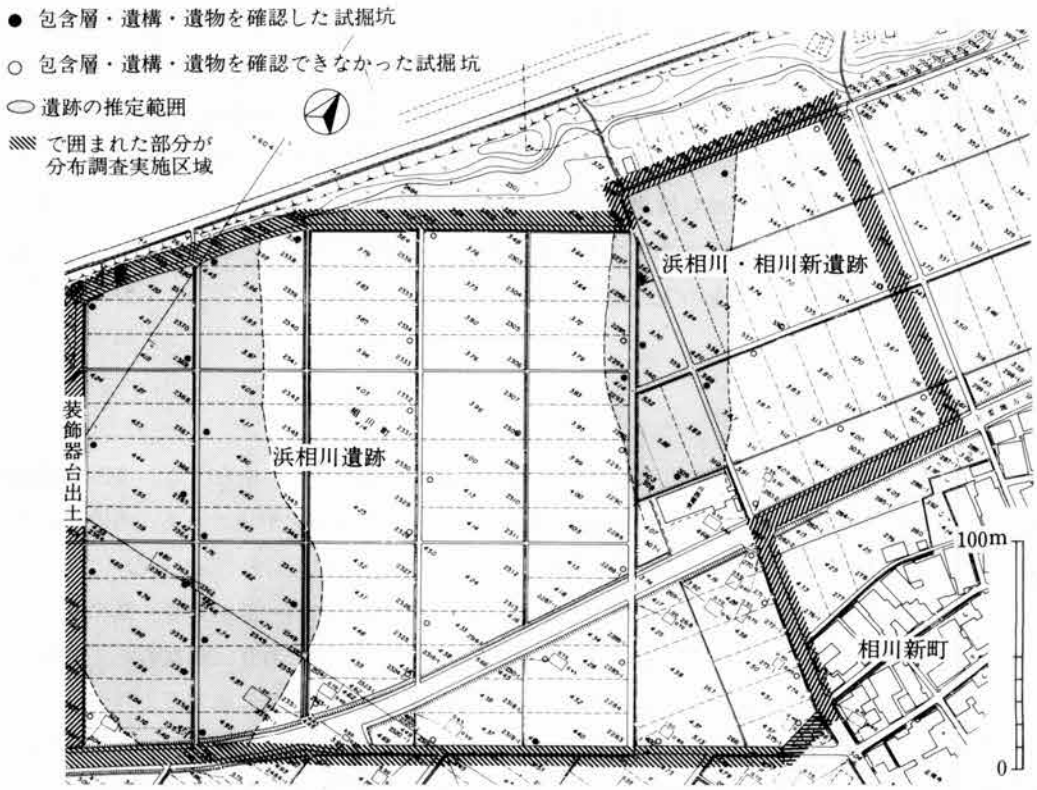
第１章　発掘調査に至るまで

第１節　調査に至る経緯

石川県農林水産部耕地整備課（以下、県耕地整備課）では昭和50年代後半から松任市の水田のほ場整備事業を実施している。その事業内容は水田の区画の大型化及び農道・用排水路の整備であり、その実施により大型機械の導入と灌漑不良田の一掃を可能にし、農業経営の近代化と環境の改善を目指すものである。

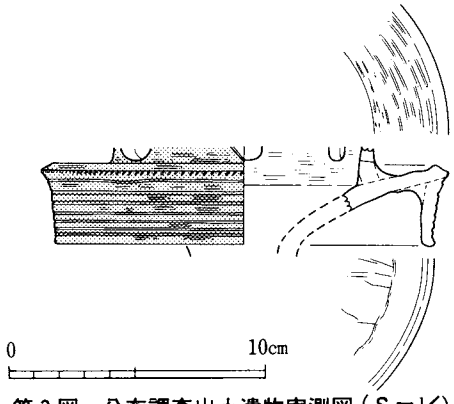
松任市北西部の各町、竹松・相川・相川新・徳光・平木町については御手洗・出城地区として昭和60年度に着工された。浜相川・相川新遺跡の周辺は、相川工区の一部として平成２年度の施工が計画され、県耕地整備課は、平成元年９月４日付けで石川県立埋蔵文化財センター

第１図　浜相川・相川新遺跡の位置
（Ｓ＝1/2,000,000）



第２図　分布調査区域と結果（Ｓ＝1/3,000）

（以下県埋文センター）に分布調査を依頼している。県埋文センターではこれを承けて、同工区の水田4haを対象としてバックホーを用いた試掘による分布調査を平成元年10月4日に実施した。その結果、試掘坑内での包含層の確認もしくは遺物の出土から、2遺跡の範囲と地表からの深さが把握された（第2図）。一つは浜相川・相川新遺跡（第4図1）であり、もう一つは通称浜相川の集落を中心に広がる新発見の遺跡であった。平成3年度に改定された石川県遺跡地図（県教委1992）では、周辺の分布調査・発掘調査のデータの検討を行い、その位置からもこの名称が本来もっともふさわしい遺跡として浜相川遺跡（第4図26）と命名されている。両遺跡は出土遺物から弥生時代・古墳時代の集落遺跡と推定された。第3図は浜相川遺跡の試掘坑の一つから出土した土器である。この土器は弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭に越前・加賀で多くみられる、独特の器型を呈する装飾器台であり、径約16cmを測る器受け部である（時期については石考研1986の区分による）。



第3図　分布調査出土遺物実測図（S＝1/3）

県埋文センターは同年11月4日付けで県耕地整備課に回答し、遺跡の所在とその範囲・地表からの深さを報告すると共に、田面工事に際しては盛土工法等によって包含層上に厚さ10cm以上の保護層を設けて、遺跡に損傷を与えないように施工担当の松任土地改良事務所に指導している。排水路が設置される部分については、浜相川・相川新遺跡の範囲に含まれ、保存が不可能なため発掘調査が必要となった。県耕地整備課は平成2年3月29日付けで、県埋文センターに発掘調査を依頼し、県埋文センターでは平成2年度の後半の調査を計画し、その旨、通知した。これにより浜相川・相川新遺跡の発掘調査の実施が決定したのである。

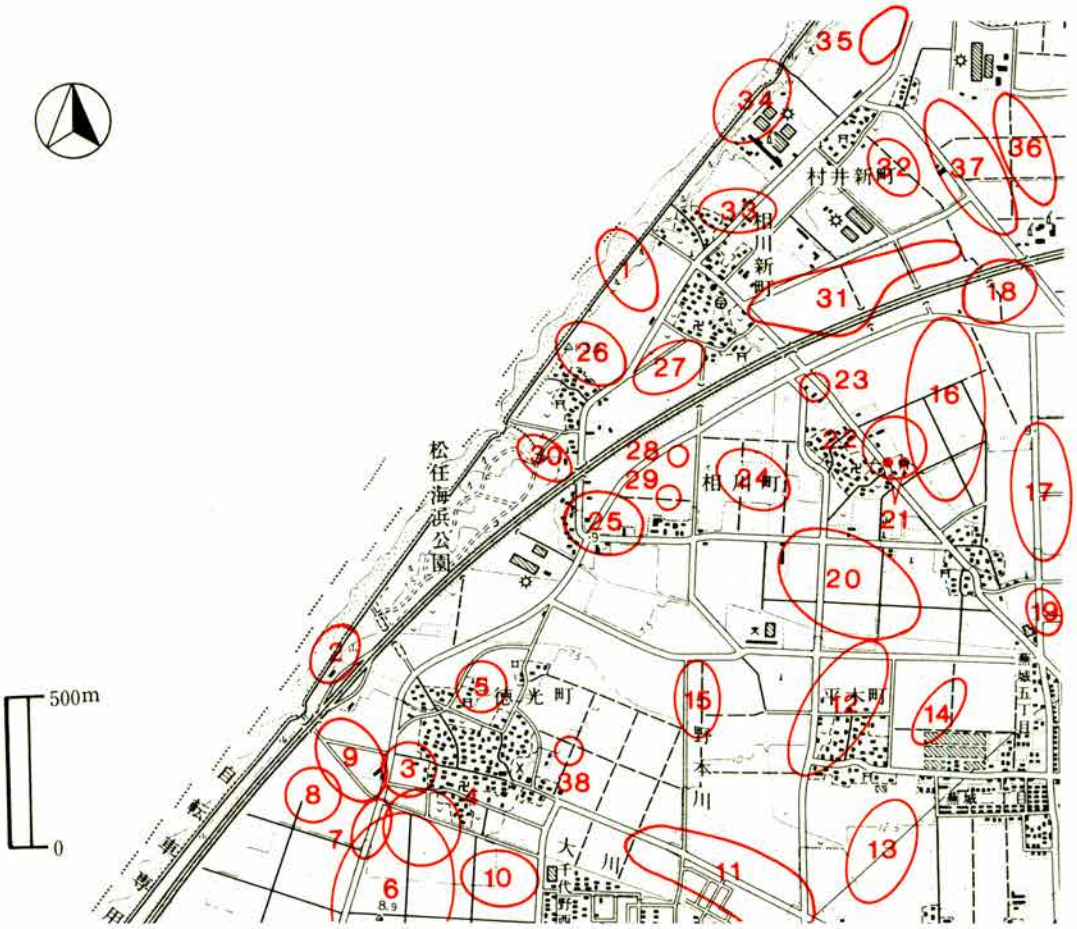
第2節　周辺の地勢

浜相川・相川新遺跡は、松任市相川新町と相川町の境界線にまたがって所在する。遺跡は現海岸線まで約200mと近接し、標高3m前後と低い遺構面は、砂質の土壌に形成される。海岸部は北方の打木町までは、安原砂丘が伸びてきているが、遺跡周辺では消失し遠浅の砂浜となっている。周辺は、県下最大河川である手取川によって形成された手取川扇状地の一部であり、鶴来を頂点とした扇形の末端部にあたる。手取川は古来よりその流路を変え続けており、現在の七ケ用水を次々に河道として南進してきたことが知られている。縄文後・晩期には既に徳光町より南にあったと推定され、以北の地への遺跡の出現と符合していると言えよう。当地に限ったことではないが扇状地では、発達した小河川の解析により、放射状の流路に沿って島状の微高地が形成され、両者が複雑に交錯した地形をなす。当地の遺跡は、浜相川・相川新遺跡も含めてそうした微高地上に立地しており、それによって安定した水利を得たものであろう。このような微地形は明治期

の耕地整理によって削平を受け、現在では見ることはできない。手取川扇状地の扇端部は松任市域をはじめとしてほとんどが水田化され、県下の一大穀倉地帯となっている。

第3節　周辺の遺跡

手取川扇状地の扇端部で遺跡が確認されるのは、現状では縄文後期末まで溯れる。一般には気候の寒冷化やまた手取川の南下に伴う地形の安定が人間の進出を促したと理解されており、時期的にはよく符合する現象と言える。浜相川・相川新遺跡の周辺では、徳光遺跡(第4図2)から採



1　浜相川・相川新遺跡（弥生後期・古墳前期）、2　徳光遺跡（縄文）、3　徳光館跡（不詳）、4　アベノ願証寺跡（不詳）、5　大和隼人館跡（不詳）、6　徳光聖興寺遺跡（室町）、7　徳光ヨノキヤマ遺跡（弥生・中世）、8　徳光B遺跡（不詳）、9　徳光C遺跡（不詳）、10　徳光古屋敷遺跡（古墳）、11　北安田北遺跡（縄文～平安）、12　平木A遺跡（弥生）、13　平木B遺跡（弥生・古代）、14　平木C遺跡（不詳）、15　平木D遺跡（弥生後期）、16　東相川遺跡（古墳・中世）、17　東相川B遺跡（弥生～奈良）、18　東相川C遺跡（不詳）、19　東相川D遺跡（不詳）、20　中相川遺跡（弥生後期）、21　中相川古墳（古墳中期）、22　相川館跡（室町）、23　御手洗川遺跡（古墳）、24　御手洗川B遺跡（弥生後期）、25　野本遺跡（弥生中期・後期）、26　浜相川遺跡（弥生・古墳）、27　浜相川B遺跡（弥生・古墳）、28　浜相川C遺跡（弥生）、29　浜相川D遺跡（弥生）、30　浜相川E遺跡（弥生）、31　相川新遺跡（弥生・古墳・中世）、32　相川新C遺跡（不詳）、33　村井新遺跡（弥生・平安）、34　相川新雁田川遺跡（弥生・古墳）、35　浜竹松遺跡（弥生～奈良・中世）、36　浜竹松B遺跡（古墳）、37　浜竹松C遺跡（古墳）、38　徳光ジョウガチ遺跡（弥生）

第4図　周辺の遺跡分布（S＝1/25,000）

集された縄文晩期に位置付けられるらしい粗製土器[1]がもっとも古相を示す。弥生中期の遺跡はやや数を増し、徳光ヨノキヤマ遺跡[2]（7）、野本遺跡[3]（25）、相川新遺跡[4]（31）などで見られる。さらに東へ目を移すと、八田中ヒエモンダ遺跡[5]、横江古屋敷遺跡[6]、上荒屋遺跡[7]などが追加される。各遺跡間にはそれぞれある程度の距離が空いて展開するが、7.5m前後のほぼ同標高を測り、それらを線で結ぶと扇状地の常として当然扇形を描く。各遺跡は弥生中期でもやや時期が異なるものや、性格が不明確なものもあるが、この時期に扇端部の主要地域にそれぞれ集落が形成された可能性が考えられるので、注意しておくべきであろう。

弥生後期、特に後半期以降は遺跡が極端に増加する時期と言える。後期後半期には浜相川・相川新遺跡のほか、周辺に中相川遺跡[8](20)、平木A遺跡[9](12)、平木B遺跡[9](13)、平木D遺跡[9]（14)、東相川B遺跡[10]（17)、相川新遺跡、浜竹松遺跡[11]（35）などが近接して存在し、きわめて遺跡密度が高まっている。各遺跡がどんな事情で群在して成立し、またどんな関係にあったのかきわめて興味深い問題である。後期終末期は引き続き遺跡数が多いものの、前代から継起してくる遺跡や新たに出現する遺跡があるという変化は認められよう。このような弥生後期遺跡群の存在は、当地の大きな特徴と言えるものである。

古墳時代にはこうした遺跡群は存続していかず、遺跡数自体も減少していく。古墳中期・後期と引き続く遺跡はほぼ皆無と言え、新たに出現するものを除くと、浜竹松遺跡や倉部出戸遺跡[12]のように前期で終息するか、または相川新遺跡のように断絶をおいて中期・後期にまた活動するかのパターンとなる。古墳の出現を画期として弥生時代の集落や墓域が解体し、新たに編成されて行く過程と捉えればよいのだろうか。

古代においては、北安田北遺跡[13](11)のようにやや扇央に寄って位置する遺跡がよく見られ、灌漑技術の進歩が窺われる。また、継起性に乏しい遺跡が多い中で、東相川B遺跡（17）は、短期間の断絶をおくものの弥生後期から奈良時代まで継続する例外的な遺跡と言える。

中世においては、伝承や文献に残る遺跡が多く見られ、徳光聖興寺遺跡（6）、徳光館跡（3）、相川館跡(22)、倉部館跡などがあげられる。また、浜竹松遺跡も含めて、かなり海岸寄りに選地する臨海遺跡となっている点も、漁撈や海運等の利便さからも注意したい。

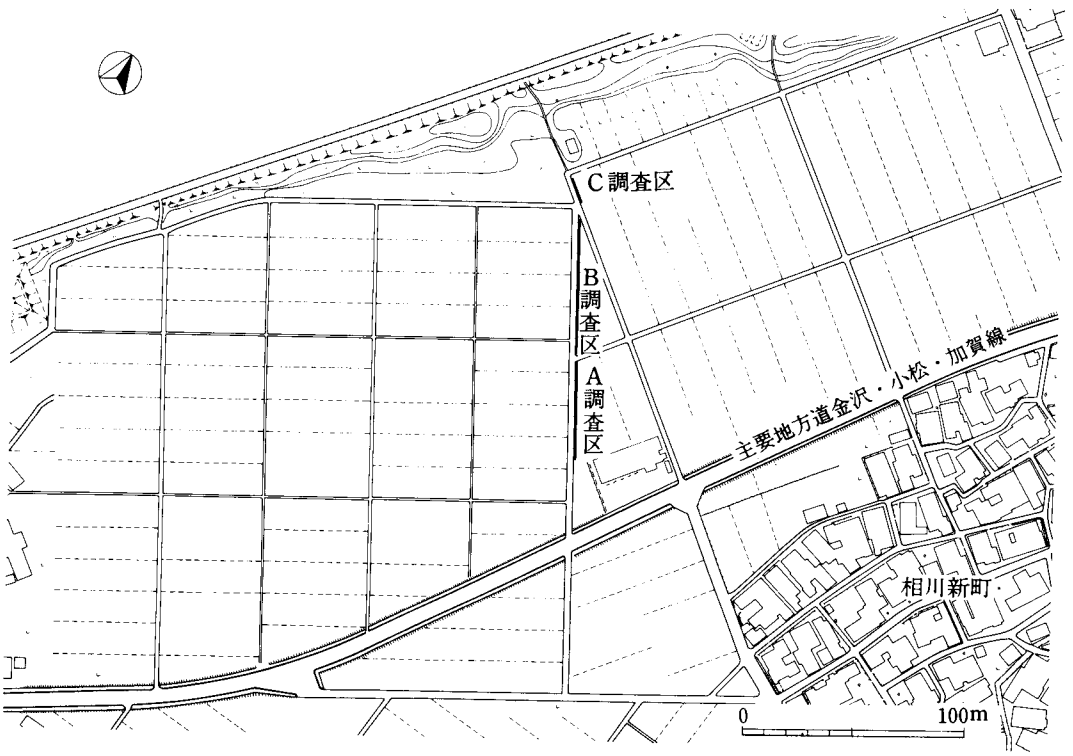
手取川扇状地の扇端部において、遺跡のあり方や地域史を考えるには、留意せねばならない点が幾つかあるが、各時代に共通して注意したいのは、海岸線がどのような状況にあったかという地理的な問題であろう。おそらく一様に安定したものであるはずがなく、当然人間の経済活動や諸産業に深く関わるであろうだけに、決して軽視することはできない。また、継起性に乏しい遺跡が多いといわれるが、同一遺跡内・同一微高地内の狭い範囲での移動をくり返しながら長期間営まれている遺跡がより多く存在している可能性も考えておくべきであろう。

第２章　浜相川・相川新遺跡の発掘調査

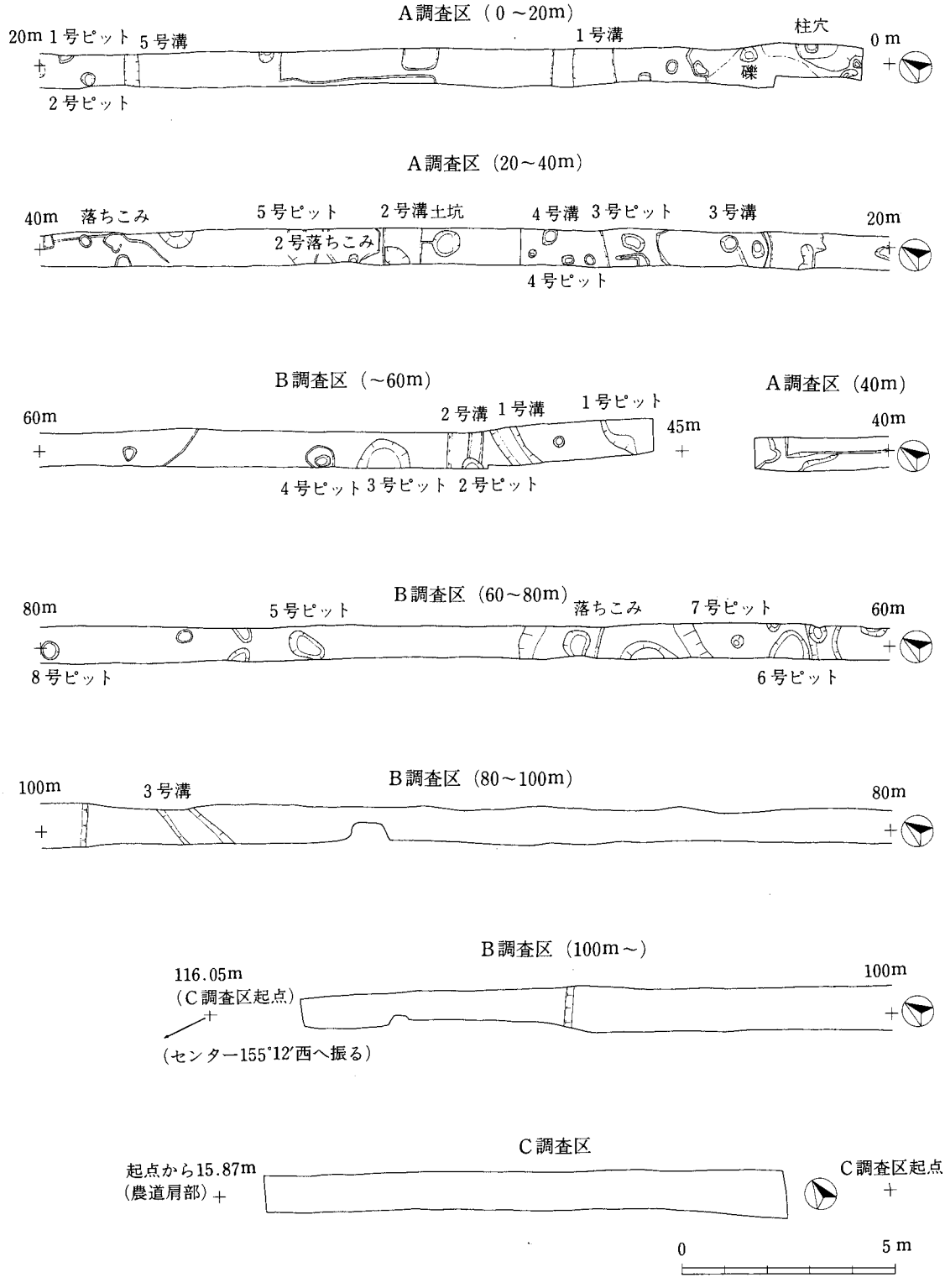
第１節　調査の概要

１．調査区の設定

排水路設置に際して、遺跡が損壊を受けるのは幅約２ｍ、総延長120ｍの区域であり、その面積約240㎡が発掘調査の対象となった。調査担当者が松任土地改良事務所及び施工業者と協議した結果、幅約50㎝の既設の排水路をより大型のコンクリートＵ字溝に付け替える工事を行うので、既設の排水路部分については設置時に攪乱を受けているものと判断し、その東側に平行して幅約１ｍの調査区を設定した。調査区の主軸は水路のセンターから１ｍ東を平行するラインであり、山側を起点（０ｍ）とし、海側へ向かって10ｍ、20ｍと進めていった。主軸はＮ－33°－Ｗを指すが、起点から116.05ｍの地点で水路の折れ曲がりに沿って25°西へ振るため、以降はＮ－58°－Ｗを指す。45ｍ付近ではコンクリート溝が埋設されており掘削が不可能な状況であった。また115ｍ付近では作業用仮設道路が交差するため、同様に掘削できなかった。よってトレンチが２地点で途切れて計３箇所の調査区に分かれ、起点から向かって順にそれぞれＡ調査区・Ｂ調査区・Ｃ調査区と呼称した。遺構・遺物の位置については、Ａ・Ｂ調査区については起点（０ｍ）からの、Ｃ調査区についてはその起点（116.05ｍ）からの絶対距離で表している。



第５図　調査区の位置（Ｓ＝1/3,000）



第6図　調査区全体図（S＝1/150）

2．発掘調査

発掘調査には平成２年11月６日から27日までを要した。Ａ調査区とＢ調査区に厚く堆積した包含層が確認され、弥生土器や土師器などが多量に出土し、石器、緑色凝灰岩製の管玉やその未製品も出土した。遺構はＡ調査区で柱穴・土坑・溝・落ちこみ・ピットが、Ｂ調査区で溝・落ちこみ・ピットが検出された。Ｃ調査区では、包含層の堆積は認められたが遺物の出土はＡ・Ｂ調査区に比べて散漫で、遺構は検出されなかった。出土遺物はパンケースで10箱に及び、整理作業は社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して平成３年４月４日から６月20日まで行っている。

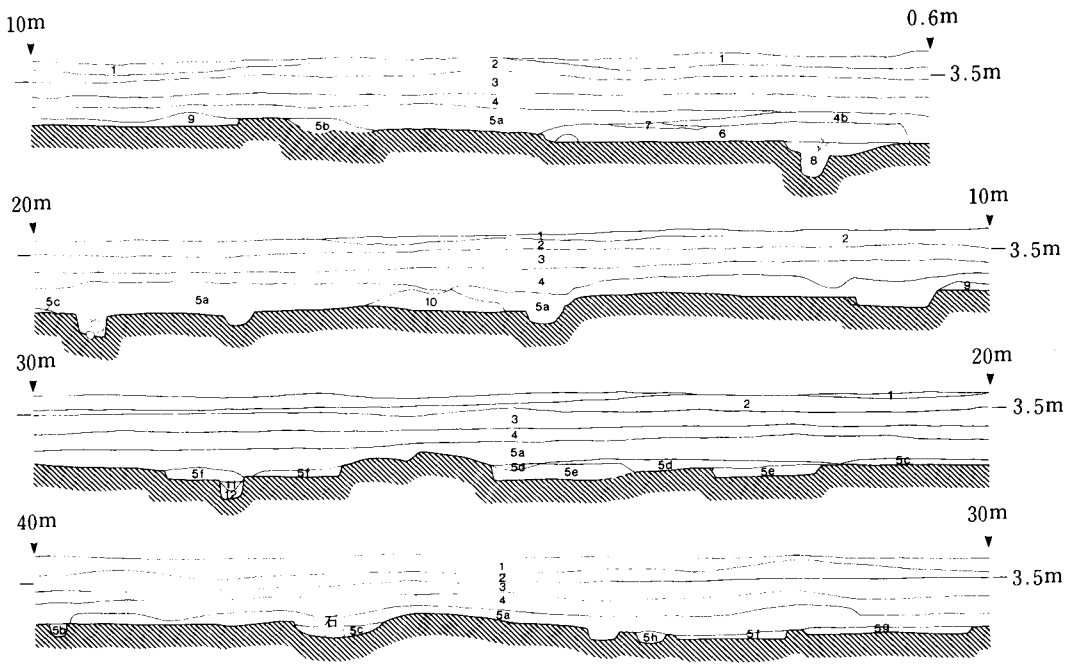
調査担当及び調査補助員・作業員は下記の通りである。

調査担当　川畑　誠、安　英樹

調査補助員　藤重　啓

作　業　員　川向好子、北川百合子、斉田寿子、沢野文栄、西野　翠、東　美佐子、山田高子（以上相川新町）、藤本春枝（村井新町）、山　信子、山　静子、東　陽子、打木喜美江（以上東相川町）

3．基本層序（第７図・第８図）

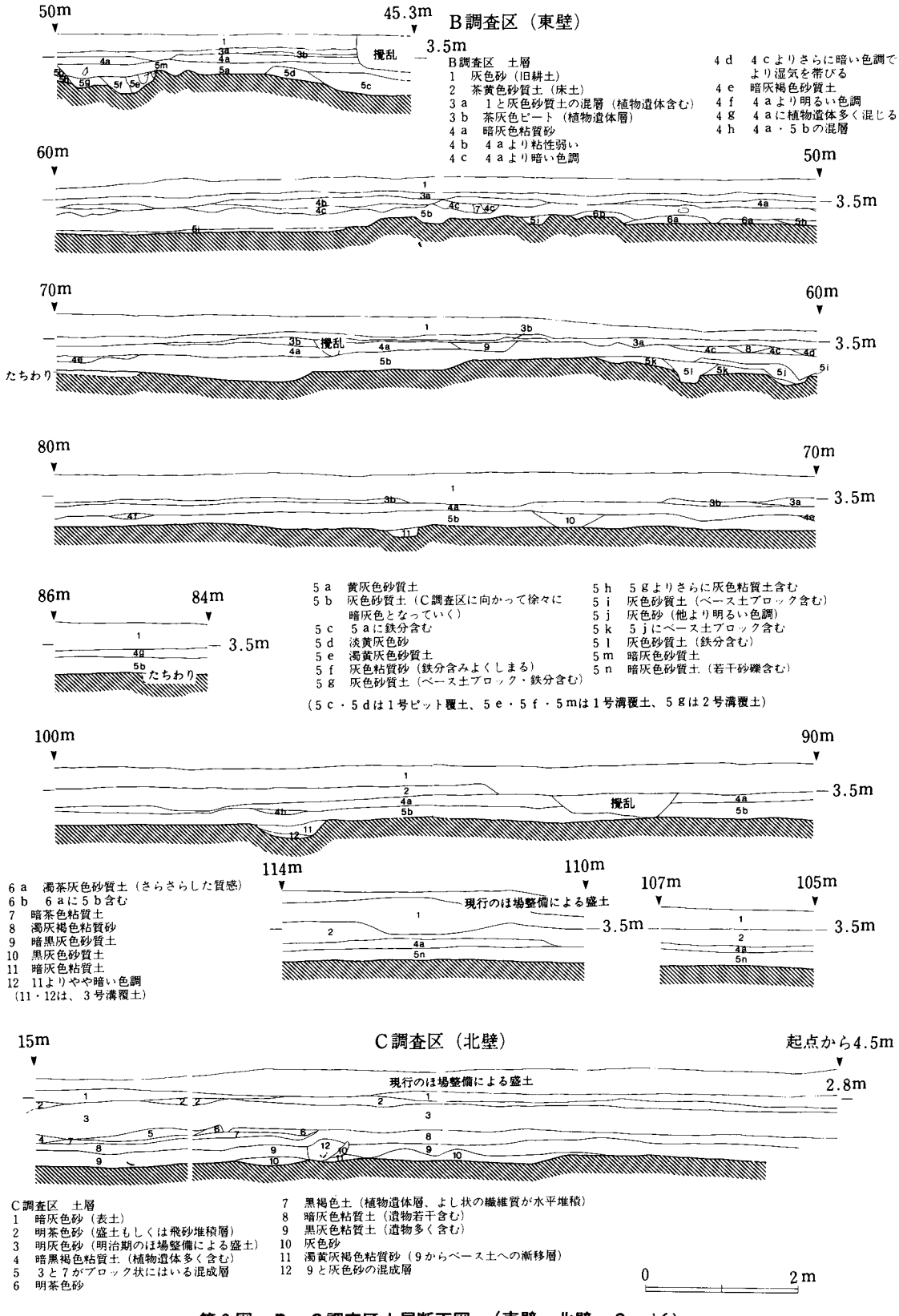


Ａ調査区　土層
1　灰色砂（旧耕土）
2　暗黒褐色粘質土（植物遺体含む）
3　暗灰褐色粘質土
4ａ　黒褐色粘質土
4ｂ　黒褐色粘質土（４ａより明るい色調）
5ａ　暗灰褐色粘質土
5ｂ　５ａと同質でより明るい色調
5ｃ　５ａにベース土ブロック少し混じる
5ｄ　５ａにベース土ブロック多く混じる
5ｅ　５ａにベース土ブロック混じる
5ｆ　５ａにベース土ブロック・砂ブロック混じる
5ｇ　５ａにベース土ブロックと植物遺体混じる
5ｈ　５ａにベース土ブロックごくわずかに含む
6　暗灰褐色土
7　６に５ａが混じる混成土
8　青灰褐色砂質土
9　明灰褐色砂質土
10　黄褐色砂質土（遺構廃棄後の堆積砂か）
11　白色粘砂
12　青灰色シルト

（５ｂは１号溝覆土、５ｄ・５ｅは３号溝覆土、５ｆは４号溝および２号落ちこみ覆土、５ｇは２号溝覆土、６は柱穴に伴う可能性のある溝の覆土、８は柱穴覆土、11・12は４号溝内小穴の覆土。）

0　2 m

第７図　Ａ調査区土層断面実測図（東壁、Ｓ＝1/80）



第8図　B・C調査区土層断面図　（東壁・北壁、S＝1/80）

調査区の層序はA・B・Cの各調査区を通して比較的共通した堆積状況を示し、上から順に盛土・耕土、床土層、次に包含層、最後に遺構面（ベース土）に整理される。さらに包含層については植物遺体の含有が顕著な上部と、それより明るい色調を呈しほとんどの遺構の覆土と共通する下部の2層に分層が可能であった。本書ではこれらをそれぞれ包含層上層、包含層下層と呼びあらわしている。また、盛土、耕土、床土層と包含層間に植物遺体層が認められる場合が多い。これは、包含層の上面が表土であった時に生育していた植物が飛砂や整地等で埋没して生じたものと考えたい。以上から、浜相川・相川新遺跡の基本層序は第1層盛土・耕土・床土、第2層植物遺体層、第3層遺物包含層上層、第4層遺物包含層下層、そしてベース土となる。

A調査区においては、第1層が1、第2層が2、第3層が4 a、第4層に5 aがそれぞれ相当する。ベース土は青灰色の砂質土であり、自然礫を含む部分も見られる。3は間層的。包含層は多量の遺物を含み、粘性は弱い。5 aの暗灰褐色粘質土は遺構覆土である5 b～eと基本的には同質であるが、色調の違い、ベース土・砂・植物遺体の有無などの点で識別される。遺構面の標高は3m前後に終始する。

B調査区においては、第1層に1・2が、第2層に3 a・3 bが、第3層に4 a～hが、第4層に5 a・5 b・5 nがそれぞれ対応する。ベース土は起点から45.5mから65m付近までは灰色砂質土が黄色みがかって続くが、それ以降は自然礫が多く含まれるようになり、それにともない遺構も希薄になっている。第2層は84m付近以降は確認されなくなる。包含層はA調査区よりさらに粘性を弱め、砂質土となるが、多量の遺物を含む。第4層は45.5m～50mが5 a、以降5 b、105m付近以降では5 nと徐々に暗い色調となっている。遺構覆土である5 c～mは色調の違い、鉄分・ベース土の含みなどの点で第4層と識別した。12・13も遺構覆土で、色調は5 bに似る粘質土である。遺構面はややアップダウンが見られるが約3.1mが平均的な標高値である。

C調査区においては第1層に1・2・3が、第2層に7が、第3層に8が、第4層に9がそれぞれ相当する。ベース土は黄色みがかった灰色砂質土であるが、大部分は層厚10cm程度の薄い堆積で、その下の礫層が基盤となっている。包含層は弱い粘性を持ち、色調は上層が明るく下層が暗い。遺物はA・B調査区に比べて散漫な出土状況を示し、図示しうるものはない。遺構面の標高はB調査区からは急激に下降しており2mを前後する。3は明治期のほ場整備の盛土と見られ、この地が当時から落ち込みを補って水田として利用されていたことを示している。

第2節　A調査区の遺構と遺物

1．遺構と遺構出土遺物

柱穴（第9図、出土遺物第10図1）

起点から2mの地点に存在する。遺構の半分は調査区外に出て未掘であるが、平面形は円か隅丸方形を呈すると推定する。規模は幅約30cm、深さ約27cmを測る。覆土は灰色砂質土であり、ベース土に近い質である。遺構は浅い窪み内に位置しており、窪みは柱穴と同じ覆土をもって溝状に東南方向に伸びて行くようである。柱列軸に溝を重複して持つ掘立柱建物、いわゆる布掘り建物の末端の可能性があるが、この部分だけでは何ともいえない。出土遺物は土器であるが、検出面

からの出土が主であり、覆土にはほとんど含まれていなかった。第10図１は甕形土器である。無文の有段口縁を呈する。

土坑（第９図、出土遺物　第10図２・３）

30.5mに位置する。平面形は不整な円形を呈する。規模は径約60cm、深さは７cmを測り、皿状の断面を示す浅い遺構である。覆土は包含層よりやや明るい色調の暗灰褐色弱粘質土である。遺物は土器が覆土から比較的多く出土している。第10図２・３はともに甕形土器である。２は強く外傾・外反して開く無文の有段口縁を呈する。３は口縁の先端を内面に肥厚する、土師器のいわゆる布留系甕である。口縁部外面一面に黒色の油脂らしき物質が被膜状に付着している。

１号溝（第９図、出土遺物　第10図８）

７mに位置し、調査区の主軸に直交して北東・南西方向に伸びる。幅は90cmから１mと広い。検出面は北岸のほうが南岸より高くなっており、深さは北岸からは約20cm、南岸からは約６cmとなるが、底面は平坦である。覆土は暗灰褐色弱粘質土である。遺物は覆土から土器が出土している。第10図８は土師器の小型器台で、器受け部径８cm、器高10cmを測る。器受け部は余り伸びず、脚部は八の字状にゆるやかに広がる低平な器型を呈する。透かし穴は周縁の粘土の盛り上がりがないが、焼成前穿孔時にきれいにかきとったものと見たい。

２号溝（第９図）

31～33mの範囲に、調査区の主軸に直交して溝状遺構が並走しているが、31mから32mにかけての形の整った部分をここでは２号溝と捉える。幅90cm前後、深さ約10cmを測る。覆土はベース土ブロック・植物遺体を含む暗灰褐色弱粘質土である。遺物は覆土から土器が出土した。

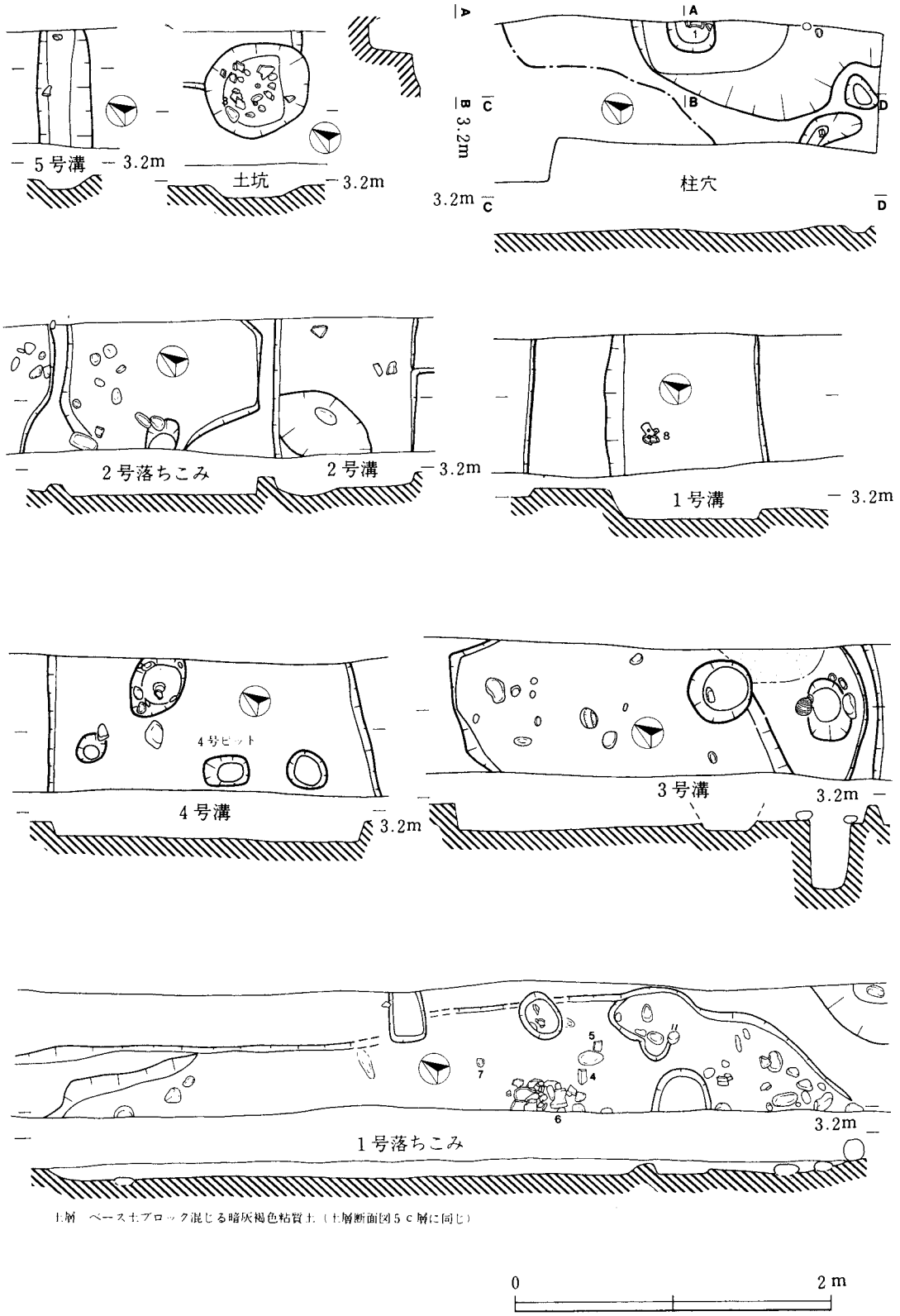
３号溝（第９図、出土遺物　第10図９～11、第26図５）

調査区の主軸に直交する22.8mの北側の落ちから24.8mの落ちまでを遺構と捉える。幅は2.4～2.7mと不揃いで、深さは15cm前後を測る。遺構底面は比較的平坦であり、２基の小穴が確認された。そのうち南側のものは約40cmの深さの円筒形の掘り込みで、柱穴の可能性を持つ。北側のものはより上層から掘り込まれたものである。覆土は暗灰褐色弱粘質土で、ベース土の含みぐあいにより、２層に分けられる。遺物は覆土から土器のほか、緑色凝灰岩剝片が出土した。第10図９・10は甕形土器であり、どちらも無文の有段口縁を呈する。９は口縁帯があまり伸びないもので、胎土が精良なため壺の可能性もある。10は口縁帯下端が凸帯状に張り出している。頸部直下に行われる連続刺突は弥生時代後期後半の北陸甕の大きな特徴の一つといえる。11は壺形土器で、小型の品。３条の沈線を持つ有段口縁を呈し、ヘラミガキ・赤彩で仕上げる。第26図５は緑色凝灰岩の剝片であり、玉製品の製作工程で生じたものであろう。

４号溝（第９図）

27mから29mにかけて存在し、調査区の主軸に直交して伸びる。幅は２m前後、深さは７～９cmを測る。比較的平坦な底面の遺構内には４号ピットを含む４基の小穴が確認されたが、いずれも小規模で数cmの深さしかない。覆土はベース土・砂ブロックを含む暗灰褐色弱粘質土である。遺物は覆土から土器が出土した。

５号溝（第９図）

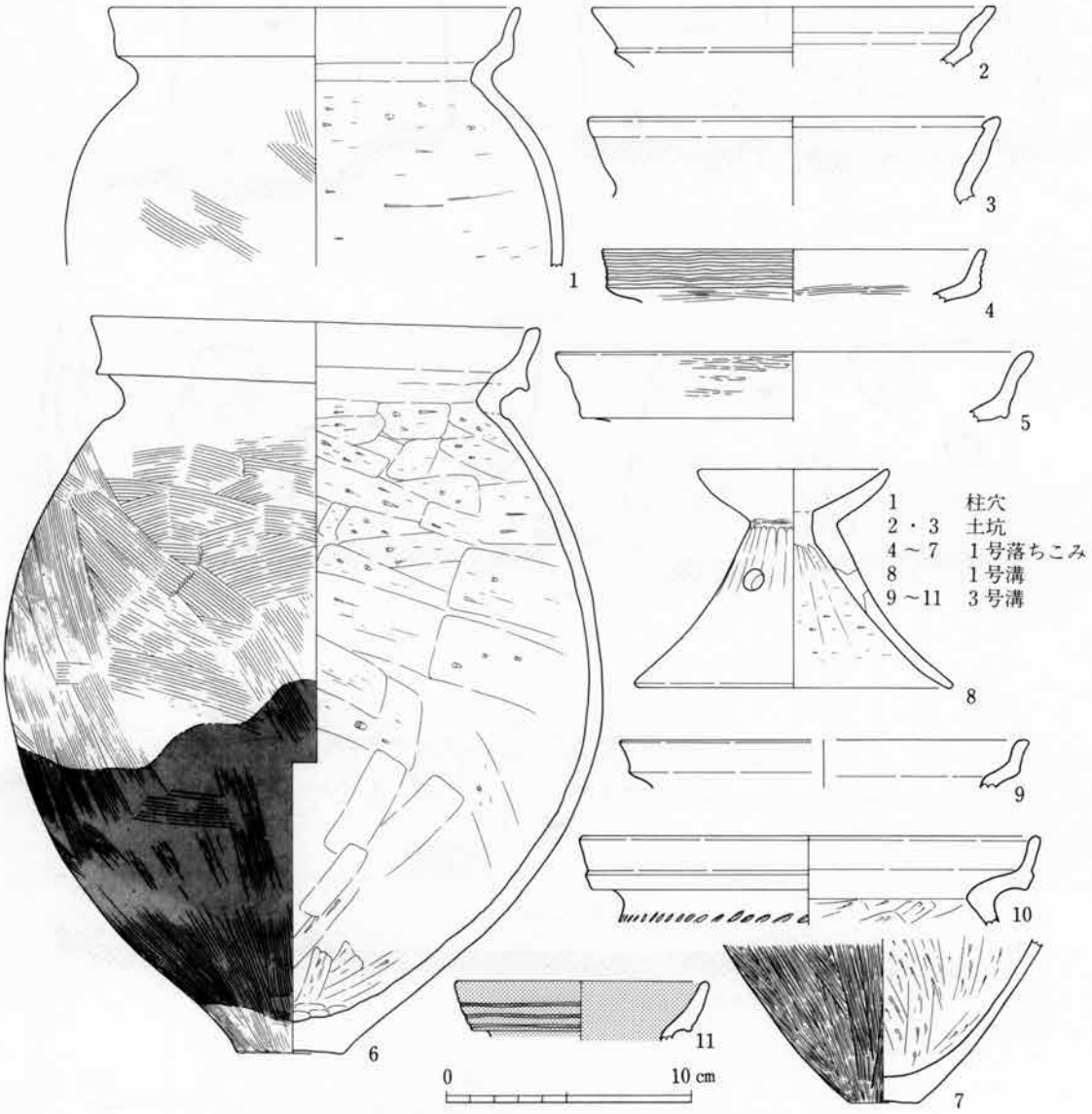


第9図　A調査区遺構実測図（S＝1/40）

18mに位置し、調査区の主軸に直交して伸びる。幅は29～34cm、深さ6～9cmを測る。覆土は包含層下層と同一である。遺物は覆土から土器が出土した。

1号落ちこみ（第9図、出土遺物　第10図4～7、第16図7）

37mから42mにかけて位置し、調査区の南側へ続いて行くようであり、平面形・規模は現状では不明であるが、部分的には5mを超えている。深さは最大でも12cmと、浅い遺構である。比較的平坦な底面には上層から掘り込んだ小穴がいくつか確認されるが、浅い。覆土はベース土の混じる暗灰褐色弱粘質土である。遺物は覆土から比較的多くの土器が出土した。第10図4・6・7は甕形土器である。4は擬凹線を施す有段口縁を呈するもので、口縁帯があまり伸びないタイプ。6はほぼ完形で、無文の有段口縁に、最大径を中位に持つ卵型の胴部、自立可能なしっかりした



第10図　A調査区出土遺物実測図(1)（S＝1/3）

平底からなる。口径18～19cm、胴部最大径24cm、底径4.2～4.5cm、器高30cmを測り、中型甕の一般的な法量を示すものと思われる。調整は口縁部ヨコナデ、頸部以下は外面ナナメハケ・内面ヘラケズリであり、内面のヘラケズリは上位横方向・下位縦方向となる。また、底部内面には指押さえ痕が残る。また、胴部外面下半には煤がベルト状に付着し、底部近くでは消失している特徴的な状況は、当時の煮沸形態を考える上で示唆的と言える。7は底部、底径2.9cmを測る平底で自立は可能と思われる。5は壺形土器であろう。無文の有段口縁を呈する。口縁帯は幅5mm前後の板状具によるヨコナデがなされているようであり、器面にはひだ状に凹凸が見られる。第16図7は白色を呈する円礫で、硬質で表面は平滑である。

2号落ちこみ（第9図、出土遺物　第16図8）

32～33mにかけて、2号溝の北に隣接する不整形な溝状の遺構を指す。幅は52cm～1.2m、深さ3～11cmを測る。覆土は砂ブロックを含む暗灰褐色弱粘質土である。遺物は覆土から若干の土器と第16図8の石器の剝片らしき割れ石が出土した。

1～5号ピット（出土遺物第16図5）

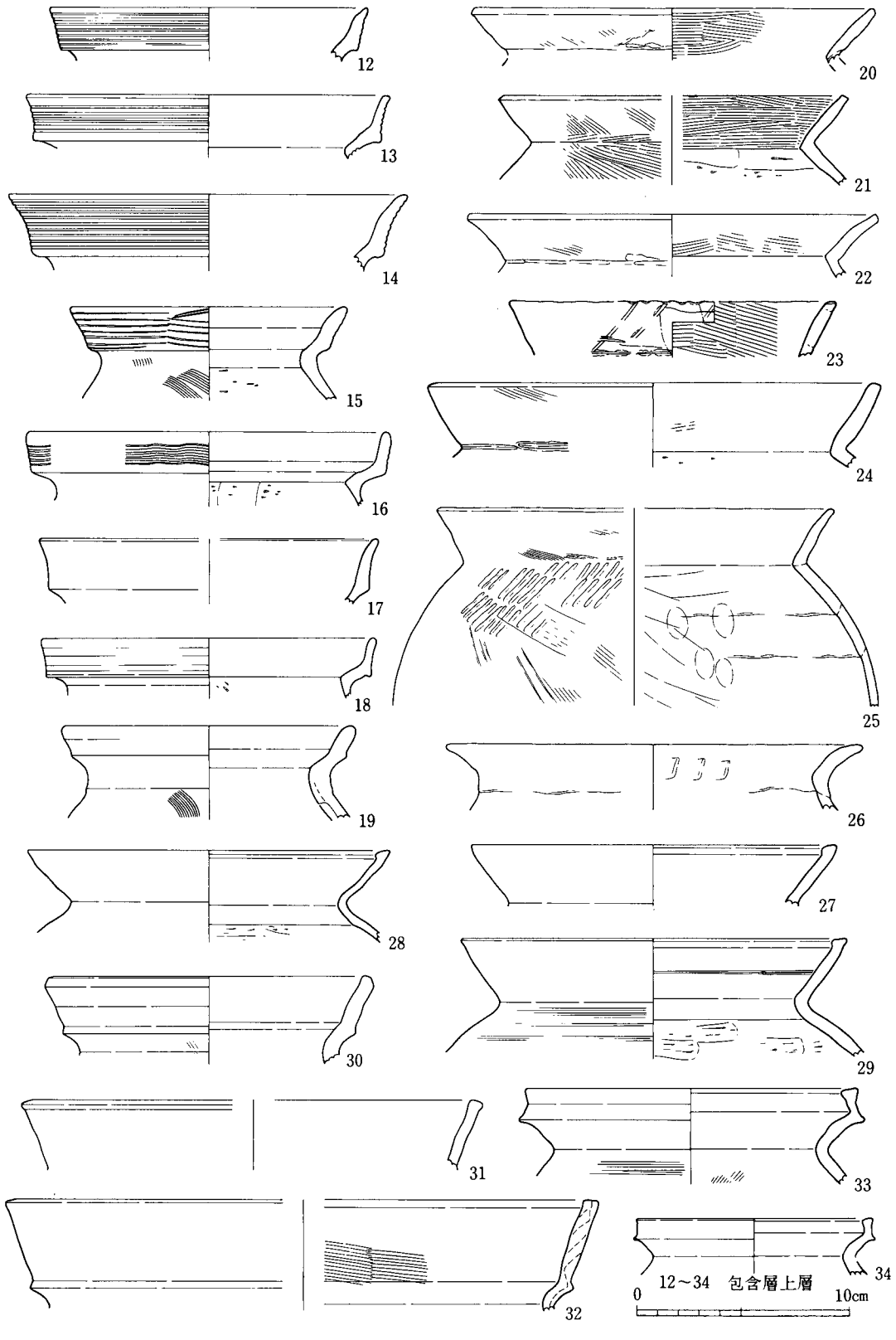
1号・2号は19m、3号は26m、4号は27.5m、5号は34mにそれぞれ位置する。径30cm前後・深さ10cm前後の規模が平均的であるが、3号・5号は径約50cm、1号は深さ約20cmを測る。5号ピットからは第16図5の石器の母岩らしき割れ石が出土している。

2．包含層その他からの出土遺物

包含層上層出土遺物（第10図～第15図、第16図2・4）

甕形土器（第11図）

第11図12～16は有段口縁に擬凹線を持つ甕である。12・14・15は口縁端を尖らせ気味におさめる。14は口縁帯がよく伸びて外反する。15はやや小径の品。16の擬凹線は口縁帯の中位に寄って引かれている。17～19は無文の有段口縁を持つ甕である。19は厚手で全体に丸みを帯びた器型を呈し、第12図37のように壺となる可能性がある。20～26はくの字口縁を持つ甕である。20～25は屈曲が明確で直線的に伸びる口縁部である。うち20～24については、20～23の口縁の内面のヨコハケ調整、22～24の頸部外面に見られる細いヘラ状具による沈線状のなぞりなど、共通した特徴がある。23については器面にヨコナデが観察されず、口縁端部に押圧が加えられている。25は頸部から胴部上位の外面にタタキを残しており、それ以下はハケ調整となる。部分的なヘラケズリも見られ、タタキを消している。内面は板状具および指頭によるナデで仕上げられており、継ぎ目を残している。タタキは左下がりで、1条の幅約2mm・条間2mm・長さ1.5cm前後の4～5条で1単位となり、その幅は約2cmを測る。26は短い口縁部が外反するもの。器面には凹凸や継ぎ目が観察され、端の一部は窪んでいる。27～29は内湾気味のくの字口縁の端部を内面に肥厚する、古墳前期の布留系甕である。28はきわめて薄手に仕上げられているが、端部の肥厚はそれと対照的に強い。29は全体的に厚ぼったい印象であるが、肥厚は控えめである。布留系甕は形態的にも技法的にもきわめて斉一性の強い器種であるが、時期差や系譜差によるものなのかこのように細かい形態差がある。30～34は無文の有段口縁を呈するが、口縁帯下端がはっきりとした稜線をもって小凸帯状に突き出る、古墳前期の山陰系甕である。30～32は口縁帯が外傾するタイプで、31・

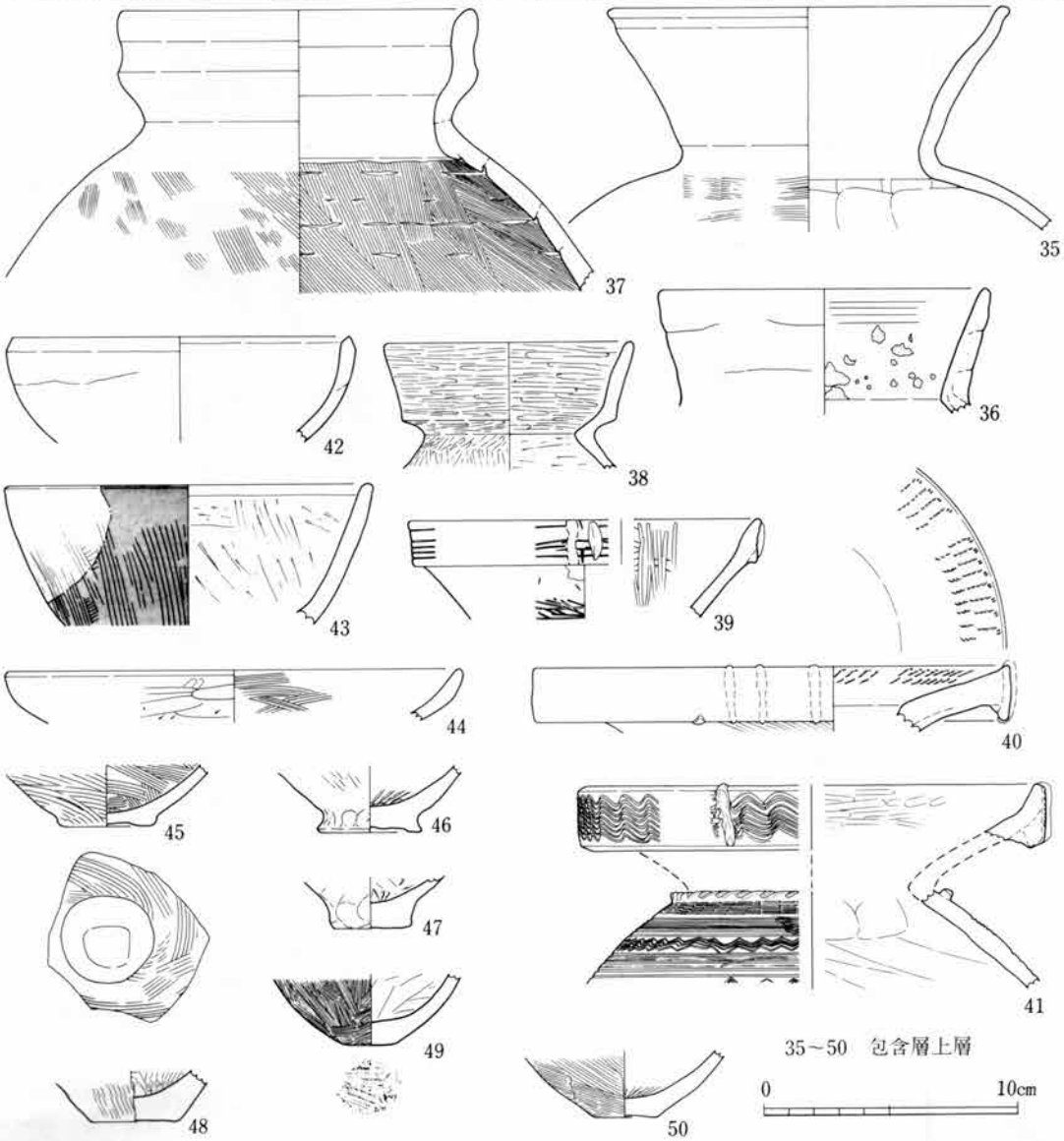


第11図　A調査区出土遺物実測図(2)（S＝1/3）

32は大型品である。33・34は口縁帯が内屈するタイプで概して小型品が多い。

壺形土器（第12図35～41・第13図51・52）

第12図35・36はくの字口縁を持つ壺である。35は大きく伸びる口縁端部に強いヨコナデを行い太浅の沈線状に仕上げる。36は厚手で直線的な口縁部である。仕上げは雑で、継ぎ目が残る。37・38は無文の有段口縁を持つ壺である。37は広口壺で、口径13.8cmを測る。全体的に厚ぼったく、調整はハケとヨコナデを基調とする。胴部内面は成形時の継ぎ目が残り、1.5cm程の粘土帯の幅を確認できる。38は小型の精製品で、口縁帯がよく伸びており、弥生後期終末に多い装飾壺の類であろう。39～41は口縁端部を垂直な面の文様帯とし、棒状浮文を貼り付ける壺。外来系土器に多い装飾で、特に41は東海地方のパレススタイル壺を模倣している。39は沈線と２本１単位の棒状

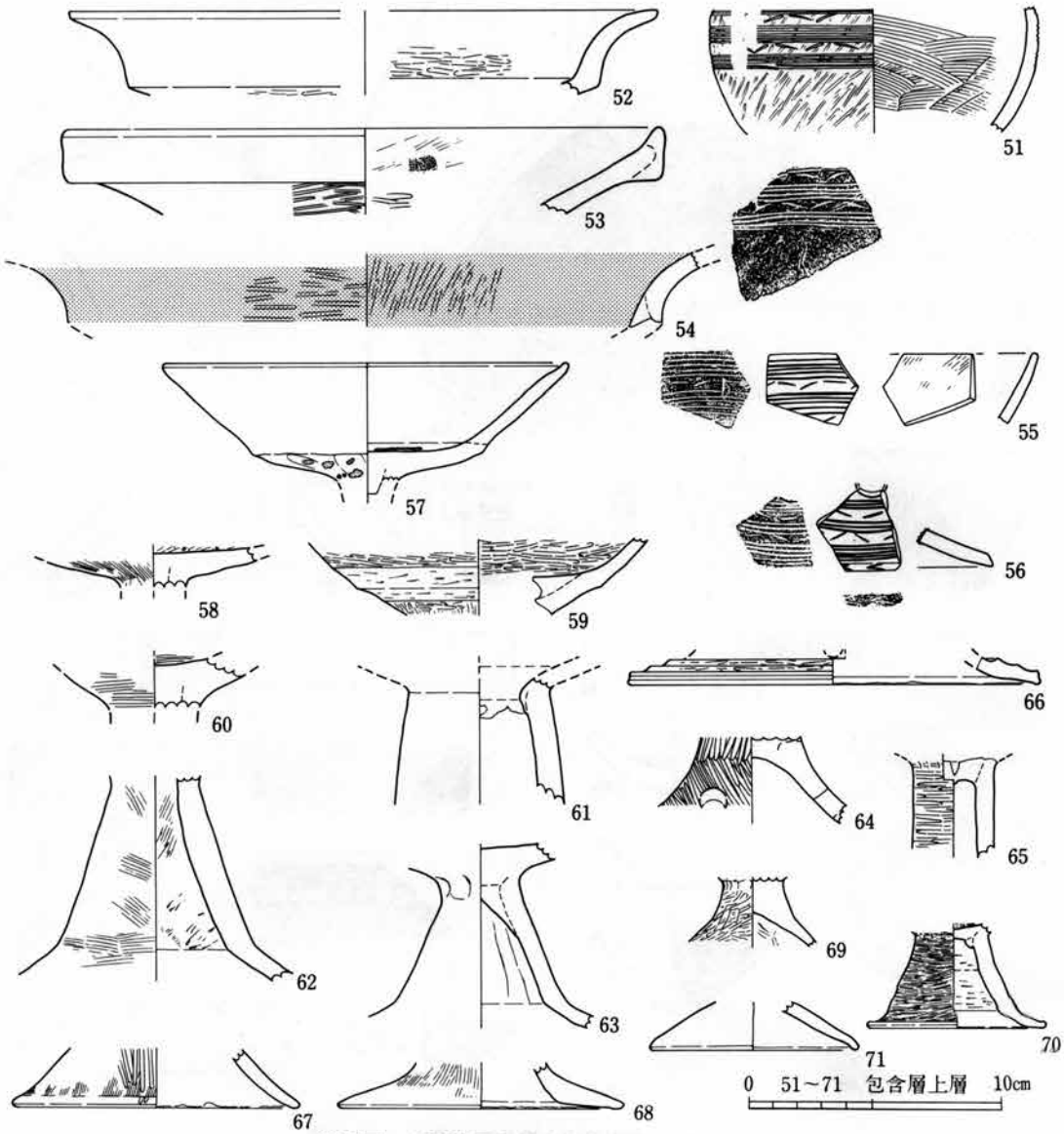


第12図　A調査区出土遺物実測図(3)（S＝1/3）

浮文で飾る。40は水平近くまで開く口縁部で、重厚な作りである。3本以上1単位と見られる棒状浮文と、口縁内面に櫛状具の連続刺突を2段にわたって巡らしている。41は頸部を欠いているため正確な器型は不明である。口縁部は4本の櫛描波状文の複帯と棒状浮文で飾る。頸部は斜め刻みの凸帯、以下は櫛描文で複帯の簾状文・複帯の直線文・単帯でやや角張った波状文・複帯の直線文と連ねる。その下は欠損するが波状文か。第13図51は山形文帯と沈線文帯を交互に巡らす文様を施している。内面にハケをはっきり残していることから、壺の胴部と考えた。52は二重口縁の壺と考えられる。調整はわりに雑で、粗いヘラミガキとヨコナデで仕上げている。

鉢形土器（第12図42～44）

42は口縁先端を尖り気味におさめる。43は火にかけられていたようで、器外面に煤が付着して



第13図　A調査区出土遺物実測図(4)（S＝1/3）

いる。44は小破片であり器型がよくわからないが、口縁直下にヘラケズリが見られることからその下は括れたり伸びたりしないものと考える。

底部（第12図45～50）

すべて平底である。45～47は壺か鉢類の底部か。45は底面が中凹みしており、輪台から成形したものであろう。46は外底面が平滑に調整されており、内底面には放射状の工具痕が見られる。47は径のわりに厚みがあり、円盤状の粘土から削り出したものか。48～50は甕か壺か特定はできないが、いずれも自立は可能であろう。

高杯形土器（第13図54～68）

54は弥生後期後半に多い大型の有段高杯であろう。55・56は沈線文帯と山形文帯を交互に施す文様を持つ高杯である。55は口縁部である。外面に上から沈線・山形文・沈線・山形文と連ねている。56は透かしが設けられ、脚部であろう。外面に沈線帯と山形文帯を連ねる。端部にも施文があり、山形文を矢羽根状に連ねている。57は古墳時代の畿内系高杯。口縁部は直線的に伸びて広がるもので、身は浅い。内面は黒色の油脂状の物質が付着し、部分的に被膜を形成する。59は杯部の稜を削り出している。61～68は脚部である。61～63は若干エンタシス状を呈する脚柱部で、畿内系高杯であろう。62・63は裾部で屈曲して広がっている。64は杯底部から大きく外反して開くタイプで東海系か。65は棒状脚であろう。66は端部を外面に幅広く肥厚してひだ状に段を付けるもので、弥生後期後半によく見られる形態である。68は屈曲して広がる脚裾部である。

器台形土器（第13図53）

53は大型の器台で、弥生後期以来の有段器台の末期的なものか。

蓋形土器（第13図71）

71は笠形の器型の小型蓋であろう。

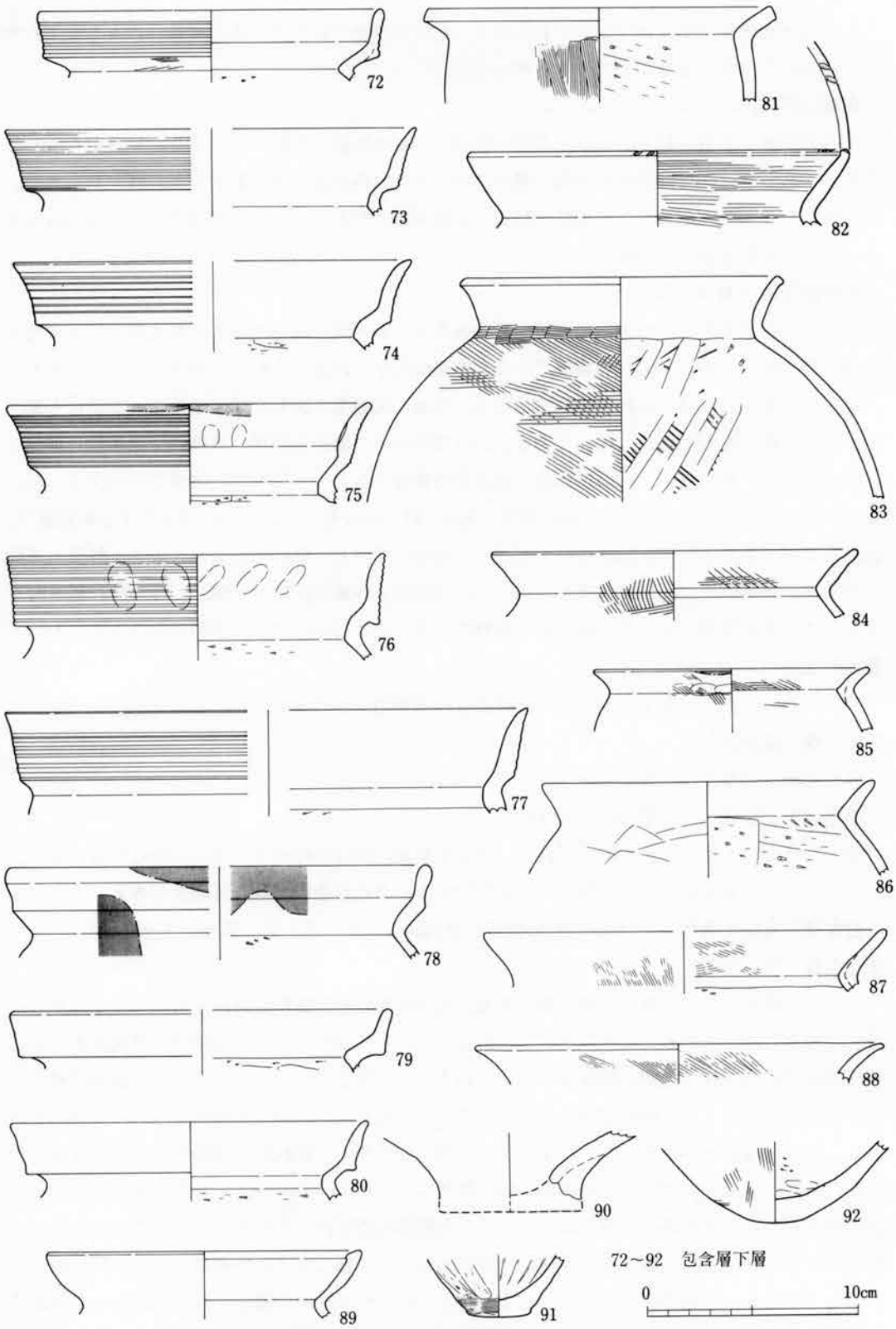
その他（第13図69・70、第16図２・４）

69・70は台付土器の台部と考えられる。69は小型品。70は高杯のミニチュア的な形態を呈し、径７cmを測る。第16図２・４は棒状の割れ石であり、すり石等の石器の可能性がある。

包含層下層出土遺物（第14図～第15図107、第16図１・３・６・９、第26図１～３）

甕形土器（第14図72～89）

72～77は擬凹線を持つ有段口縁の甕である。72が直線的な口縁帯で端部を自然に仕上げるのに対し、73～77は先を細めて尖り気味におさめている。うち73～75・77は口縁帯が外反かもしくは外反気味で、75・76は内面に指頭痕がついている。76に関しては外面にもかすかに凹みが付き、両側からの指押さえの可能性が考えられる。77はやや大型品か。78～80は無文の有段口縁の甕である。78は口縁帯外面がヨコナデにより凹む。79はやや厚手で直線的な口縁帯。80は口縁帯にひだ状の凹凸が見られ、端部はやや細めて尖り気味におさめる。81～88はくの字口縁の甕である。81は厚手で短い口縁の端部に面を取るもので、内面頸部以下にヘラケズリを行っている。82は口縁端部をわずかに立ち上げるもの。刻みは残存1/10程度の口縁に２点しか確認できず、部分的なもののようである。口縁内面はヨコハケがよく残る。83～85は外面の屈曲が鋭い頸部から口縁部の一部にハケが及んでいる。83は屈曲が明確な頸部に簾状文状の痕跡が観察されるが、浅く不明瞭



第14図　A調査区出土遺物実測図(5)（S＝1/3）

で文様的な効果は薄く、むしろ断続的なヨコハケ調整と見たほうがよかろう。85は小型の甕で口縁も短い。外面頸部から口縁部にかけてハケと指頭痕が見られ、成形時に口縁部と胴部を圧着させる過程での調整と考えたい。86は短い素縁の口縁部を持つものであり、頸部以下は内面ヘラケズリを行い、わりに薄手である。87･88は内外面ともハケを残す口縁部であるが、小破片であり、頸部以下の形態は不明である。89は古墳前期の布留系甕、端部は厚い。

壺形土器（第15図93～97）

93・94は無文の有段口縁を持つ壺である。93は赤彩された面の上に黒色の被膜が頸部で確認され、使用時には器面に油脂コーティング等の処理がなされていた可能性がある。94は古墳前期の山陰系の壺か。口縁帯はやや内屈する。95・96はくの字口縁の広口壺である。95はハケをよく残しているが、口縁外面は消してヨコナデで仕上げている。96は外面頸部から口縁部下位にかけて粘土のなでつけや掻き取り、頸部に沈線状の抉りなどの調整が行われている。内外面および断面まで黒色の色調を呈する。97はやや内湾気味で瓠状を呈する口縁部である。

鉢形土器（第15図98・99）

98・99とも弥生後期後半から終末にかけてみられる精製鉢の類か。どちらも面の処理によって有段状の口縁帯を作り出している。

高杯形土器（第15図100・101・104～106）

100は小型高杯の杯部であり、5～6条の沈線帯間を斜め右下がりの連続刺突で埋める文様を外面に施す。101は杯部で、口縁が大きく外反して伸びており、有段高杯と見られる。外面は少し剥離している。104は杯口縁部下位から稜部にかけてヘラケズリ後粗いヘラミガキを行っており、稜を削り出したとみられる。105･106は高杯の脚部であろう。105は棒状の支柱で、おそらく直線的に広がる無段脚が付く、弥生後期後半に多いタイプであろう。透かしの周辺にのみ黒色の油脂状の物質が均一に付着しているが、箇所的に被膜等とは考えにくい。一つの可能性として破損後の蓋等への転用を考えておきたい。106はやや内湾気味の八の字に開くもので、古墳前期の東海系高杯の脚であろう。

器台形土器（第15図102・103）

102は器受け部で、直線的な口縁の有段器台であろう。弥生後期後半によく見られる。103は通孔していること、内面を雑ではあるがヘラミガキしていることから器台器受け部とした。

蓋形土器（第15図107）

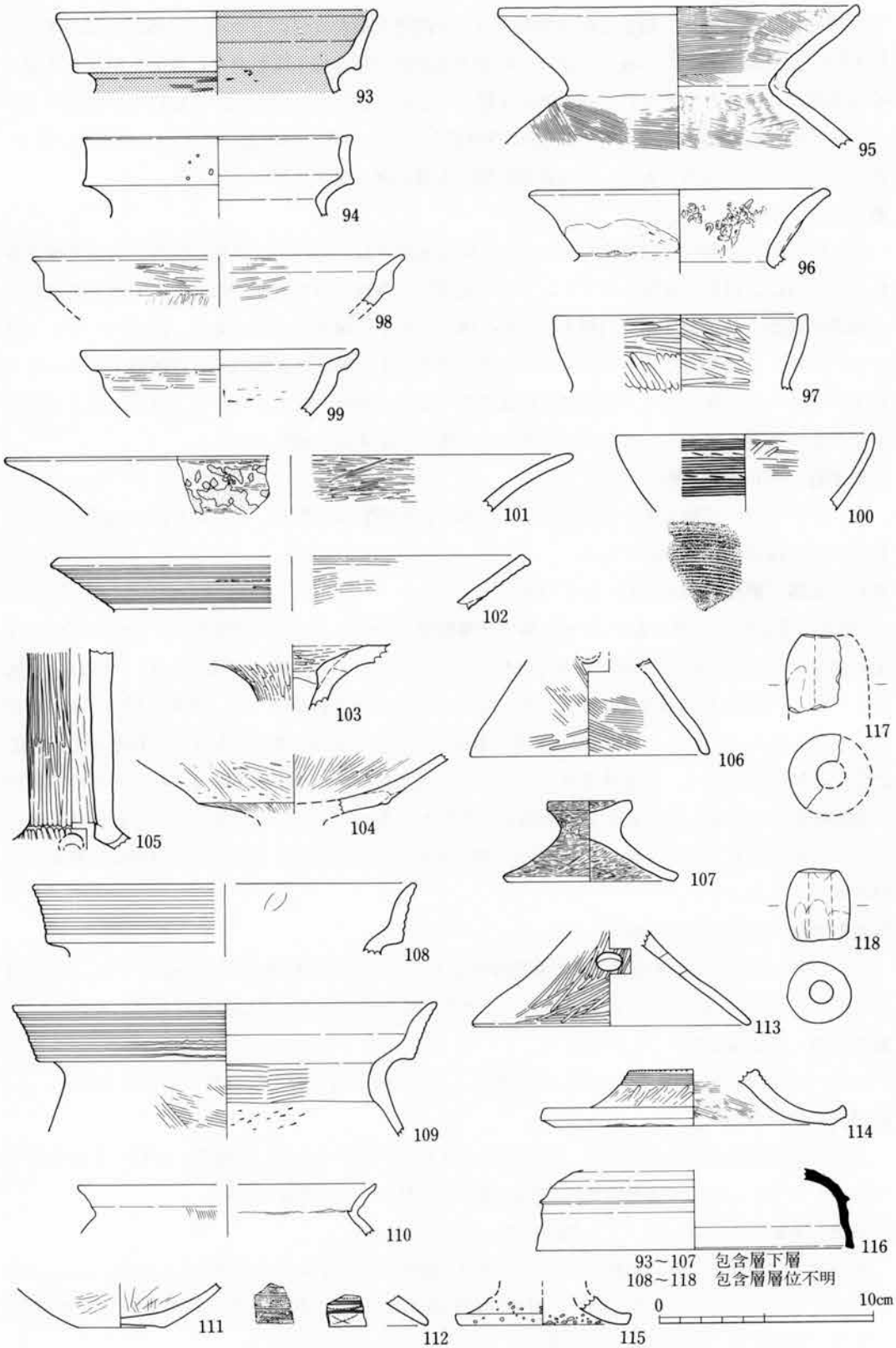
107は小型の蓋で、つまみ部の端に面を取るもの。つまみは完存しており、径4cmを測る。

底部（第14図90～92）

90は底部の円盤が剥落している。91は外面ヘラケズリ調整であり、底面近くは粘土を削り取った後ハケでならしたものと見られる。92は底面が不明瞭でほぼ丸底に近い。

その他（第16図1・3・6・9、第26図1～3）

第16図1は割れ石で、角の部分。すり石等の可能性がある。3は自然礫かもしれない。6は棒状の割れ石である。9は石器の剥片の可能性がある割れ石。第26図1～3は緑色凝灰岩の剥片で、玉製品の製作工程で生じるものである。



第15図　A調査区出土遺物実測図(6)（S＝1/3）

層位不明および表採遺物（第15図108～118、第16図10、第26図４）

108～110は甕形土器である。108・109は擬凹線を持つ有段口縁の甕であり、どちらも口縁帯は外反気味、端部は細めて尖り気味におさめる。109は厚くしっかりした頸部を有し、内面にヨコハケ調整を帯状に残す。110はやや小型のくの字口縁の甕である。きわめて薄手の作りであるが、頸部内面には接合時の段が残る。111は底部で、径４cmの平底である。外面は丁寧なヘラミガキによりきわめて平滑なため、壺であろう。112･113は高杯形土器である。112は脚部であり、外面に貝殻腹縁によると思われる斜線文帯と２条の沈線文帯を交互に巡らす文様を持つようである。113は

第16図　Ａ調査区出土遺物実測図(7)（石、Ｓ＝¼）

第１表　Ａ調査区出土遺物位置一覧表

図No.	出　土　位　置	備　考
第10図１	A-柱穴上面	
2	A-１号土坑覆土	
3	A-１号土坑	
4	A-１号落ちこみ	
5	A-１号落ちこみ	
6	A-１号落ちこみ	
7	A-１号落ちこみ	
8	A-１号溝	
9	A-３号溝北覆土	
10	A-３号溝北覆土	
11	A-３号溝北覆土	
第11図12	A-17～18m、包含層上層	
13	A-28～32m、包含層上層	
14	A-35m、包含層上層	
15	A-36m、包含層上層	
16	A-38m、包含層上層	
17	A-40～41m、包含層上層	
18	A-38m、包含層上層	
19	A-36m、包含層上層	
20	A-30～43m、包含層上層	
21	A-包含層上層	
22	A-20～30m、包含層上層	
23	A-36m、包含層上層	
24	A-36m、包含層上層	
25	A-35m、包含層上層	
26	A-28～32m、包含層上層	
27	A-４～５m、包含層上層	
28	A-10～20m、包含層上層	
29	A-包含層上層	
30	A-42m、包含層上層	
31	A-42m、包含層上層	
32	A-40～41m、包含層上層	
33	A-10～20m、包含層上層	
34	A-10～20m、包含層上層	
第12図35	A-10～20m、包含層上層	
36	A-40～41m、包含層上層	
37	A-41m付近、包含層上層	
38	A-７～８m、包含層上層	
39	A-36m、包含層上層	
40	A-30～43m、包含層上層	
41	A-20～30m、包含層上層	
42	A-０～３m、包含層上層	
43	A-０～２m、包含層上層 ０～３m、包含層上層	
44	A-42m付近、包含層上層	
45	A-36m、包含層上層	
46	A-20～30m、包含層上層	
47	A-17～18m、包含層上層	
48	A-17～18m、包含層上層	
49	A－包含層上層	
50	A-30～40m、包含層上層	
第13図51	A-35m、包含層上層	
52	A-40～41m、包含層上層	
53	A-36m、包含層上層	
54	A-28～32m、包含層上層	
55	A-36m、包含層上層	
56	A-７～８m、包含層上層	
57	A-０～２m、包含層上層	
58	A-５～６m、包含層上層	
59	A-10～20m、包含層上層	
60	A-５～６m、包含層上層	
61	A-包含層上層	
62	A-40～44m、包含層上層	
63	A-40～41m、包含層上層	
64	A-36m、包含層上層	
65	A-０～２m、包含層上層	
66	A-18～19m、包含層上層	
67	A-36m、包含層上層	
68	A-包含層上層	
69	A-0～５m、包含層上層	
70	A-10～20m、包含層上層	
71	A-４～５m、包含層上層	
第14図72	A-38～39m、包含層下層	
73	A-０～10m、包含層下層	
74	A-15m、包含層下層	
75	A-38～39m、包含層下層	
76	A-35m、包含層下層	
77	A-43m、包含層下層	
78	A-38～39m、包含層下層	
79	A-43m、包含層下層	
80	A-32m、包含層下層	
81	A-30～35m、包含層下層	
82	A-０～３m、包含層下層	
83	A-包含層下層	
84	A-33m、包含層下層	
85	A-38～39m、包含層下層	
86	A-25m、包含層下層	
87	A-36m、包含層下層	
88	A-30～35m、包含層下層	
89	A-33m、包含層下層	
90	A-35m、包含層下層	
91	A-32m、包含層下層	
92	A-38～39m、包含層下層	
第15図93	A-38～39m、包含層下層	
94	A-５～６m、包含層下層	
95	A-35m、包含層下層	
96	A-32m、包含層下層	
97	A-33m、包含層下層	
98	A-32m、包含層下層	
99	A-35m、包含層下層	
100	A-33m、包含層下層	
101	A-43m、包含層下層	
102	A-17m、包含層下層	
103	A-32m、包含層下層	
104	A-32m、包含層下層	
105	A-35m、包含層下層	
106	A-36m、包含層下層	
107	A-15～25m、包含層下層	
108	A-０～30m、排土中	
109	A-39m、掘削時	
110	A-32m、包含層	
111	A-排土中	
112	A-排土中	
113	A-39m、掘削時	
114	A-35m、包含層	
115	A-排土中	
116	A-12m、排土中	須恵器
117	A-排土中	土錘
118	A-排土中	土錘
第16図１	A-35m、包含層下層	凝灰岩
2	A-30～43m、包含層上層	凝灰岩
3	A-38～39m、包含層下層	流紋岩
4	A-30～43m、包含層上層	安山岩
5	A-５号ピット	安山岩
6	A-０～５m、包含層下層	砂岩
7	A-１号落ちこみ	珪岩
8	A-２号落ちこみ	安山岩
9	A-38～39m、包含層下層	安山岩
10	表採	頁岩

（石質は小島和夫氏の肉眼鑑定による）

八の字に開き端が内湾気味におさまる脚部で、東海系高杯であろう。114は有段の脚部で、端を少し反り返らせている。段部は連続刻みとその直下に3条の沈線を施す。弥生後期終末から古墳前期初頭の装飾器台に多い特徴である。115は台付土器の台部であるが、小径で、小型品のものであろう。116は須恵器杯蓋である。外面天井部の回転ヘラケズリや、天井部と口縁部の境界の明瞭な突出、全体的に顕著なロクロひだなど、きわめてシャープな稜をなす作りである。やや大振りなもので、法量が縮小する田辺編年TK47型式よりも古く位置付けられ、5世紀後半、TK208～TK23型式に比定しておきたい。胎土や質感などからは和泉陶邑窯周辺の産地が考えられる[14]。117・118は円筒形の土錘であるが、どちらもよく焼き締まった、陶質の品である。118は完形で、長さ3.5cm・径2.9cm・孔径1.1cm・重さ30.5gを測る。117・118は近世以降の所産であろう。第16図10は積層構造の堆積岩で、板状に剝離しやすい質であるため、人為によるものかどうかはわからない。第26図4は玉製品の製作工程で生じる緑色凝灰岩の剝片である。

第3節　B調査区の遺構と遺物

1．遺構と遺構出土遺物

1号溝（第17図）

49m地点に位置し、ほぼ南北方向に伸びる。幅は54cmを測る。検出面は南岸が高く、北岸が低いため、底面は平坦だが深さは南岸で13cm、北岸で7cmを測る。東壁から調査区外では2号溝と切り合っているようであり、こちらが新しい。覆土は3層、濁黄灰色砂質土、灰色粘質砂、暗灰色砂質土である。遺物は覆土から土器小破片が出土した。

2号溝（第17図）

50m地点に位置し、調査区の主軸に直交して伸びる。幅34cm、深さ4cmを測る浅い遺構。東壁の層位では、調査区外で1号溝に切られている。西壁側では2号ピットと重複するが切り合い関係は不明である。覆土はベース土を含む灰色砂質土である。遺構の北側は浅く落ち込んでいる。遺物は検出面および覆土から土器が出土した。

3号溝（第17図）

97m地点に位置し、ほぼ南北方向に走る。幅70～80cm、深さ19～25cmを測る。覆土は暗灰色粘質土で、色調の明暗で上下2層に分けられる。遺物は覆土から土器が出土した。

落ちこみ（第17図、出土遺物　第18図、第24図6・7）

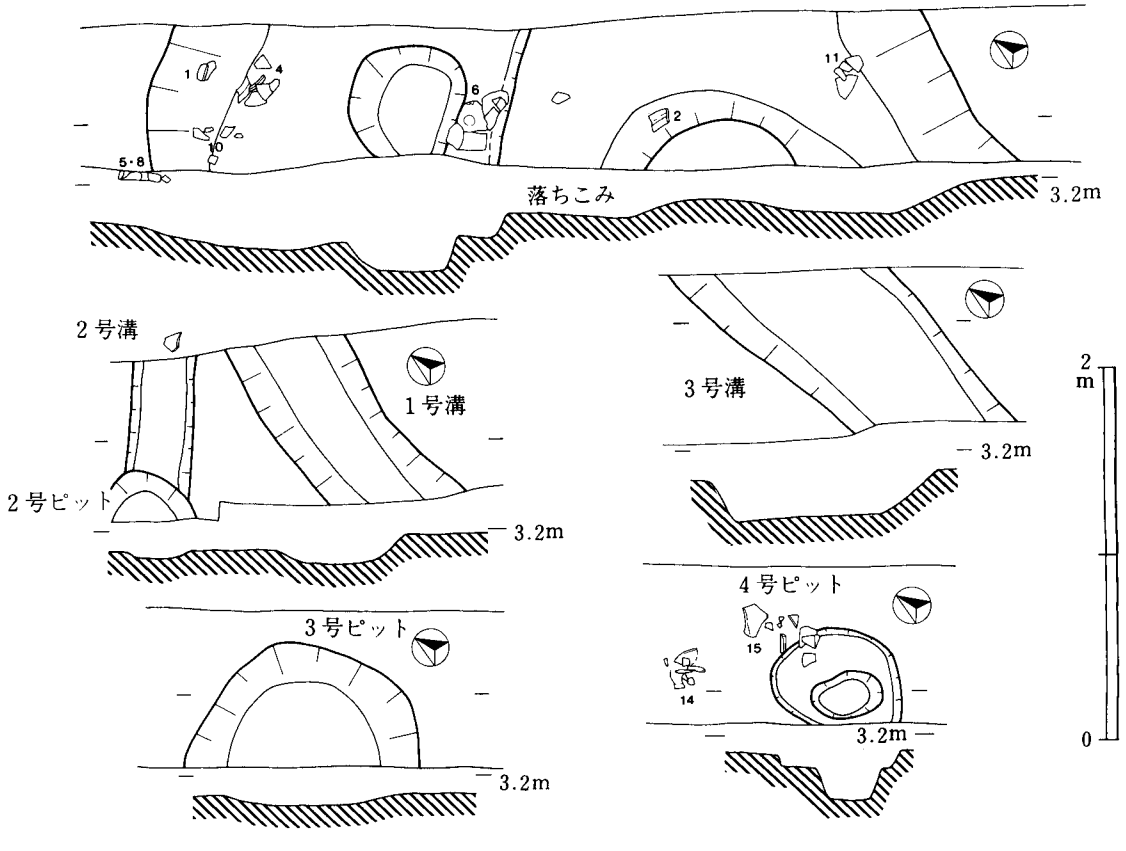
64mの落ちから69mの落ちまでを不明確ではあるが遺構として捉えた。幅は最大で約4.6mを測る。遺構南側の西壁からベース土が張り出しており、南から細めの溝が合流するように見える。底面は北側でさらに一段落ち込んでいるが、全体に凹凸が見られ深さは一定しない。北側の底面には浅い穴状の窪みが確認される。複数の遺構が切り合っていると考えられるが、覆土は包含層下層と同一の単層であり、壁面の層位では確認できなかった。遺物は検出面および覆土上部から土器が比較的多く出土し、また石も若干出土した。

落ちこみ出土遺物（第18図、第24図6・7）

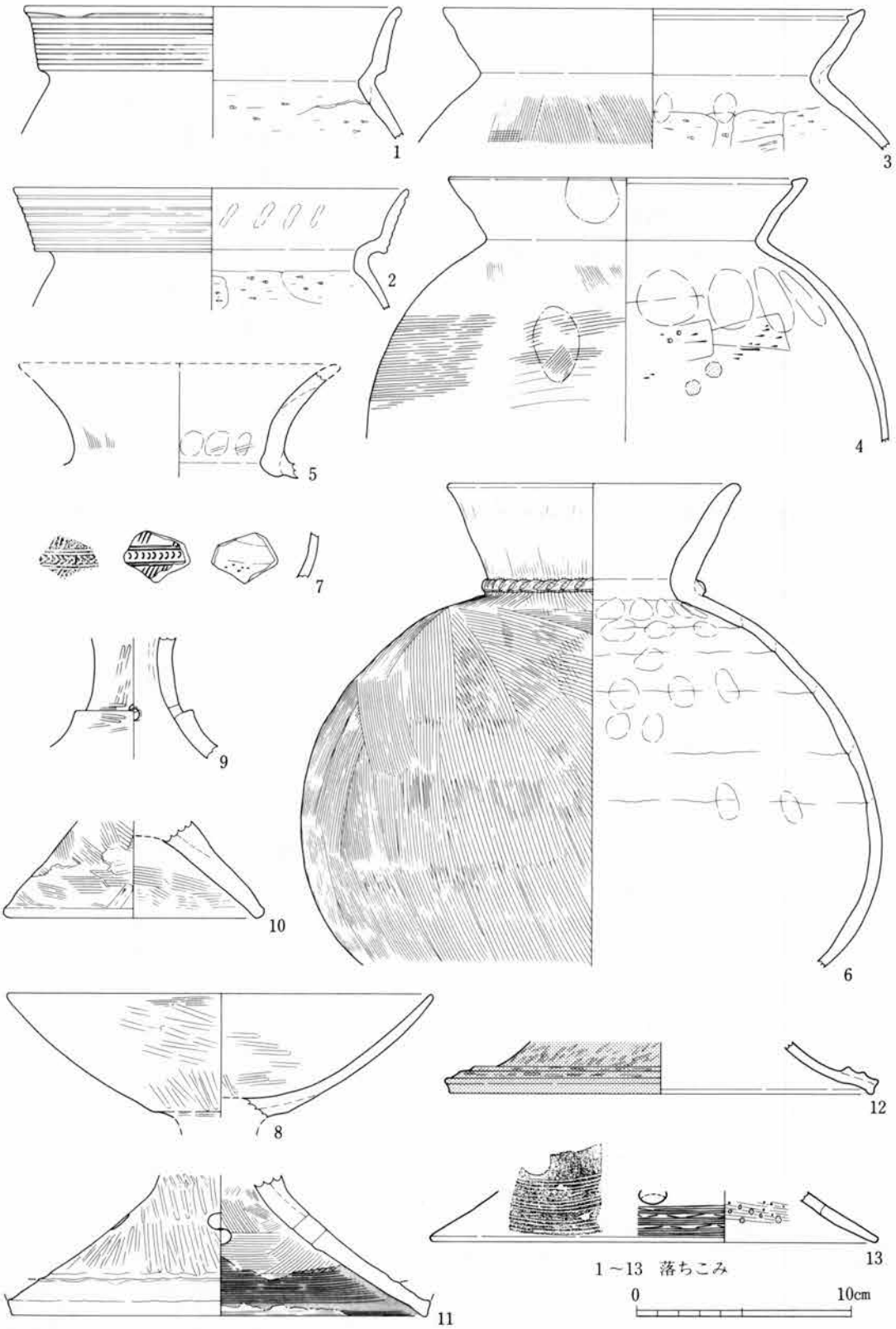
第18図1～4は甕形土器である。1・2は有段口縁に擬凹線を持つ甕である。1は端部を外側

に折り返して丸め、2は細めて尖り気味におさめている。3・4は布留系甕である。4は全体的にやや厚手である。5～7は壺形土器である。5・6はくの字口縁を持つ壺である。5は口縁部が外反する広口壺であり、厚手。6は球形の胴部に直線的に立ち上がる短めの口縁部が付き、頸部には斜めに刻みが入る凸帯が付されている。胴部は外面ハケ、内面ナデ調整であり、内面に継ぎ目や指頭痕が残っている。法量は口径13.6cm、胴部最大径27～28cmを測る。古墳前期の短頸直口壺に類するものであろう。7は装飾壺の胴部であろう。沈線間に小さな爪形文を連続して施す。8は高杯形土器の杯部で、古墳前期の東海系高杯である。杯底部にもつ稜から内湾気味に大きく口縁部が伸びる器型を呈し、杯の身は浅い。9～13は脚部である。9は有段脚であり、おそらくは器台であろう。脚柱部が伸びず、規模的にも縮小していることから弥生後期終末以降の所産と見たい。10・11は厚手の脚部。10は内外面にハケをはっきり残す。台付土器とも考えられる。11は八の字に大きく開く脚部、外面端部は折り返しもしくは凸帯が付いていたが剝落したものとみられる。内面端部は約5cmで煤が帯状に付着しており、破損後の蓋等への転用が考えられる。12も大きく開く脚部で、端部は肥厚しひだ状に仕上げる。13は東海系高杯の脚部とみられ、外面に4～5条の沈線帯3帯、山形文2帯を交互に連ねた文様を施している。第24図6・7は石器の可能性を持つもの。6は凹み石状である。7は割れ石で角の部分。すり石等の可能性がある。

1～8号ピット（第17図、関連遺物第19図14・15）



第17図　B調査区遺構実測図（S＝1/40）



第18図　B調査区出土遺物実測図(1)（S＝1/3）

1号は46m、2号は50m、3号は52m、4号は53m、5号は74m、6号は62.5m、7号は63.5m、8号は79.5mにそれぞれ位置する。1号は規模不明、A調査区北端の窪みとつながる可能性がある。3号・6号は径1m前後と大きいが、深さは10cm前後に過ぎない。4号は2段掘りとなっており、底面までの深さは25cmを測る。ピットは全体的に浅く、出土遺物は土器小破片数点といったものが多い。第19図14・15は4号ピットに近接してまとまって出土したもので、層位的には包含層下層に含まれるが、遺構に関連の深いものとしてここに記述する。14・15とも断面三角形の口縁を有する甕形土器である。14は口縁部・胴部とも遺存が少なく、正確な法量は18cmを測る器高のみである。口縁端部は強いヨコナデにより、ほぼ凹線と同様な浅い凹凸が見られる。15は14とほぼ同じ口径であるが、より頸部が強く括れ、胴部が張り出して法量も大きくなる。口縁端部には明確な凹線を持ち、胴部には刺突が見られるが、部分的であり、連続しない。14・15とも胴部最大径を上位に持つ点、胴部内面のケズリが胴部上位や頸部にまで及ばない点が共通しており、前記した諸特徴とも合わせて、弥生後期前半以前に位置付けられよう。

2．包含層その他からの出土遺物

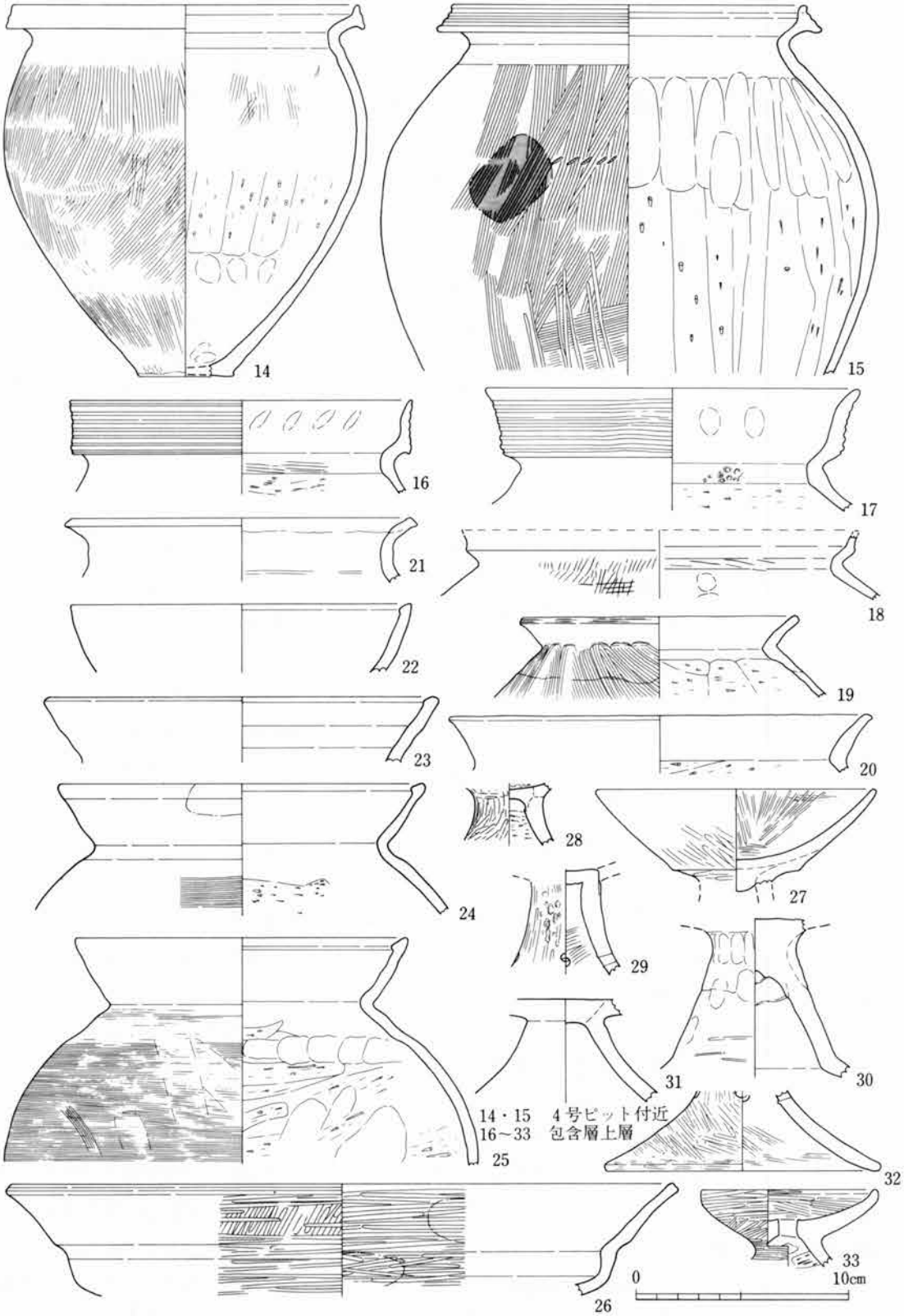
上層包含層出土遺物（第19図16～第20図、第24図5・8～10・13・14、第25図18、第26図7）

甕形土器（第19図16～25）

16・17は擬凹線を持つ有段口縁の甕である。どちらも口縁端部を細めて尖り気味におさめるタイプで内面に指頭痕を持つが、16の口縁帯はほぼ直立するのに対し、17は外反している。また、17は口縁帯外面一面に煤もしくは油脂状の物質が付着している。18は無文の有段口縁を呈するが、その器型や、頸部の外面ヨコハケ・内面ナデ調整等の特徴から、古墳前期の東海系土器の一つである、S字状口縁台付甕と考えられる。単純に立ち上がる口縁から赤塚分類のB類に相当しよう[15]。19～21はくの字口縁の甕である。19は比較的小型で、短いが屈曲の強い口縁を呈する。外面のハケは頸部まで及び、幅1cmほどの原体と確認できる。内面は徹底したヘラケズリで薄く仕上げられる。20も内面にヘラケズリを行っている。21は口縁端部に面を取り、内面にハケを残すことから、古墳前期の北陸東部の在来系甕であろう。22～25は布留系甕。22・23は端部の肥厚が少なめの口縁部である。25は内面の肩部あたりに成形時の指頭痕を連ねているようである。

壺形土器（第20図34～44）

34はきわめて厚手の口縁部で、端部に円形浮文を貼り付け、さらにその上に竹管で押圧を加える、畿内の弥生後期の壺に似る。35は有段口縁の壺。無文の口縁帯に竹管による押圧を行っている。36は垂下拡張した口縁帯に角ばった波状文を施した後、2本1対の棒状浮文を貼り付けるもの。パレススタイル壺に多い器型と装飾と言える。37～39は古墳前期の山陰系壺である。37は小型の品で、口縁端部は自然に厚みを増す。38は端部を外面へ肥厚している。39は肩部まで遺存する。端部は外面に肥厚し、強いヨコナデにより中凹みの面を取っている。40は壺胴部で、外面ハケと内面の継ぎ目を残す雑なナデを基本的な調整としている。41は短いくの字口縁と球形の胴部に丸底という器型を呈する小型壺である。完形品であり口径8cm、胴部最大径12cm、器高12cmを測る。厚手の作りに内外面とも胴部へラケズリと口縁部ヨコナデを基本的な調整とするが、胴部内面下位は粗いナデで仕上げている。42は小型丸底壺であろう。ハケの後のヨコナデとヘラケズ



第19図　B調査区出土遺物実測図(2)（S＝1/3）

リで仕上げられており、あまり丁寧な調整とは言えない。43は壺の刻みを持つ凸帯が剥離したものであろう。44は胴部、７条ほどの細かい櫛状具で波状文と直線文、下端は別原体による沈線文を施している。胎土は精良で外面灰白色を呈し、在来の土器とは異質な感じである。

鉢形土器（第20図45）

45は有段口縁を持つ大型の鉢である。弥生後期後半から終末によく見られる。

高杯形土器（第19図26～32）

26は径30cm以上に達するであろう大型品であるが、杯底部と口縁部間を抉りで画する有段鉢形の器型を呈するものである。弥生後期終末に盛行する有段鉢形高杯の祖型的なものと考えてよかろう。27は杯底部に稜を持ち、そこから口縁部が内湾気味に開く器型。杯底部が小径であることから東海系高杯であろう。28～32は脚部である。28は杯との接合部が小さいもので、小型の品か。29もやや細めの脚である。30は成形・調整が雑なもので、精良な胎土を持つ。畿内系高杯で、古墳前期後半から中期に降るものであろう。31も30同様の胎土を持つ。32は八の字に外反して開く脚部で、弥生後期終末によく見られる。

器台形土器（第19図33）

33は古墳前期の小型器台であり、端をわずかに立ち上げる器受け部は径8.2cmを測る。脚部は八の字に開いて行くようである。ヘラミガキは外面より内面のほうが丁寧に感じられる。

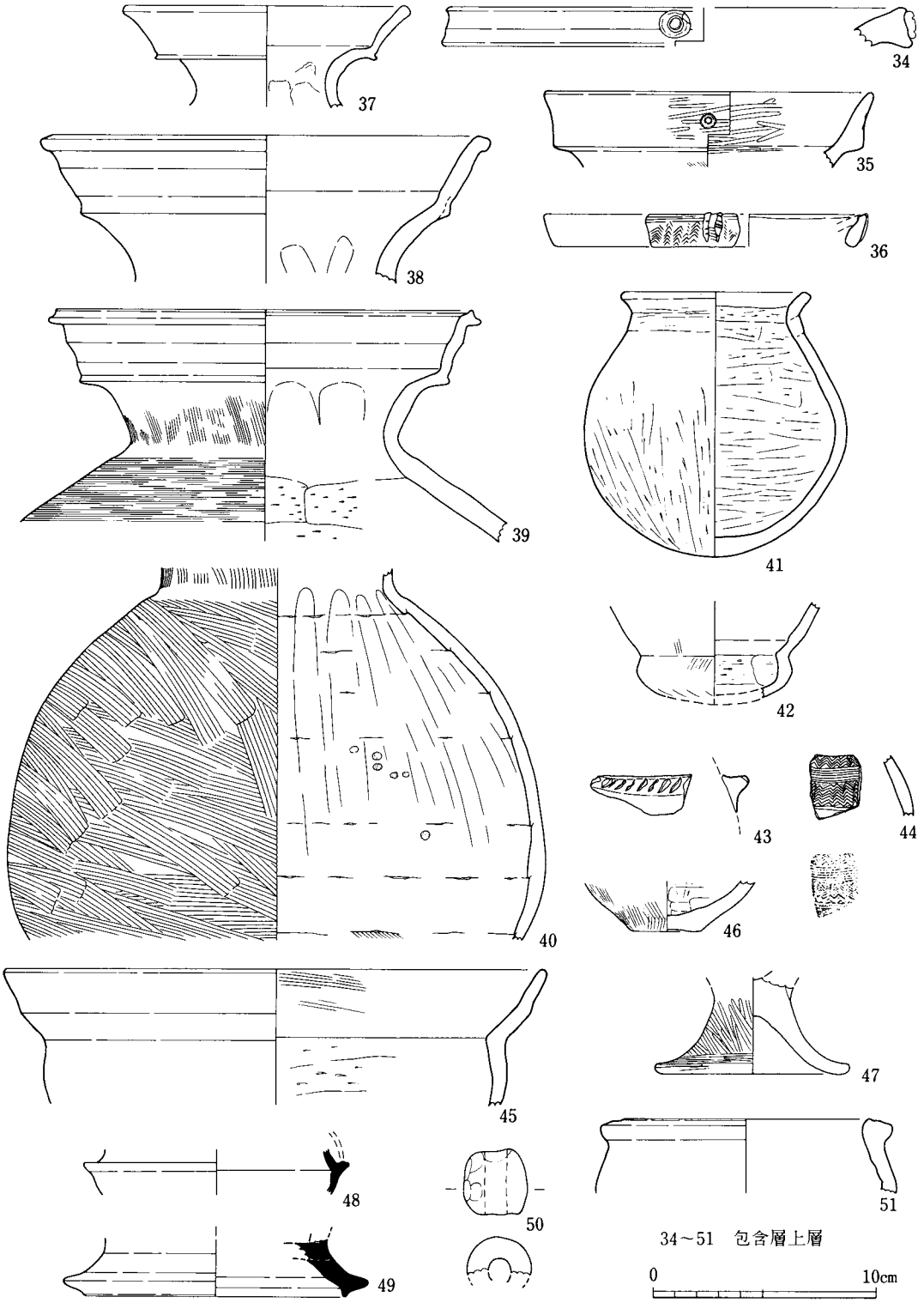
その他（第20図46～51、第24図５・８～10・13・14、第25図18、第26図７）

46は底部である。47は調整が丁寧であり、壺もしくは精製鉢の台部と考えられる。48・49は須恵器である。48は口縁に返しを設ける杯である。返しには別個体の溶着と自然釉が観察され、杯蓋等との重ね焼きが想定される。全体に砂粒径の小さい胎土や質感から和泉陶邑窯周辺の産で、田辺編年のTK47型式前後に位置付けられよう[14]。49は瓶類の台部であろう。在地産で、７世紀以降のものであろう。50は土錘、約半分を欠損する。51は陶器で鉢であろうか。越前焼の流れを汲むのか鬼板を塗布している。50・51は近代以降の産であろう。第24図５は片面が偏平な棒状の石である。８～10・13・14は石器の剥片の可能性があるもの。第25図18は通孔しているが、風化によるもの。第26図７は玉製品の製作工程で生じる緑色凝灰岩の剥片である。

包含層下層出土遺物（第21図・第22図、第24図１～４・12・15、第25図16・19、第26図６）

甕形土器（第21図52～66）

52～54は断面三角形口縁の甕である。すべて上方へやや拡張された口縁部で、形成された口縁帯に２～３条の凹線を持つ。54などは胴部内面上位が削られない、弥生後期前半以前の特徴を有し、おそらく52・53も同様であろう。55～57はくの字口縁の甕である。55は端部に面を取る厚手の甕で古墳前期の北陸東部系であろう。56は直線的な短めの口縁で内面にヨコハケを残す。57は厚手でやや内湾気味の器型で、端部をわずかに内面に肥厚する。指頭痕やハケが残り、成形・調整は雑な感じである。58は擬凹線を持つ有段口縁の甕。明灰白色のやや異質な色調を呈する。59～63は無文の有段口縁の甕である。59は稜や面がはっきりした短い口縁帯を持つもので、薄手で軽量に作られている。頸部以下の条間が広く深いハケなどから、近江北部周辺の受口状口縁甕の影響を受けていると見られる。60～63は在来系の甕であろう。60はやや摩滅していることもあ



第20図　B調査区出土遺物実測図(3)（S＝1/3）

り、稜が鈍い。61・62は口縁端を尖らせるもので、内面頸部以下はヘラケズリを行う。63は小型品で、器型をほぼ復元しえた。口縁は遺存が悪いが径10cmぐらい、底径2.5cm、器高12.6cm、胴部最大径は中位にあり10cmを測る。器外面一面に煤が付着している。64は布留系甕で、やや大振りである。器外面一面に油脂か煤が被膜状に付着している。65は径30cmを超える大型の品で、きわめて厚手の作りである。有段らしき器型と端部の形状から山陰系甕と推定される。66はくの字口縁を呈するが、短い直線的な口縁に卵型の長い胴部が付くなど、前記してきた弥生土器・土師器とは異なる特徴を持つ。調整は内面の一部にヘラケズリが見られるが、基本的にはハケ・ヨコナデ・ナデ・指頭押圧であり、接合痕も残る。古墳中期まで降るくの字口縁甕とみたい。

壺形土器（第22図69～73）

69は長頸壺。端部と頸部に凹線状にヨコナデを行う。器外面には煤が付着しており、被熱用途も想定される。弥生後期特有の器種であるが、北陸東部で特に多く見られる。70は袋状の口縁を呈する精製壺で、おそらく台が付くものであろう。弥生後期後半から終末に通有の器種である。71はよく発達した無文の有段口縁を持つ壺。口縁外面の一部に黒色の被膜が遺存する。72は有段口縁の発達著しい精製壺である。胎土は精良で橙色に焼き上げている。弥生後期終末に通有の器種で、有台品と無台品が見られる。73は胴部で、６～７条単位の波状文帯と直線文帯が交互に施されている。パレススタイル壺などの古墳前期の装飾壺の類と推定する。

鉢形土器（第22図76）

76は厚手で素縁の口縁部で、器型は不明。内面には黒色の油脂が被膜状に付着している。

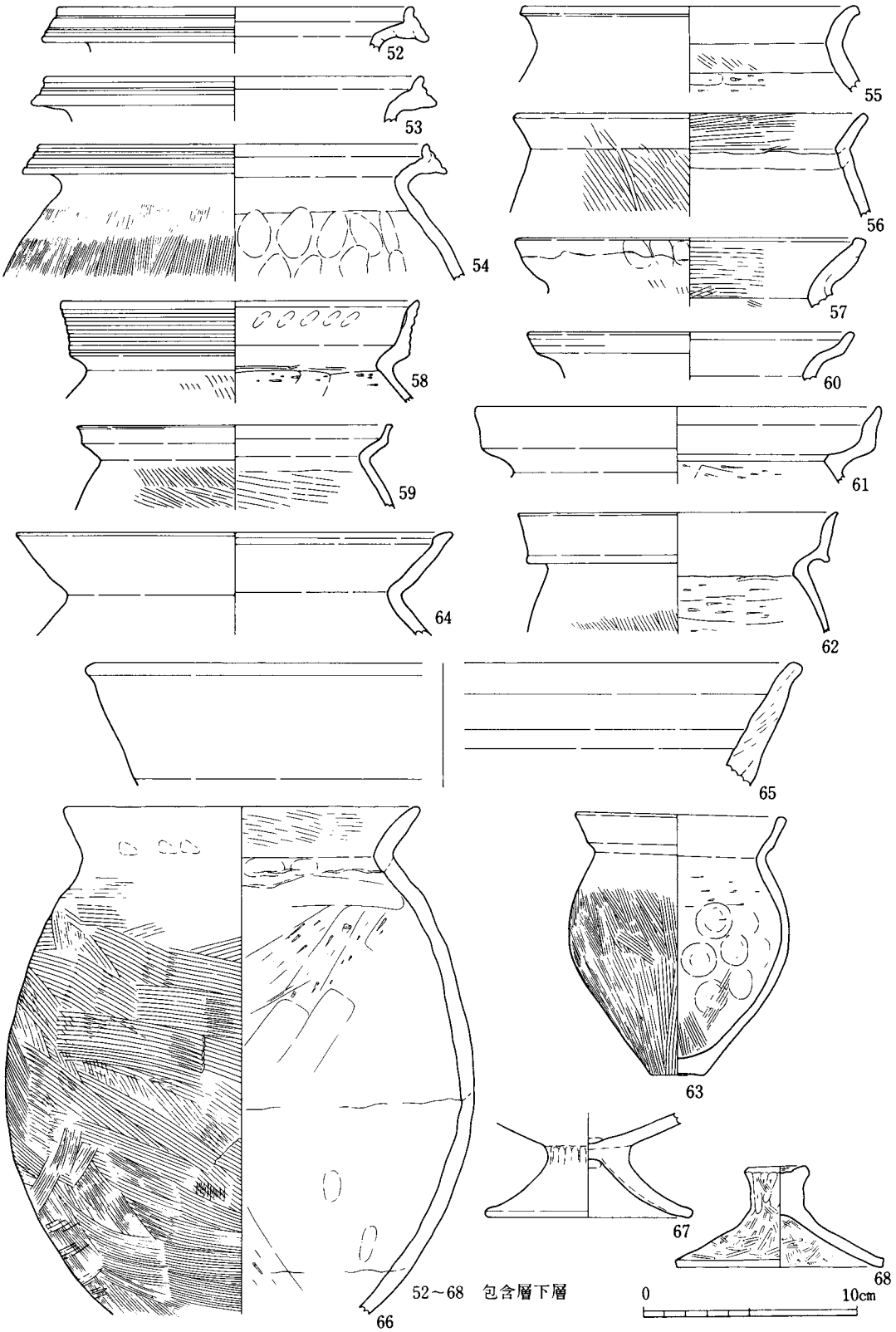
高杯形土器（第22図78・80～82、87～90）

78・80～82は杯部。78は口縁部の伸長と外反が著しい。80は有段高杯であろうが、厚手で段が鈍いもの。口縁部は強いヨコナデによってひだ状に凹凸が見られ、端部は水平に面を取る。81は口縁部が大きく外反し、内面端部を肥厚する有段高杯。78・80・81は弥生後期後半から見られる在来系高杯の系譜上にあるもので、特に81は指標的な器種である。82は全体的に薄手で丸みを帯びた器型を呈するもので、全面にヘラミガキ調整を行っており、古墳前期の山陰系高杯に似る。87～90は脚部である。87は端部近くで屈曲して有段状を呈する器型で、外面に施文し、内面にハケを残すなどの点から脚と判断した。文様は２～３条の沈線帯と貝殻復縁によると思われる斜交文帯を交互に連ねて構成されている。88・89の高杯は精良な胎土と雑な調整から古墳前期末以降の時期と見たい。90は小径の支柱を持つもの。弥生後期終末に多い。

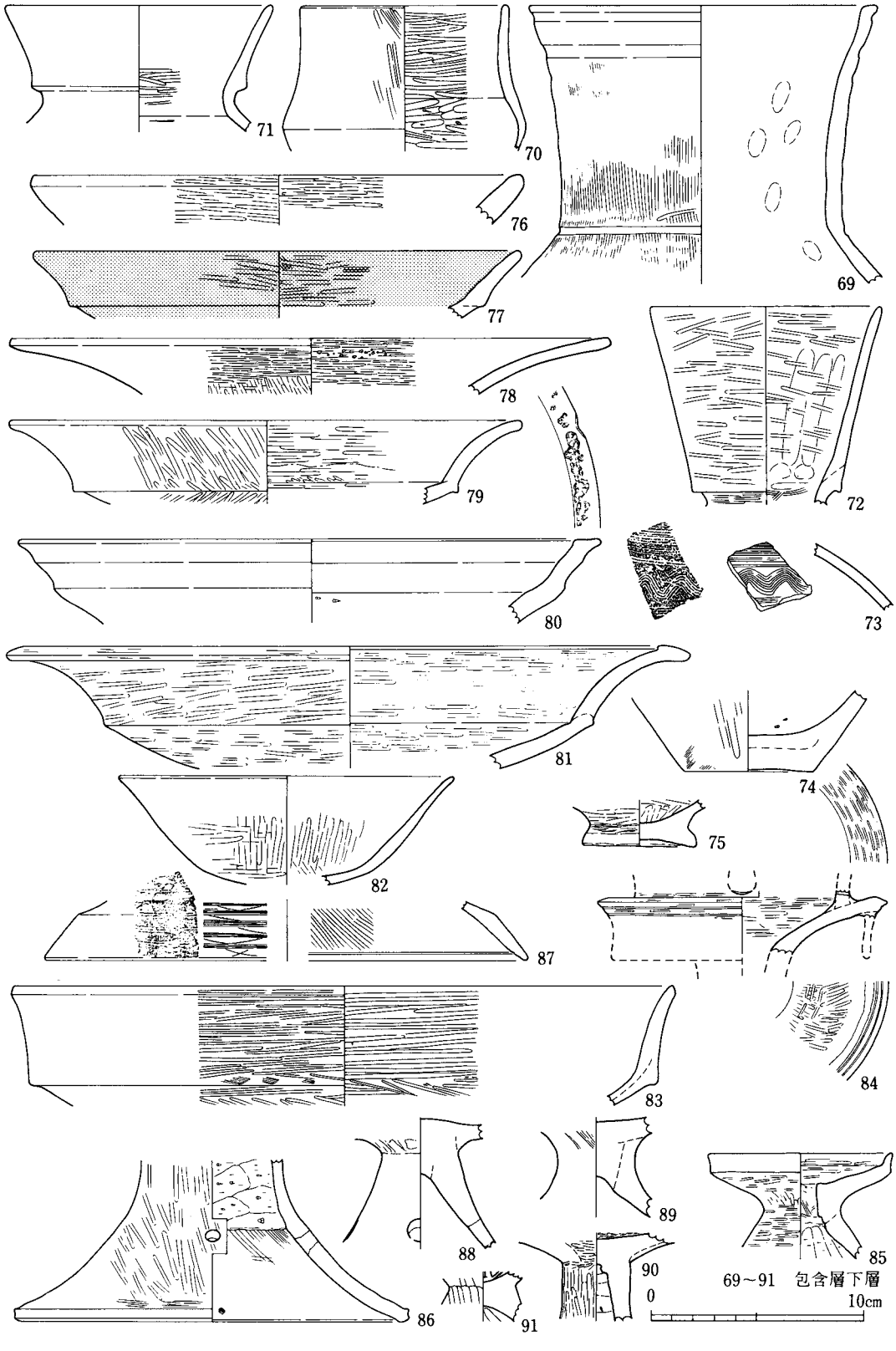
器台形土器（第22図77・79・83～86）

77は口縁が短いわりに底部径が大きく、有段の器台と推定した。79はより口縁が発達し、外反しているが、底部とのバランス的には77と同様で、有段の器台であろう。83も有段の器台で、大型の品である。77・79・83は弥生後期後半以来の在来系器台の系譜上のものである。84は装飾器台の器受け部で、逆八の字に開く器型である。垂下口縁帯と拡張口縁帯を欠くが、それぞれ透かしと沈線が確認できる。85は小型器台の器受け部。端部の立ち上げとヘラミガキははっきりしている。脚部は八の字に広がるようである。86は太い中空の支柱を有し、器台の脚部であろう。

蓋形土器（第21図68）



第21図　B調査区出土遺物実測図(4)（S＝1/3）



第22図　B調査区出土遺物実測図(5)（S＝1/3）

68は小型の蓋で、つまみは完存しており、径2.7cm、器高は5cmを測る。口径は10cm程か。

底部・台部（第21図67、第22図74・75・91）

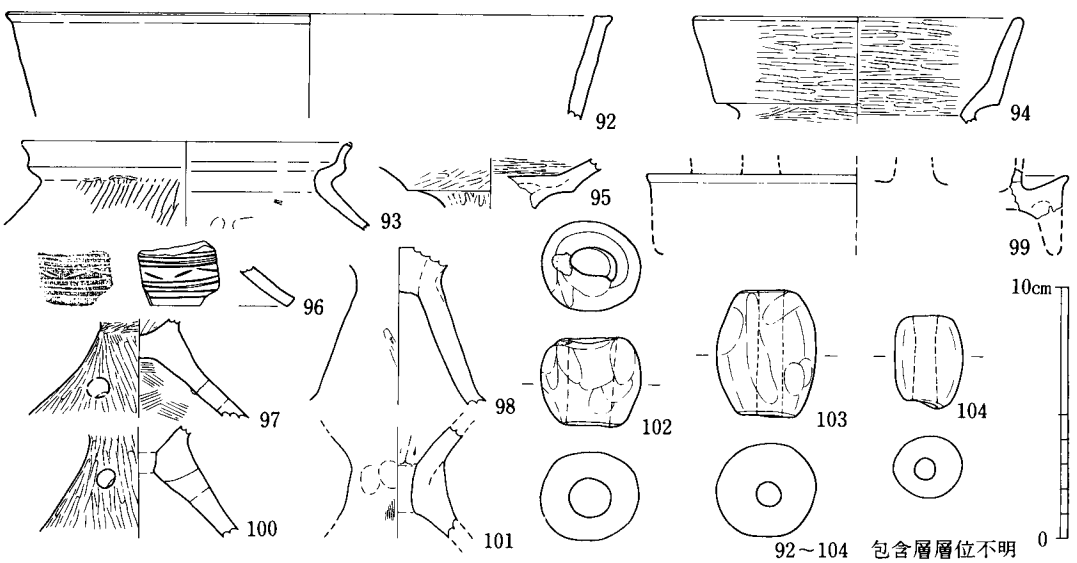
67は台付土器の台で、八の字に開く。やや軟質で摩滅している。74は厚手の平底。ヘラミガキが見られ、壺底部か。75は張り出す円盤底で、ヘラミガキで丁寧に仕上げる。壺もしくは精製鉢の底部か。91は台付土器の台であろう。土器の身が付く側は板状工具痕が付く。

その他（第24図1～4・12・15、第25図16・19、第26図6）

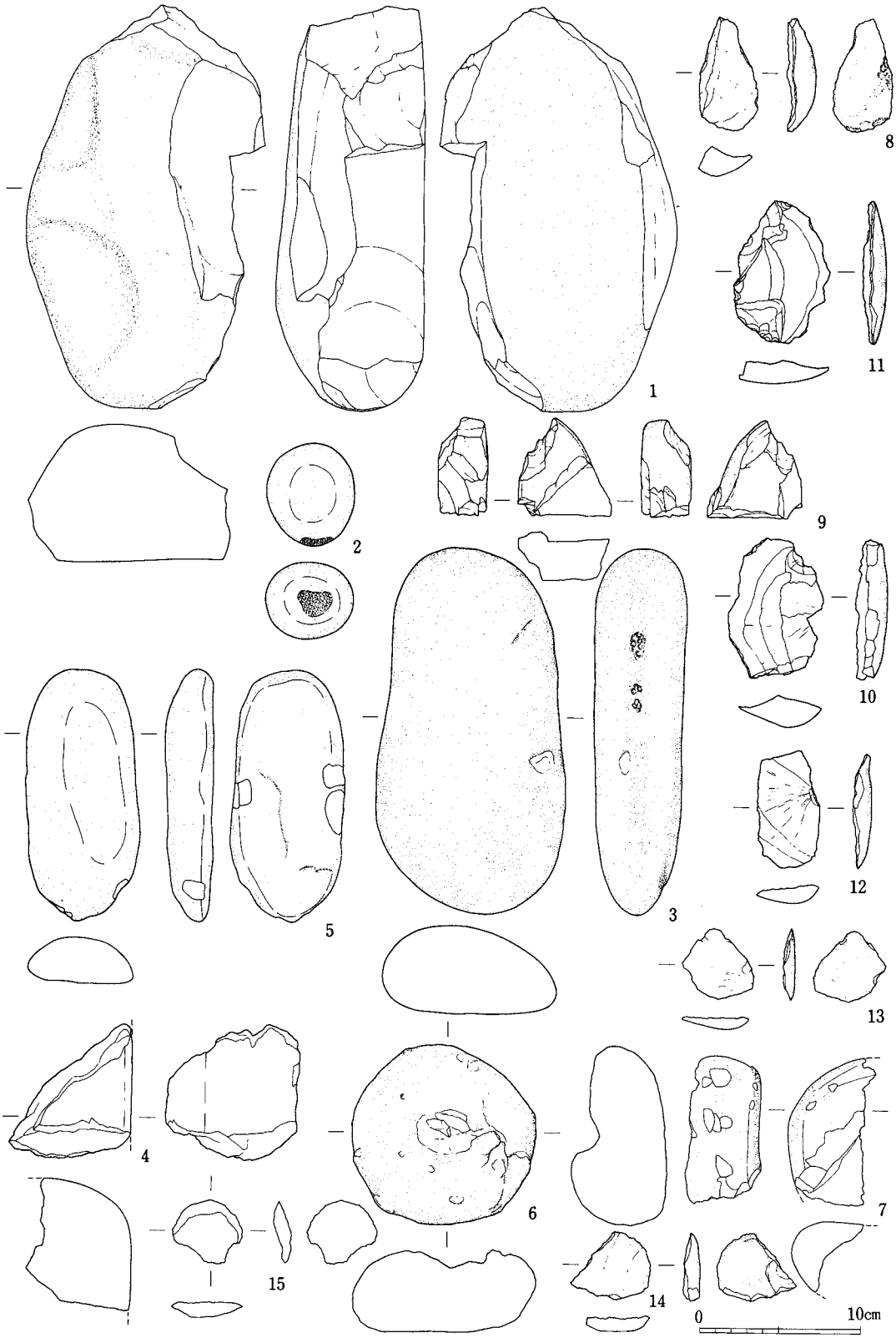
第24図1は石器の母岩の可能性がある割れ石。2は硬質で表面が平滑、3は偏平な石であるが、自然礫か。4は割れ石で、角の部分。12・15は石器の剝片の可能性を持つ。第25図16はすり石と砥石が接着したような形状であるが、円礫から脆い部分が自然に流失しても形成されうる。19は軽石である。第26図6は緑色凝灰岩製の管玉であり、長さ16.3mm、厚さ5.3mm、両面から穿たれる孔径8mm、重さ0.8gを測る。玉製品そのものについては本遺跡からの唯一の出土である。

層位不明包含層出土遺物（第23図、第24図11、第25図17）

第23図92・93は甕形土器である。92は山陰系甕か。胎土が黒色を呈し、やや異質な印象を持つ。93は薄く短い有段口縁を持つ甕で頸部以下も薄手の作りのようである。古墳前期の東海系土器の一つ、S字状口縁台付甕であろう。赤塚分類のB類に相当するものである[15]。胎土や質感の点で北加賀の土器と大きく異なるところがなく、在地産と見られる。94は無文の有段口縁を持つ壺形土器で、ヘラミガキ調整が丁寧な精製品である。95～98は高杯形土器である。95は小径の杯底部である。96～98は脚部である。96は沈線文帯と山形文帯からなる文様を施す。97は小型高杯であろうか。95～97は古墳前期の東海系高杯といえよう。98はエンタシス状を呈する脚部。古墳前期のものか。99～101は器台形土器である。99は装飾器台の器受け部端である。100・101は小型もしくは中型に近い器台か。古墳前期のものであろう。102～104は土錘である。102は軟質で、孔は変形している。長さ3.6cm、径3.9cm、孔径1.6cm、重さ36.9gを測る。103・104は陶質の品。103は長

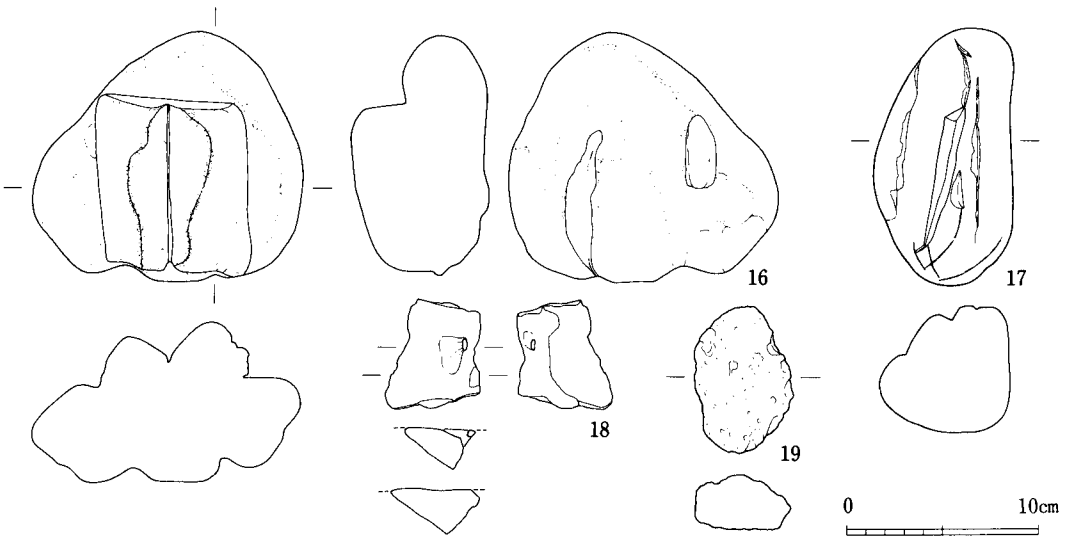


第23図　B調査区出土遺物実測図(6)（S＝1/3）

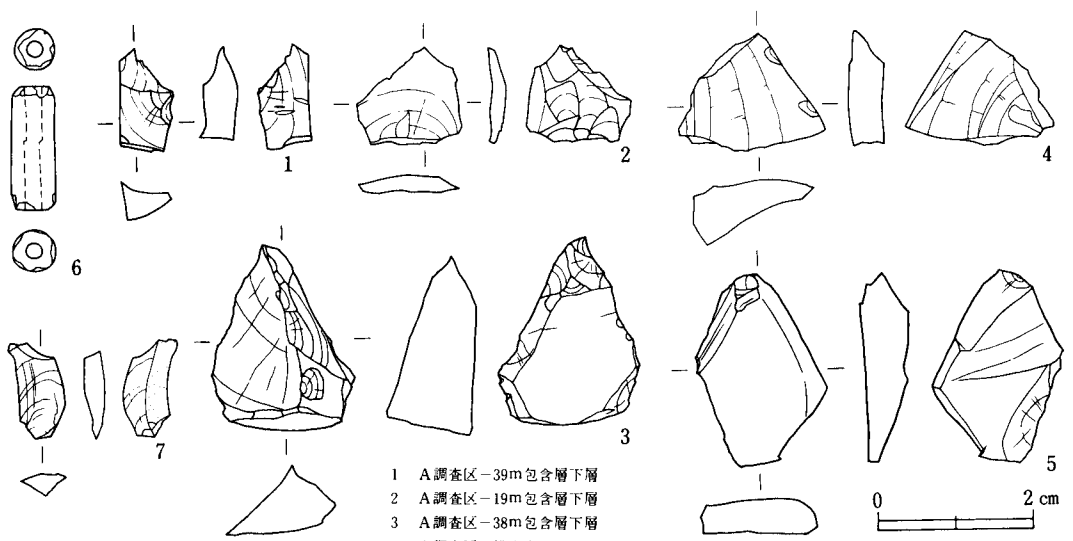


第24図　B調査区出土遺物実測図(7)（石、S＝¼）

さ5.1cm、径3.9cm、孔径1cm、重さ88.8gを測る。104は長さ3.8cm、径2.7cm、孔径1.1cm、重さ22.2gを測る。これらの土錘は近代以降の産であろう。第24図11は石器の剝片の可能性がある。第25図17は硬質で、表面は平滑。長軸に沿ってスリットが入り、砥石的な使用が考えられるが不明確である。



第25図　B調査区出土遺物実測図(8)（石、S＝1/4）



1　A調査区－39m包含層下層
2　A調査区－19m包含層下層
3　A調査区－38m包含層下層
4　A調査区－排土中
5　A調査区－3号溝覆土
6　B調査区－25m付近包含層下層
7　B調査区－48m付近包含層上層

第26図　A・B調査区出土玉類実測図（S＝1/1）

第２表　Ｂ調査区出土遺物位置一覧表

図No.	出土位置	備考
第18図１	B-落ちこみ	
2	B-落ちこみ	
3	B-落ちこみ	
4	B-落ちこみ	
5	B-落ちこみ	
6	B-落ちこみ	
7	B-落ちこみ	
8	B-落ちこみ	
9	B-落ちこみ	
10	B-落ちこみ	
11	B-落ちこみ	
12	B-落ちこみ	
13	B-落ちこみ	
第19図14	B-４号ピット付近	
15	B-４号ピット付近	
16	B-85～87m、包含層上層	
17	B-60～62m、包含層上層	
18	B-110～120m、包含層上層	
19	B-60～62m、包含層上層	
20	B-59～60m、包含層上層	
21	B-110～112m、包含層上層	
22	B-90～93m、包含層上層	
23	B-78～80m、包含層上層	
24	B-67～70m、包含層上層	
25	B-包含層上層	
26	B-63～64m、包含層上層	
27	B-110～112m、包含層上層	
28	B-87～90m、包含層上層	
29	B-包含層上層	
30	B-包含層上層	
31	B-67～70m、包含層上層	
32	B-60～62m、包含層上層	
33	B-78～80m、包含層上層	
第20図34	B-87～90m、包含層上層	
35	B-71～73m、包含層上層	
36	B-78～80m、包含層上層	
37	B-110～112m、包含層上層	
38	B-75～76m、包含層上層	
39	B-75～76m、包含層上層	
40	B-110～112m、包含層上層	
41	B-包含層上層	
42	B-108～110m、包含層上層	
43	B-50～51m、包含層上層	
44	B-69～72m、包含層上層	
45	B-87～90m、包含層上層	
46	B-108～110m、包含層上層	
47	B-63～64m、包含層上層	
48	B-90～93m、包含層上層	須恵器
49	B-73～74m、包含層上層	須恵器
50	B-85～95m、包含層上層	土錘
51	B-112～115m、包含層上層	陶器
第21図52	B-52～55m、包含層下層	
53	B-52～55m、包含層下層	
54	B-48～51m、包含層下層	
55	B-80～83m、包含層下層	
56	B-80～82m、包含層下層	
57	B-67～70m、包含層下層	
58	B-62～65m、包含層下層	
59	B-80～82m、包含層下層	
60	B-67～70m、包含層下層	
61	B-83～85m、包含層下層	
62	B-75～77m、包含層下層	
63	B-57m付近、包含層下層	
64	B-84～86m、包含層下層	
65	B-67～70m、包含層下層	
66	B-72～78m、包含層下層	
67	B-112～114m、包含層下層	
68	B-57～60m、包含層下層	
第22図69	B-50～52m、包含層下層	
70	B-76～78m、包含層下層	
71	B-76～78m、包含層下層	
72	B-57～60m、包含層下層	
73	B-57m付近、包含層下層	
74	B-67～70m、包含層下層	
75	B-75～77m、包含層下層	
76	B-87～89m、包含層下層	
77	B-86～87m、包含層下層	
78	B-75～77m、包含層下層	
79	B-57m付近、包含層下層	
80	B-60～62m、包含層下層	
81	B-55～57m、包含層下層	
82	B-72～74m、包含層下層	
83	B-65～67m、包含層下層	
84	B-65～67m、包含層下層	
85	B-52～55m、包含層下層	
86	B-包含層下層	
87	B-83～85m、包含層下層	
88	B-72～74m、包含層下層	
89	B-80～83m、包含層下層	
90	B-80～83m、包含層下層	
91	B-67～70m、包含層下層	
第23図92	B-70～80m、包含層	
93	B-包含層	
94	B-70～80m、包含層	
95	B-包含層	
96	B-50～60m、包含層	
97	B-70～80m、包含層	
98	B-掘削時	
99	B-60～70m、包含層	
100	B-70～80m、包含層	
101	B-110～120m、包含層	
102	B-表採	土錘
103	B-表採	土錘
104	B-表採	土錘
第24図１	B-70～80m、包含層下層	凝灰岩
2	B-60～62m、包含層下層	珪岩
3	B-70～72m、包含層下層	凝灰岩
4	B-包含層下層	砂岩
5	B-80m付近、包含層上層	凝灰岩
6	B-落ちこみ	凝灰岩
7	B-落ちこみ	安山岩
8	B-73～76m、包含層上層	凝灰岩
9	B-78～80m、包含層上層	流紋岩
10	B-110～112m、包含層上層	凝灰岩
11	B-80～90m、包含層	安山岩
12	B-89～91m、包含層下層	安山岩
13	B-46～47m、包含層上層	安山岩
14	B-46～47m、包含層上層	凝灰岩
15	B-包含層下層	凝灰岩
第25図16	B-70～72m、包含層下層	片麻岩
17	B-排土中	珪岩
18	B-79～80m、包含層上層	流紋岩
19	B-49m付近、包含層下層	軽石

（石質は小島和夫氏の肉眼鑑定による）

第4節　まとめ

1．検出された遺構について

今回の発掘調査では、A調査区で柱穴、土坑、溝5条、落ちこみ2基、遺物を出土したピット5穴を検出した。B調査区では溝3条、落ちこみ、遺物を出土したピット8穴を検出した。C調査区では遺構が検出されなかった。遺構の形状は幅2m以下の調査区ということもあり、明確にしえたものはほとんどない。出土遺物が時期的なまとまりを持つ遺構は、A調査区に多く存在し、3号溝や1号落ちこみなどは弥生時代後期後半に、1号土坑や1号溝は古墳時代前期にほぼ限定できる。しかし、これらの遺構は全体的に浅いものが多く、人為的な掘削によるものかさえも明確とはいえず、遺物の流入も比較的容易であることから、その帰属時期を遺物によって決定付けることは難しかろう。B調査区については、落ちこみから多く遺物が出土しているが、弥生後期後半から古墳前期までの時期幅を有している。また、4号ピットに近接して弥生後期前半以前の土器が出土しているが、遺構との関係は明らかにできなかった。このように大半の遺構の形状・時期が不明確であり、その性格については言及するべくもない状況である。ただ、その密度は北より南が、B調査区よりA調査区が高いと指摘できるものと考える。

2．出土した遺物について（第27図）

これまで述べてきた通り、遺物は包含層から出土した弥生土器・土師器がその大半を占める。時期的には弥生時代後期から古墳時代中期にかけての、弥生後期前半・同後半・同終末・古墳前期初頭・同前半・同後半・同末～中期の各段階において認められる。この間の北陸地方の土器は、弥生後期に定着した在来系土器が、古墳前期への移行に伴って、北陸以外にその源を持つ土師器の外来系土器と共存し、やがて外来系土器が主体となり在地化していくうちに須恵器が登場するという変化を遂げる。ここでは、出土土器の各器類・器種を大まかに各段階に位置付けてみたい。なお、弥生時代後期から古墳時代前期の時期区分は石考研1986による。

弥生後期前半以前に確実に位置付けられる土器は、断面三角形口縁を持ち、内面胴部上位にヘラケズリが及ばない甕である。口縁部の破片もおそらくは同時期であろう。

弥生後期後半から終末にかけては、在来系土器が型式変化を遂げる。有段口縁の擬凹線を有する甕は北陸西部において在来系土器を代表する器種であり、後期後半の典型が「法仏甕」、同終末の典型が「月影甕」である。出土遺物のなかでは口縁部のみの資料が大半であるため、口縁部の特徴を表記するならば前者が「直線的で短い口縁で端部は自然におさめるもの」、後者が「外反する長めの口縁であり、内面に指頭痕を連ね、端部は細く尖らせるもの」となろう[16]。無文の有段口縁を持つ甕は量的には少ないがほぼ同様の器型を示す。こちらは北陸東部の在来系土器のひとつである。この時期は、壺・高杯・器台など他器類についても在来系土器で占められる。壺としては、長頸壺、有段口縁の短頸壺、袋状口縁の壺、有段口縁の長頸壺など、鉢は有段鉢の精製品がこの時期のものとして認められる。高杯は杯部に関しては有段高杯が、器台は有段器台と装飾器台が認められる。装飾器台は定型化したもののみで、終末以降の品と見てよい。

古墳前期初頭から前半にかけては在来系土器と外来系土器が並在する。外来系とはいうものの

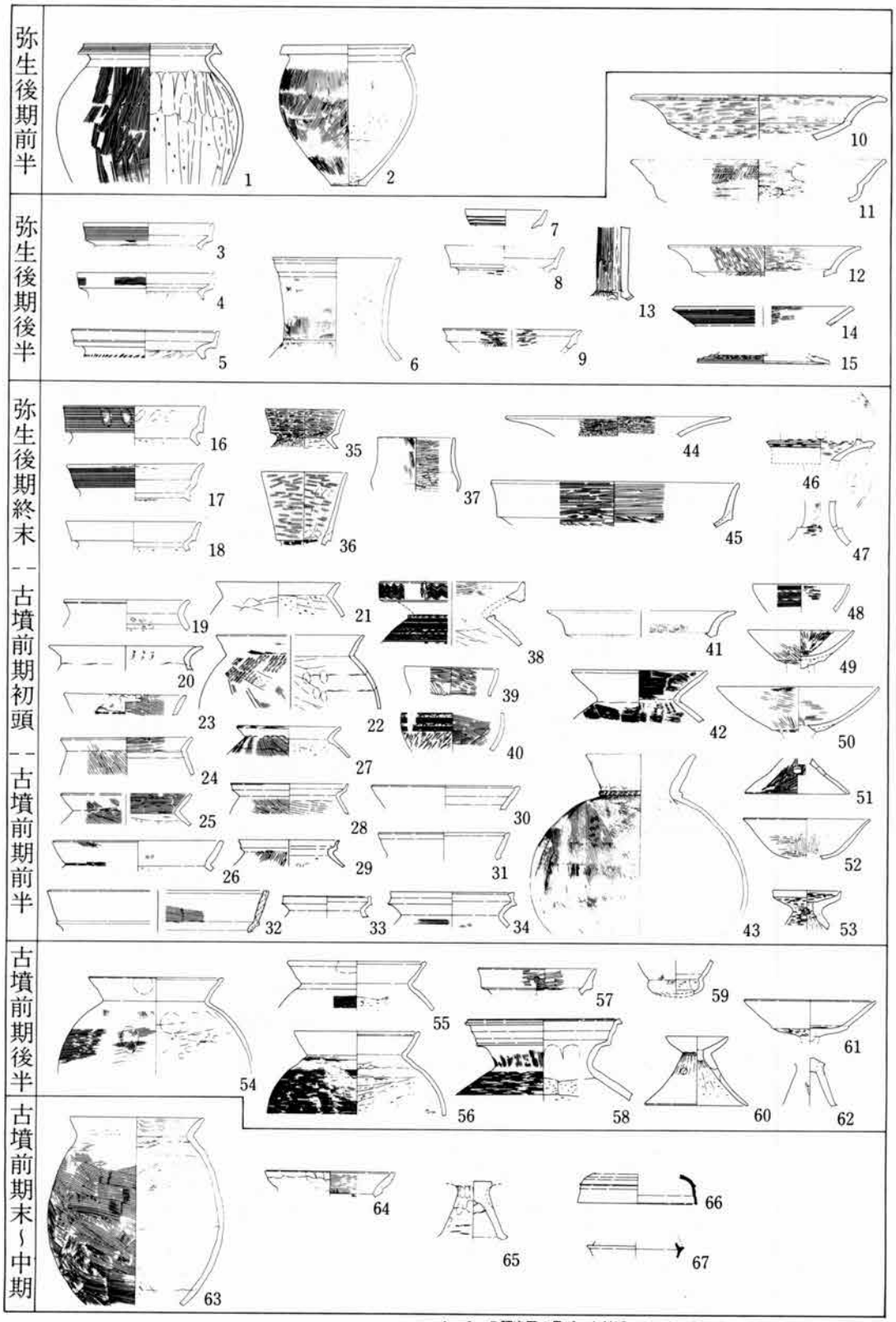
確実な搬入品はきわめて少ないのが通例であり、出土土器においても共通する。弥生後期終末の土器はその組成が在来系としてほとんど引き継がれており、前記した土器にも古墳前期初頭に含まれるものがおそらくある。外来系の甕は布留系、山陰系、東海系、近江系が認められる。布留系甕は前期前半に初源的なものが現れるとされるが、全形を知りうるものが少なく、ここでは口縁端部の肥厚度が小さいものを一応の目安とした。山陰系甕は内屈口縁の小型品と外傾口縁の大型品があり、東海系甕はS字状口縁台付甕のB類2点があり、近江系では不明確ながら受け口状口縁甕の影響が見られる土器が1点（28）ある。これら以外の甕では多彩なくの字口縁甕の存在が、該期に特徴的であり、特に前期初頭には在来系と並んで甕のかなりの量比を占めるものと推定する。これらくの字甕は北陸東部の在来系甕の類と、それ以外の甕の2者に大別される。非東部系くの字甕については実に多様な形態差が認められ、口縁の長短や外傾・外反・内湾の度合、端部の処理など様々に異なる。傾向としては、口縁は直線的に外傾かわずかに内湾気味のものが多い、口縁内面にヨコハケを残すものが多い、頸部の屈曲は内外面とも鋭いものが多い、屈曲部分にハケ状具やヘラ状具で切りこむ一種の頸部調整を行うものが見られる、などがあげられる。こうした特徴は在来系土器の技術からのみ生ずるとは考え難い。しかし、モデルを忠実に模倣するものでもなく変形や折衷が激しいようで、直接出自を追えるものは少ないが、相対的に西日本の影響を受ける時期でもあり、一応東海・近江地方を想定しておきたい。特に23などは小破片ながら近江北部の「長浜甕（ながはまかめ）」に見られる特徴を満たしている[17]。27の薄手のくの字甕は、庄内式期に各地で生まれる「軽量甕」の一種であるが、異質な形態を呈する土器である。22のタタキ後一部ヘラケズリの調整の甕も異質な存在である。該期のこうした多彩なくの字甕のあり方は近接した倉部出戸遺跡にも共通する組成であり、当地の特色の一つとなる可能性が高い。また、くの字甕は口縁が単純な器型であるがゆえに、口縁部のみや小破片では同一視されやすい危険を孕む土器であるともいえ、東海から関東地方に広く定着するくの字台付甕が北陸にもS字甕と同程度かそれ以上に多く存在している可能性などを含めて、随時見直して行く必要があると考える。

外来系の壺は畿内系と東海系。畿内系では直口壺や広口壺、二重口縁壺が相当しよう。東海系ではパレススタイル壺や瓠壺に類するものなど、装飾壺類が多い。外来系の高杯は東海系が大半であろう。山陰系に似るものが1点(52)ある。東海系高杯は文様を持たないものが一般的であるが、出土土器には有文品が数点見られた。有文高杯については第3章で述べたい。外来系器台は小型器台がある。器型をうかがえるものは全て調整が丁寧なものでこの時期の所産としてよい。

古墳前期後半[18]は在来系の土器がほぼ見られなくなり、外来系の土器が在地化する。甕では布留系甕の大半がここにおさまる。壺では法量的な斉一性が強い山陰系の壺が定着する。小型丸底壺は調整がやや雑なものである。高杯はほぼ畿内系のみと言える。

古墳前期末から中期[18]にかけての土器は、くの字口縁を持つ厚手で長胴器型の甕、変形した末期的な布留系甕、橙色系で精良であるが摩滅しやすい胎土に変化した畿内系高杯、田辺編年 TK23 型式前後の須恵器などがある。土器の絶対量は弥生後期前半と同様に、少ない。

以上、弥生後期後半から古墳前期後半にかけて時期的な主体を置き、上限は弥生後期前半以前、下限は古墳中期に及ぶ土器群を大まかに位置付けてみた。一括性の低い資料の出自からこれ以上



第27図　出土土器の時間的位置付け（S＝1/8）

1・2＝B調査区4号ピット付近、3・8・9・13・14・16～18・21・39・42・48＝A調査区包含層下層、4・15・20・22・23・25・26・32～35・38・40・41・61＝A調査区包含層上層、5・7＝A調査区3号溝、6・10・12・19・24・28・36・37・44～46・52・53・63・64＝B調査区包含層下層、11・27・30・49・55～59・65・67＝B調査区包含層上層、29・62＝B調査区包含層層位不明、31＝A調査区1号土坑、43・47・50・54＝B調査区落ちこみ、51・66＝A調査区包含層層位不明、60＝A調査区1号溝

の細分や意義付け、地域性の抽出など望むべくもないが、手取川扇状地扇端部における弥生時代から古墳時代への土器の変遷を概略的に追えたのではないかと思う。

3．浜相川・相川新遺跡について

浜相川・相川新遺跡は昭和26年に採集資料が紹介され（湊1951）、御手洗村の海浜部に所在する弥生・古墳時代の遺跡として周知された。弥生・古墳時代には、海退により海岸線が現在よりも沖にあったことが知られており、この地点の遺跡の存在は奇異なことではない。砂浜はそれから現在までにまた浸食され、採集地点の一部は海中に入ると推定される。また昭和40年の防潮堤の設置によって損壊も受けていると見られ、遺跡の詳細は知るべくもないのが現状である。

今回の調査区はそれよりも内陸側に位置している。調査では、厚く堆積した遺物包含層と対照的に不明確な遺構のアンバランス感が強く印象に残った。厚い遺物包含層が形成される遺跡としては、生活面としての遺構面および遺構の形成が良好とはいえなかったからである。この要因を考える上で、付近の地勢上の特徴は重要な意味を持つ。西に位置する浜相川遺跡を見てみると地表面の標高が４ｍから５ｍの間にあり遺構面は耕土直下に確認されるのに対し、調査区周辺では４ｍ未満と低い上に遺構面に至るにはさらに１ｍ以上下降する。旧地形は現在以上に西から東への傾斜が予想される。隆起・沈降など地形の変動が少なかったという前提では、調査区付近は通常当地の遺跡が立地する微高地地形ではなくむしろ低地といえる。すなわち、調査区で確認された包含層は本来形成されにくい地点に存在すると言い換えられ、付近の微高地から低地へ移動した遺物を多く含む２次堆積層と理解したい。包含層は上下に分層されたが、どちらも弥生後期から古墳中期の土器が混在していた。傾向としては上下層で層位学的に新古相の粗密が認められるものの、明確な時期を分かつことは不可能であった。ただ、移動した時期については他時期の遺物がほとんど含まれないことから遺物の最新相の時期にそう大きくは遅れないものとみたい。

遺跡付近の海岸に砂丘が形成されていないこともまた示唆的である。本来当地の海浜部に立地する遺跡は浜相川遺跡・倉部出戸遺跡・浜竹松遺跡などのように砂丘の後背地に立地し利用する集落遺跡なのである。砂丘が形成されない要因としては恒常的な水流と土砂の排出がなされる河口の存在が予想され、遺構面や遺構の形成が貧弱である点もよく理解される。そして扇端部の地勢上、各地に網の目状に走っていたはずの水路が現七か用水の如く当地のどこかにも存在していることはほぼ確実なのであり、海岸線周辺の地形の動向を探ることが必要であろう。

かつて遺物が採集された浜相川・相川新遺跡の詳細は前述したようにもはや知ることができず、調査区との関係も不明である。報文中の第一地点・第二地点で観察された「礫層状に約50cm～１ｍの厚さを以て載っている酸化鉄を含む濃黄色の砂泥混合層」は調査区の包含層に相当するものかもしれない。現状の浜相川・相川新遺跡は低地に堆積した遺物層と南の浜相川Ｂ遺跡に向かって若干のまとまりを持っている遺構によりその大半が構成されているものと考えられる。

第３章　北陸の有文高杯について

１．はじめに

古墳時代の東海地方に「有文高杯」「パレス文高杯」と呼ばれる土器がある。その名の通りパレススタイル壺に類似する文様が施される高杯は、各地で東海系土器の一器種として見ることができる。北陸においても近年類例が増し、本書で報告された浜相川・相川新遺跡においても10点近くの出土がある[19]。古墳前期の北陸において、土器に見られる東海地方の影響がきわめて大きいことは周知の通りであるが、本論はその中で、特に有文高杯について集成を行い、時期・分布・形態などを検討し、そのあり方に反映されるであろう当時の社会状況を模索するものである。

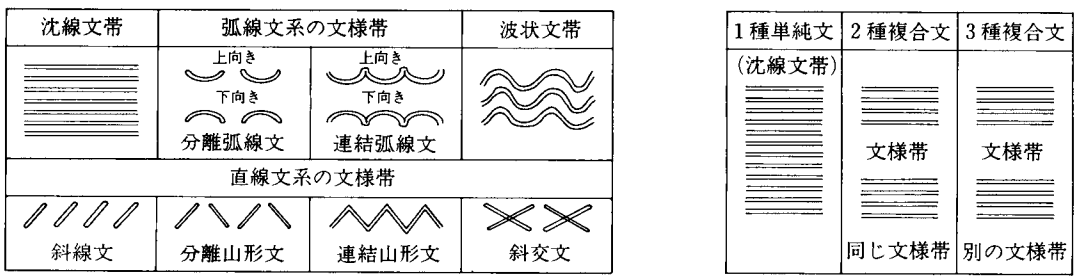
２．有文高杯の諸特徴

(1)　有文高杯の文様（第28図）

有文高杯の文様は、横位に巡る文様帯を基本とし、単独あるいは複数の文様帯が上下に連なることによって構成されている。そして、文様帯の基本は細い沈線による帯であり、沈線文帯とそれ以外の文様帯の組み合わせによるとも言える。ここでは沈線帯以外のそのプラスアルファ的な文様帯の分類に主眼を置くことにする。

まず、一つの文様帯を構成する上での文様の最小単位は、基本的に直線文・弧線文・波状文の３種と言える。この最小単位が横位に連なることにより文様帯となる。直線文からなる文様帯には斜線の連なる斜線文帯、「ハ」形の連なる分離山形文帯、「∧」形が繋がって連なる連結山形文帯、「×」形の連なる斜交文帯の４種がある。弧線文からなる文様帯には「∪」か「∩」形の連なる分離弧線文帯、それが繋がって連なる連結弧線文帯が認められるが、斜交文についてや、短いもの、カーブが明確でないものは直線文系との区別が明確ではないため、直線文系に含めた。また、弧線文には弧の向きに上下の別があるため、ここでは円弧の中心が上にくるものを上向き、下にくるものを下向きと規定する。波状文は有文高杯にはごく例外的な文様である。

このような文様帯と沈線文帯との組合せはその構成の種類数により、１種のみのものを１種単純文、２種によるものを２種複合文、以下３種複合文、４種複合文…と表記し、文様帯が全体の構成の性格を強く表すものとして括弧書きに付して表現することにしたい。ただし、２種以上の



第28図　有文高杯の文様の分類

複合文は沈線文帯を表記しないものとする。例えば、第30図１などは２種複合文（斜線文）と表すことになる。１種単純文の文様帯はほぼ沈線文帯のみといえる。２種複合文の場合、おおむね異種の文様帯を上下交互に連ねるが、沈線文帯の沈線の数は必ずしも一定とはいえず、帯ごとに異なる場合も多い。また、施文原体はヘラ状具が大半であり、沈線文などは１本１本しっかりと引いて施しているようである。このほか、細かい刺突が連なるように見えて特徴的な文様が少量であるが存在し、おそらくは貝殻腹縁によるものであろう[20]。

(2) 有文高杯の器型・施文部位

文様が施される部位は、口径10cm前後のいわゆる小型高杯の杯部、より一般的な中型高杯の杯部、そして脚部の３種に大別されるが、一様に遺存がよくないものが多く、器型も不明確なためさらなる細別は難しい。杯部については、外面か内面のどちらか一面のみの施文であり、両立はしない。どちらの場合でも口縁端から中位までの範囲に施されると言える。そして小型高杯は杯部外面に、中型高杯は杯部内面にそれぞれ施文面が定着している。また、中型高杯は口縁が立ち身が深い器型と、口縁が開き身が浅い器型の２種の判別が可能である。脚部の施文は外面のみで、範囲の上端は様々であるが、下端は脚縁にまで必ず及んでいる。端部まで及ぶ例も第30図17がある。脚部の器型は、20のように段を持つものや端部を加工するものも例外的にあるが、大半は外反・外展度が大きい八の字に開くもので端部は素縁か面取り程度の単純な器型であり、多くの無文の高杯の例からほとんどが小型高杯の脚と推定できる。よって集成された脚部の全てをここでは小型高杯に含めて考えることにしたい。この項をまとめると、小型＝杯部外面・脚部の施文、中型＝杯部内面の施文、と明確に属性を振り分けることができる。

(3) 諸特徴の相関

(1)(2)の相関から、各属性を結びつけた有文高杯のパターンを考えてみたい。まず小型高杯については、杯部は２種複合文のみで占められている。脚部でも２種複合文が主体で、次いで３種複合文があるが量的には少なく、１種単純文はごくまれである。杯脚施文が両立するかどうかは、その相関を示す完形品などの資料がないため、不明である。中型高杯は２種複合文がほとんどで、１種単純文が１例だけある。１種単純文を持つ高杯の器型は(2)で分類した深身タイプであり、型式的には古相を示す。これに対し、２種複合文をもつ高杯は浅身タイプである。有文高杯がよく見られる東海西部・近江北部地方では両タイプの併存がより明確であり、両者は別系譜の有文の中型高杯と考えた方が妥当であろう[21]。１種単純文中型高杯を除くと、有文高杯においては２種複合文が圧倒的に多く、比較的共通性の高いモチーフを根底においているようである。次項からは北陸各地の状況や位置付けられる時期などを盛り込んでさらに詳しく述べてみたい。

３．北陸における有文高杯の分布（第29・30図）

地域区分は、旧国単位に従い、西から越前・加賀・能登・越中・越後とし、加賀については手取川を境として北加賀・南加賀に細分する。古墳時代の時期区分は第２章と共通である。

(1) 小型高杯（第30図杯部１～８、脚部16～31）

杯部では越前から１点、南加賀で１点、北加賀で４遺跡５点、能登で１点が出土している。脚

部は南加賀で1点、北加賀で5遺跡12点以上[22]、能登で1遺跡3点が出土している。時期的には、5・16・23・28が共伴土器などから古墳時代前期初頭に、1は前期初頭から前半に位置付けられる。文様は2種複合文が主であるが、その内訳は斜線・山形・弧線・斜交など多彩であり、22など弧線文を2重に連ねた文様帯も見られる。

(2) 中型高杯（第30図9～15）

北加賀で3遺跡4点以上[22]、能登で2遺跡3点が出土している。9～14はおおむね古墳前期初頭に位置付けることができる。13は1種単純文の深身タイプであり、2種複合文浅身タイプの他品とは一線を画する存在である。また、2種複合文においては直線・弧線の別はあるものの基本的には「ハ」または「八」の連なりという同一のモチーフへの集中が見られ、比較的多彩な小型高杯とは異なるあり方が示されている。

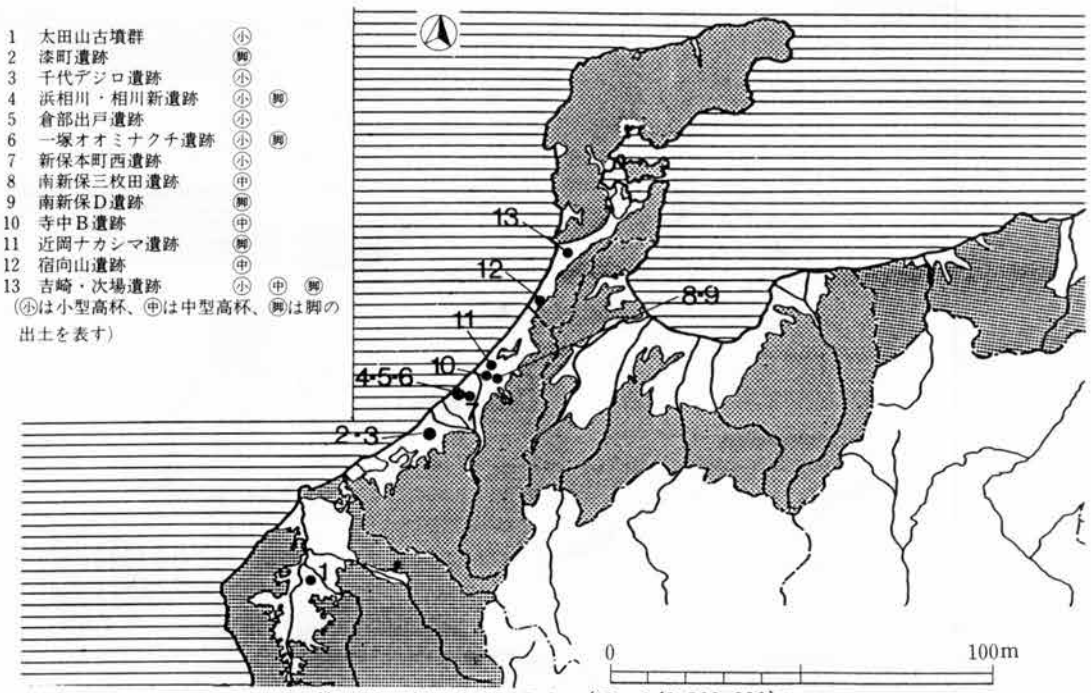
(3) 施文原体と胎土について

確実な搬入品は胎土からは見い出せず、大半は存地産と考えたい。ただし、浜相川・相川新遺跡（第30図18・20）、上荒屋遺跡、吉崎・次場遺跡（14）から貝殻腹縁によると思われる文様を持つ有文高杯が数点出土しており、他の多くのヘラ状具原体による有文高杯に比べてきわめて精良な白っぽい胎土と硬質な質感を有しているのが観察された点を付け加えておきたい。

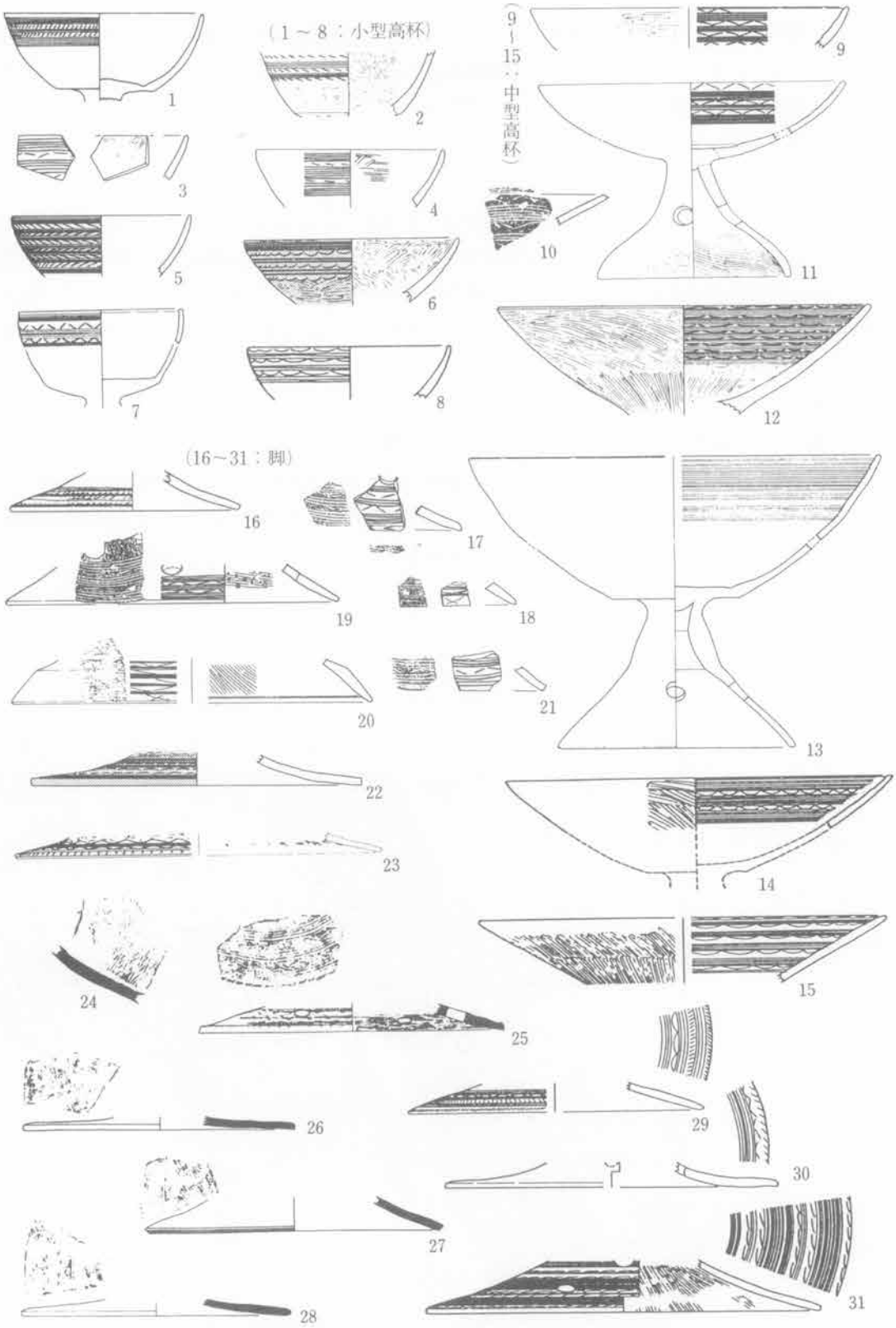
4．まとめ

(1) 有文高杯の器種と用途

有文高杯は畿内から信濃、北関東まで分布が認められ、その時期的な中心は古墳時代前期初頭、地域的な中心はパレス文様の出自から東海地方西部にあると推定されている。しかしその一方で



第29図　主要遺跡の分布　（S＝1/2,000,000）



第30図　北陸の有文高杯（S＝¼）

東海では高杯の大半は無文品であり、有文高杯はあくまでも少量の客体的な存在でしかなく、やはり北陸の如く全形が窺える資料に不足するという状況にある。また、近江地方北部についても有文高杯は東海と同様なあり方が認められ、北陸への波及を考える上ではきわめて重要な地域である[23]。このように広い地域で客体的なあり方を示す有文高杯は、器型的にはほぼ同様の無文品が大半である中にあって併存する高杯のバリエーションの一つとして捉えるべきであろう。有文高杯の小型と中型には、文様の構成について、多彩な構成とバリエーションを持つ前者と、同一モチーフへの収斂が見られる後者の浅身タイプという明確な差異があらわれてもいる。量的には有文高杯の主体は小型高杯といえよう。それらの用途については、北陸においては集落遺跡からの出土が比較的多く、主に集落内での祭祀に供され機能したものと考えられるが、その詳細は無文の小型高杯との関連などを含めてさらに検討を要するであろう。

(2) 有文高杯の時期的・地域的性格付け

時期的には古墳時代前期初頭にほぼ限定された短期間の分布を考えることができる。この時期についてはさらに新古の要素を持つ土器群が南北加賀などで存在するが、北陸各地域間で厳密な整合を得るまでには至っておらず、ここではあえて細分は行わないことにしたい。

地域的には、発掘調査量の多少に影響されるとはいえ、北加賀への集中が明らかであり、北陸東部で少なく、特に越中・越後には例がない。北加賀においては、浜相川・相川新遺跡、上荒屋遺跡、寺中(じちゅう)B遺跡[24]、南新保(みなみしんぼ)D遺跡などに1遺跡から複数の有文高杯の出土例がよく見られる一方で、他の多くの遺跡では希少な存在であり、さらに特定遺跡への分布の集中が確認される。また、北加賀偏在の状況にあって、吉崎・次場遺跡のように能登でも集中出土の例があり、一概に

第3表　北陸の有文高杯一覧表

No.	所在	遺跡名	遺構	文様構成	備考
[小型高杯]					
1	福井県福井市	太田山古墳群	3号墓周溝	2種複合（斜線文）	杯部のみ、口径12.5cm
2	石川県小松市	千代デジロ	Fトレンチ4号溝	2種複合（斜線文）	杯部のみ
3	石川県松任市	浜相川・相川新	A区包含層上層	2種複合（分離山形文）か	杯部のみ
4	石川県松任市	浜相川・相川新	A区包含層下層	2種複合（斜線文）か	杯部のみ、口径約12cm
5	石川県松任市	倉部出戸	SD25上面	2種複合（2方向斜線文）	杯部のみ、口径11.4cm
6	石川県松任市	一塚オオミナクチ	包含層	2種複合（分離弧線文）	杯部のみ、口径約15cm
7	石川県金沢市	新保本町西	包含層	2種複合（分離山形文）	杯部のみ、口径10.2cm
8	石川県羽咋市	吉崎・次場	包含層	2種複合（分離弧線文）	杯部のみ、口径約13cm
[中型高杯]					
9	石川県金沢市	寺中B	C区竪穴状遺構	2種複合（分離山形文）	杯部小破片
10	石川県金沢市	寺中B	C区竪穴状遺構	2種複合（分離山形文）か	杯部小破片
11	石川県金沢市	寺中B	C区4号土坑	2種複合（分離山形文）か	杯部～脚部、杯部は小破片
12	石川県金沢市	南新保三枚田	8号土坑	2種複合（連結弧線文）	杯部のみ、口径23.6cm
13	石川県押水町	宿向山	3号住居址床面	1種単純	杯部～脚部、口径約26cm
14	石川県羽咋市	吉崎・次場	S－2号土坑	2種複合（連結弧線文）か	杯部のみ、口径約24cm、貝か
15	石川県羽咋市	吉崎・次場	包含層	2種複合（連結弧線文）か	杯部のみ、口径約26cm
[脚]					
16	石川県小松市	漆町金屋地区	33号溝	2種複合（斜線文）	径14.3cm
17	石川県松任市	浜相川・相川新	A区包含層上層	3種複合（分離山形文）か	端部の山形文、小破片
18	石川県松任市	浜相川・相川新	A区不明	2種複合（斜交文）か	貝による斜交文か、小破片
19	石川県松任市	浜相川・相川新	B区落ちこみ	2種複合（分離山形文）	径約21cm
20	石川県松任市	浜相川・相川新	B区包含層下層	2種複合（斜交文）	貝による斜交文か、小破片
21	石川県松任市	浜相川・相川新	B区不明	2種複合（分離山形文）か	小破片
22	石川県松任市	一塚オオミナクチ	包含層	2種複合（分離弧線文）か	下向き二重弧線文、径約21cm
23	石川県金沢市	近岡ナカシマ	1号溝	3種複合（山形・斜線）か	分離山形文、小破片
24	石川県金沢市	南新保D	A区小河川跡	2種複合（斜線文）か	小破片で、端部欠く
25	石川県金沢市	南新保D	A区小河川跡	3種複合（山形・斜線）か	径約20cm
26	石川県金沢市	南新保D	A区小河川跡	2種複合（斜線文）か	径約17cm
27	石川県金沢市	南新保D	A区小河川跡	2種複合（山形文）か	径約19cm
28	石川県金沢市	南新保D	C区P-3-1土坑	2種複合（斜線文）か	径約17cm
29	石川県羽咋市	吉崎・次場	包含層	3種複合（弧線・斜線）か	小破片
30	石川県羽咋市	吉崎・次場	包含層	3種複合（山形・斜線）	小破片
31	石川県羽咋市	吉崎・次場	包含層	2種複合（斜線文）か	径約25cm

分布域に境界を設けることは難しかろう。集中出土例を各遺跡ごとに見てみると、浜相川・相川新遺跡では中型高杯が欠ける。寺中B遺跡では小型高杯に欠ける。南新保D遺跡で脚部片しか確認されないが杯部無文・脚部有文の小型高杯の多くの存在を予想できるなど、主体器種が偏っている。また文様構成においても浜相川・相川新遺跡が2種複合の分離山形文が圧倒的に多いのに対して、吉崎・次場遺跡では弧線文・斜線文が多く、南新保D遺跡では斜線文が多いなど様々である。これらの差異からは遺跡ごとに存在するそれぞれの個性が看取され、きわめて狭小で不規則な地域差の存在が確認される。また、高杯の組成には客体的であるはずの有文高杯が同一遺構から複数出土する例も確認され、同一遺跡内でもその頻度差の存在が予想される。

(3) まとめと予察

古墳時代前期初頭の北陸地方の土器に、多様な組成と小地域差が存在することは、これまでにも指摘されており、その一面は外来系土器の偏在でも示される。ここで扱った有文高杯もまたその傾向を持つ外来系土器の一器種となることは明らかであろう。一般に、外来系土器の出土は外地との接触を示し、地域間の人文の交流の存在を裏付ける一方で、情報の伝わり方や、日常生活への影響がどのようであったかは不明確になりがちである。しかし、古墳時代前期初頭から前半にかけての北陸地方において、特に高杯においては東海系土器は主体器種であり、そのなかで確実な搬入品としてではないものの有文高杯が客体的に見られる北陸の遺跡は、高杯の組成に東海・近江と高い共通性を有すると考えることが可能である。ここから連想されるのは、日常生活・祭祀のレベルにおいて外来的な様式が存在する集落遺跡像である。同じ遺跡での在来系土器の動向次第では、生活や祭祀様式の外地からの移植などが考えられる。また、同一遺跡内でのブロック的な偏在からは異系譜の集団が混在している集落・墓のあり方が想定される。このような現象が生じるにあたっては、弥生時代から古墳時代への移行の際に、北陸では複数の系譜を持つ外地もしくは外来の集団との交流が、直接的に間接的に実に様々なパターンで、そして点的でかつ不均等に行われた背景を予察できるのではないだろうか。

古墳前期前半には北陸ばかりでなく他地域でも有文高杯は確認されなくなる傾向にあり、基本的にはほぼ消滅するものとみたい。北陸では前代から併存していた在来系土器が全域でほぼ消滅し、高杯は完全に東海系主体となるのであるが、外来系土器も却って在地化が進み、有文高杯とそれを用いる伝統が完全に衰退した、と独自の意義付けもできよう。

5．おわりに

古墳前期に北陸で見られる東海系土器には、S字状口縁台付甕やパレススタイル壺など実に特徴的で印象的なものが多いが、両者はともに前期初頭から前期前半にわたって存在し、当初比較的忠実な形態を示していたものが、やがては様々な変容型を派生させる。これに対し、有文高杯は量的には少ないものの忠実な東海系土器のピークである古期にのみ存在し、消長するという、ある意味ではもっとも象徴的な東海系の土器と言える。その分析から得られる成果は他の外来系土器に決して劣るものではない。今後はこうした成果を活用し、多くの外来系の器種毎の小地域間・遺跡間・遺構間での分布を細かく対照させる作業が可能になって行くものと思う。以上、とりとめのない展望と雑感を記したところで、ひとまず論を結ぶことにしたい。

註

1　湊1951報文の「徳光出土縄文土器」。

2　県教委1976。昭和49・50年度に発掘調査。

3　県埋文センターが昭和62年度に発掘調査を行った。平成4年度報告書刊行予定。

4　県埋文センターが平成元年・2年度に発掘調査を行った。平成4年度報告書刊行予定。その一部は県埋文センター1992aで報告されている。

5　県埋文センターが発掘調査を行った。

6　県埋文センターが平成元年度に発掘調査、県埋文センター1992cで報告。松任市教育委員会も平成2年度に発掘調査を行い、弥生中期の周溝を有する建物などを確認している。こちらは平成4年度報告書刊行予定。

7　金沢市教委1991。昭和62年度から平成3年度にかけて発掘調査。

8　県埋文センターが昭和61年・62年度に発掘調査を行った。昭和61年度調査は県埋文センター1992aで報告、昭和62年度調査は平成4年度報告書刊行予定。

9　県埋文センターが平成2年度から3年度にかけて発掘調査を行い、主に弥生後期の集落跡を確認している。平成5年度報告書刊行予定。

10　県埋文センター1992。昭和63年度発掘調査。

11　県埋文センター1992。平成2年度発掘調査。

12　県埋文センターが昭和63年度に発掘調査、県埋文センター1990bで報告。また、松任市教委が平成2年度に発掘調査、松任市教委1992で報告している。

13　昭和61年度から同63年度まで県埋文センターと市教育委員会が分担して調査。松任市教委1990、県埋文センター1990でその一部が報告されている。

14　田辺1981。他、時期・産地について県埋文センター北野博司・木立雅朗・川畑　誠・柿田祐司各氏から教示を得た。

15　㈶愛知県埋文センター1990での赤塚次郎氏のS字甕O・A・B・C・D類の分類による。

16　典型的なタイプについてのみであり、実際はいろいろな古新の要素が絡み合い、両者の中間的なものが多く存在する。また、地域差もみられる。

17　近江北部、すなわち、湖東北部から湖北地方でよく見られ、有台品と無台品の両方が認められるが、受口状口縁甕のようなその地の主体甕というわけではなく、あくまで副次的な組成のようである。「長浜甕」については、長浜市国友遺跡・柿田遺跡出土土器の実見にあたって財団法人滋賀県文化財保護協会吉田秀則氏の協力と、同氏および県埋文センター浜崎悟司氏より有用な教示を得ている。

18　古墳時代前期後半・同末～中期の両段階については、それぞれ標式遺跡出土土器をもって「高畠(たかばたけ)式」「宮地(みやじ)式」様式が設定され、田嶋明人氏は漆町遺跡の編年案で、それぞれ漆・9群土器から10群土器、漆・12群土器に位置付けている（県埋文センター1986）。近年、金沢市沖町遺跡（金沢市教委1992）、松任市浜竹松B遺跡でこの2時期の資料が遺跡単位・遺構単位で混在した出土状況を呈しており、注目される。この中から両様式の典型的な要素を持つ土器を除去していくと、単品では位置付けが不可能な土器群の存在が、特に甕において看取され、両様式は従来考えられている以上に器種・器類にバリエーションを有し、また両要素の混在した時期や、例えば布留系甕の定着・残存などに見る北陸東西の区分以上に細かい小地域差の存在の可能性を考えることができる。（浜竹松B遺跡は平成2年度発掘調査で、平成4年度報告書刊行予定。出土土器の実見に当たっては担当者である松任市教育委員会前田清彦氏の協力と有用な教示を得ている。）

19　B調査区1号ピットと包含層下層出土の2点を掲載しえなかった。どちらも脚部で2種複合（分離山形文）の文様構成である。いずれ機会を改めて公表したいと思っている。

20　貝殻復縁そのものではなく、加工して施文具としたものの存在が推定される。

21　有文高杯の中型においては1種単純文深身タイプが先行して廻間I式後半期から存在し、遅れて2種複合文浅身タイプが同II式に出現し共存、そして2種複合文浅身タイプがやや長く存続する、というのが東海西部でのあり方のようである（㈶愛知県埋文センター1990）。また、1種単純文深身タイプについて、宿向山遺跡出土の13は北陸唯一例であるが、東海西部・近江北部地方のものに比べて杯部内面施文部分に明確な肥厚を行うという特徴が顕著でない点、注意しておきたい。近江北部の有文高杯については、長浜市鴨田遺跡、柿田遺跡、国友遺跡、今川遺跡、堀部西遺跡の実見にあたって長浜甕と同様に吉田秀則氏の協力と有用な教示を得た。

22　金沢市上荒屋遺跡（市教委1992）において現在整理中の資料があり、遺跡数に加算した。上荒屋遺跡では古墳時代の河川跡であるＳＤ17の下層を中心として有文高杯が定量出土している。その主体は小型高杯脚で、中型高杯も少量存在する。文様構成は２種複合が主体で、文様帯には直線文系・弧線文系ともに連結したものが多く見られた。また、例外的な存在であろうが３種複合文の構成に雑な波状文帯を持つものも見られた。施文原体はヘラと貝の２種が使われているようである。出土土器の実見にあたっては金沢市教育委員会出越茂和氏の協力を得、同氏ならびに金沢大学原田　幹氏から有用な教示を得ている。

23　近江北部地域については良好な一括遺物が少ないため、組成と時期的な流れを大まかに把握できても、他地域との厳密な対比は難しい。一般に東海系土器の影響を強く受ける地域と言われるが、欠山式期並行の高杯にはすでにプロポーション等に隔たりがあり、甕は受口状口縁甕が欠山式・元屋敷式並行期を通して主体でありＳ字甕を少量しか受け入れないなど在地性を強く保持する側面も見られる。北陸とは月影系甕、長浜甕がおそらく古墳前期初頭にそれぞれ異郷で外来系土器として存在していることなどから、比較的活発な交流を予想できよう。原田　幹氏は同氏1992の論考において近江北部経由の東海系土器波及ルートを示している。

24　寺中Ｂ遺跡のＣ区竪穴状遺構と４号土坑は周溝を有する建物の同一周溝と考えている。

参　考　文　献

石川県教育委員会　『松任市徳光ヨノキヤマ遺跡』　1976年
石川県教育委員会　『石川県遺跡地図』　1992年
石川県立埋蔵文化財センター　『漆町遺跡　Ⅰ』　1986年
石川県立埋蔵文化財センター　『宿向山遺跡』　1987年
石川県立埋蔵文化財センター　『漆町遺跡　Ⅱ』　1988年
石川県立埋蔵文化財センター　『松任市北安田北遺跡Ⅲ』　1990年ａ
石川県立埋蔵文化財センター　『倉部』　1990年ｂ
石川県立埋蔵文化財センター　『寺中Ｂ遺跡』　1991年
石川県立埋蔵文化財センター　『相川遺跡群』　1992年ａ
石川県立埋蔵文化財センター　『竹松遺跡群』　1992年ｂ
石川県立埋蔵文化財センター　『横江』　1992年ｃ
石川考古学研究会　『シンポジウム「月影式」土器について』報告編　1986年
金沢市教育委員会　『金沢市南新保三枚田遺跡』　1984年
金沢市教育委員会　『金沢市新保本町東遺跡・西遺跡　金沢市近岡カンタンボ遺跡』　1985年
金沢市教育委員会　『金沢市近岡ナカシマ遺跡』　1986年
金沢市教育委員会　『金沢市上荒屋遺跡概報』　1991年
金沢市教育委員会　『金沢市沖町遺跡』　1992年
財団法人愛知県埋蔵文化財センター　『廻間遺跡』　1990年
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ＸＶ－１』　1988年
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　『柿田遺跡発掘調査報告書』　1989年
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　『国友遺跡』　1991年
田辺昭三　『須恵器大成』　1981年
東海埋蔵文化財研究会　『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』　1991年
原田　幹　「北陸における東海系土器の動向」『石川考古学研究会々誌』第35号　1992年
藤　則雄　「北陸の海岸砂丘」『第四紀研究』第14巻第４号　1975年
福井県教育委員会　『太田山古墳群』　1975年
松任市教育委員会　『竹松Ｃ遺跡』　1988年
松任市教育委員会　『松任市北安田北遺跡Ⅱ』　1990年
松任市教育委員会　『松任市倉部出戸遺跡』　1992年
湊　秀夫　「石川郡御手洗遺跡出土の土器について」『石川考古学研究会々誌』第３号　1951年
宮崎幹也　「坂田郡における受口状口縁甕を中心として」『庄内式土器研究』Ⅱ　1992年
山川守男　「パレス文様小高坏に見る外来系土器の一様相」『埼玉考古学論集』　1991年

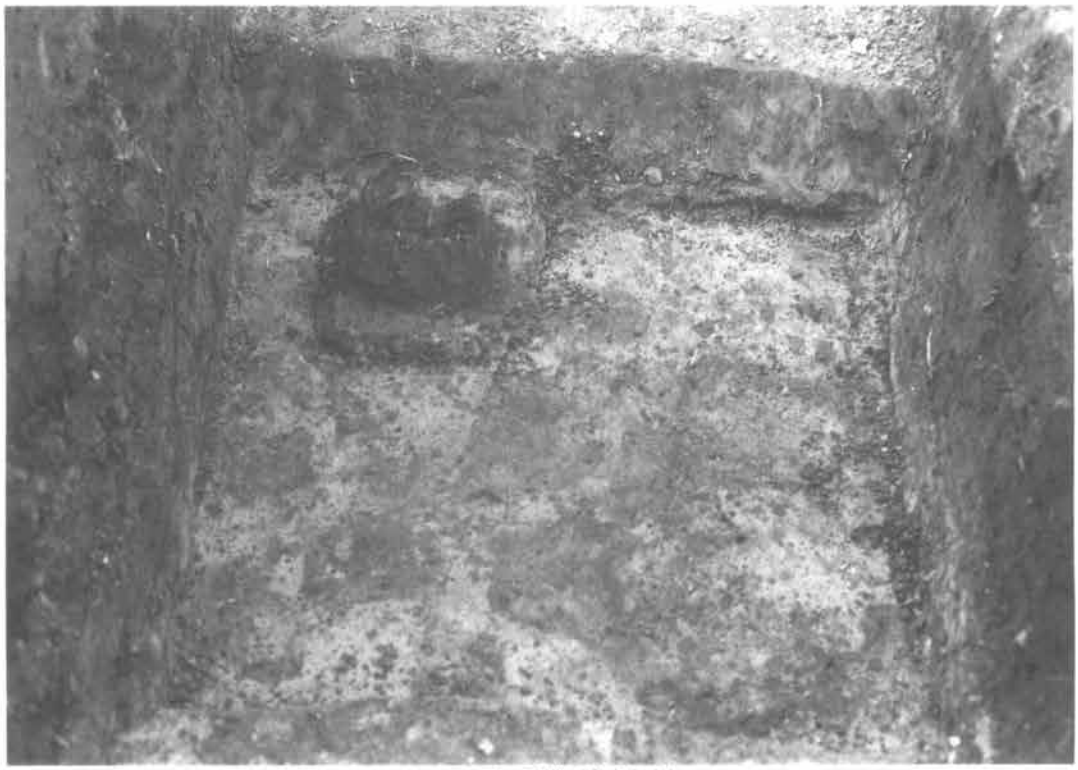
図　　版

図版1

A調査区柱穴（北西から）

A調査区土坑（南東から）

図版2



A調査区1号溝（南東から）

A調査区2号溝（南西から）

A調査区3号溝（南西から）

A調査区4号溝（南西から）

A調査区1号落ちこみ（南東から）

A調査区調査後全景（南東から）

B調査区1・2号溝、2号ピット（南西から）

B調査区落ちこみ（南東から）

図版6

B調査区4号ピット（南東から）

B調査区調査後全景（南東から）

C調査区調査後全景（南東から）

A・B・C調査区調査後全景（南東から）

図版8

A調査区遺構

分布調査時

1

2

4

5

6

7

8

10

11

A93の油脂状被膜

B76の油脂状被膜

有文高杯地

A51

A55

A56

A105の油脂状被膜

A100

A112

B13

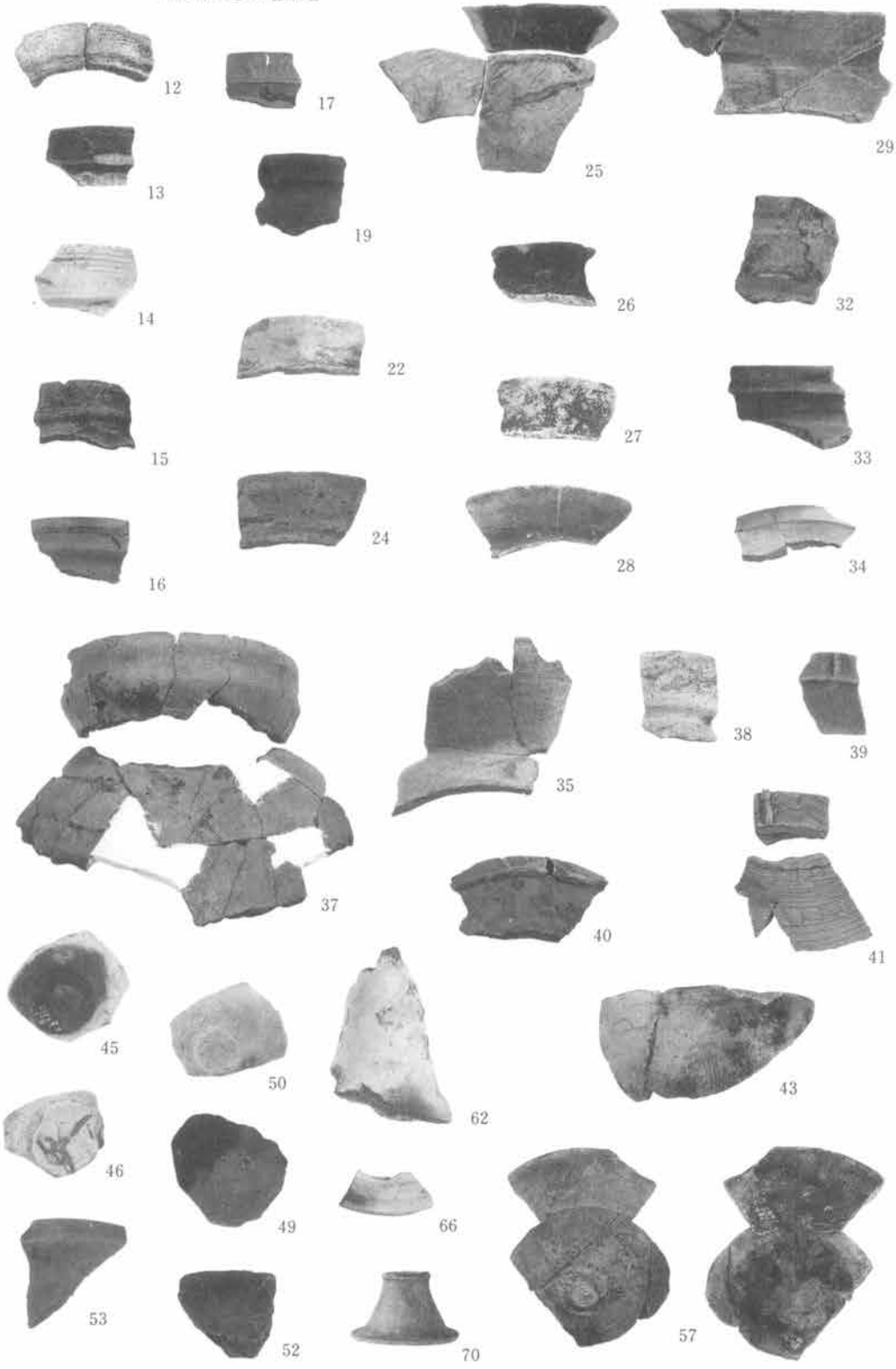
B87

B96

未実測

出土遺物(1)

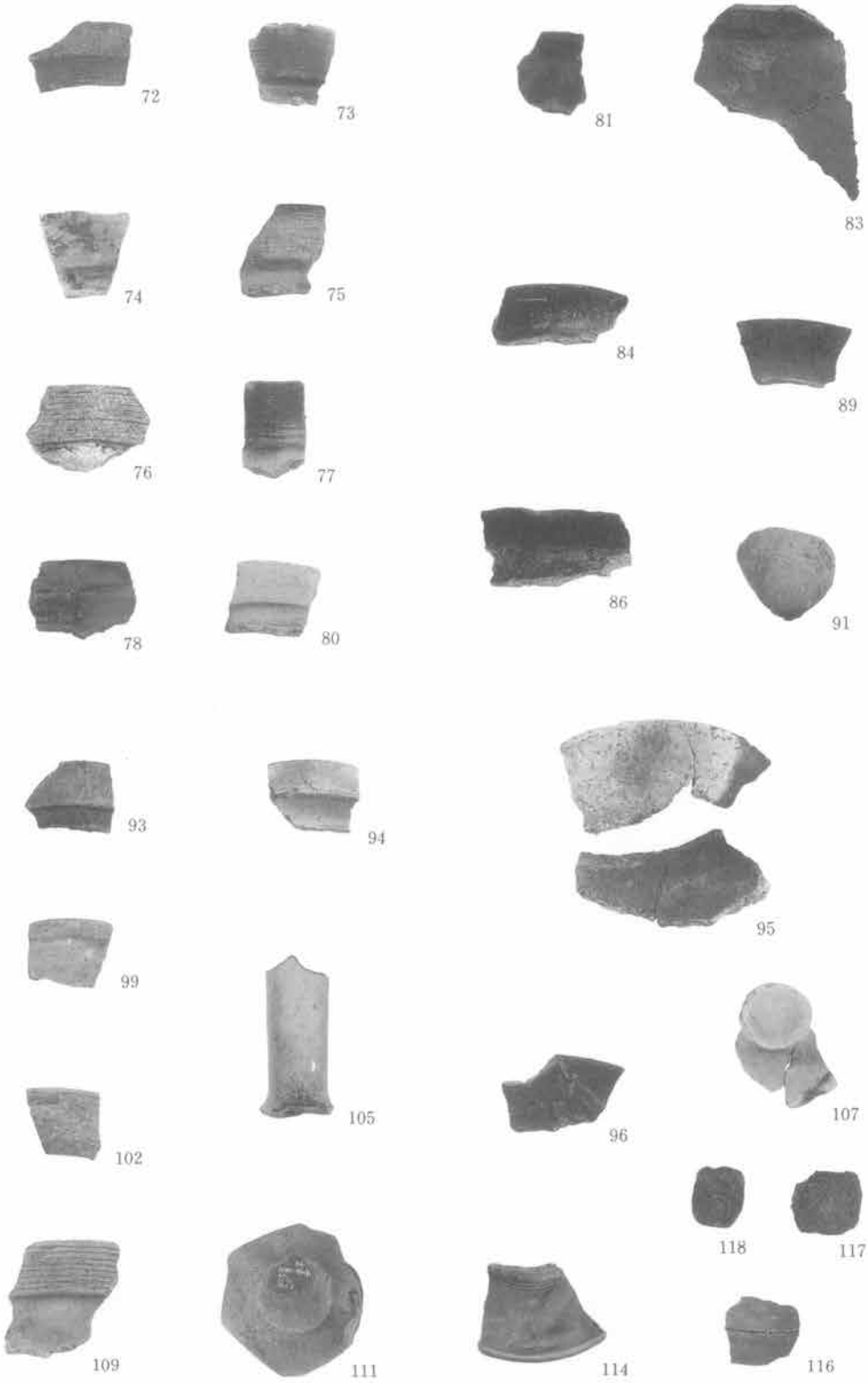
A調査区包含層上層



出土遺物(2)

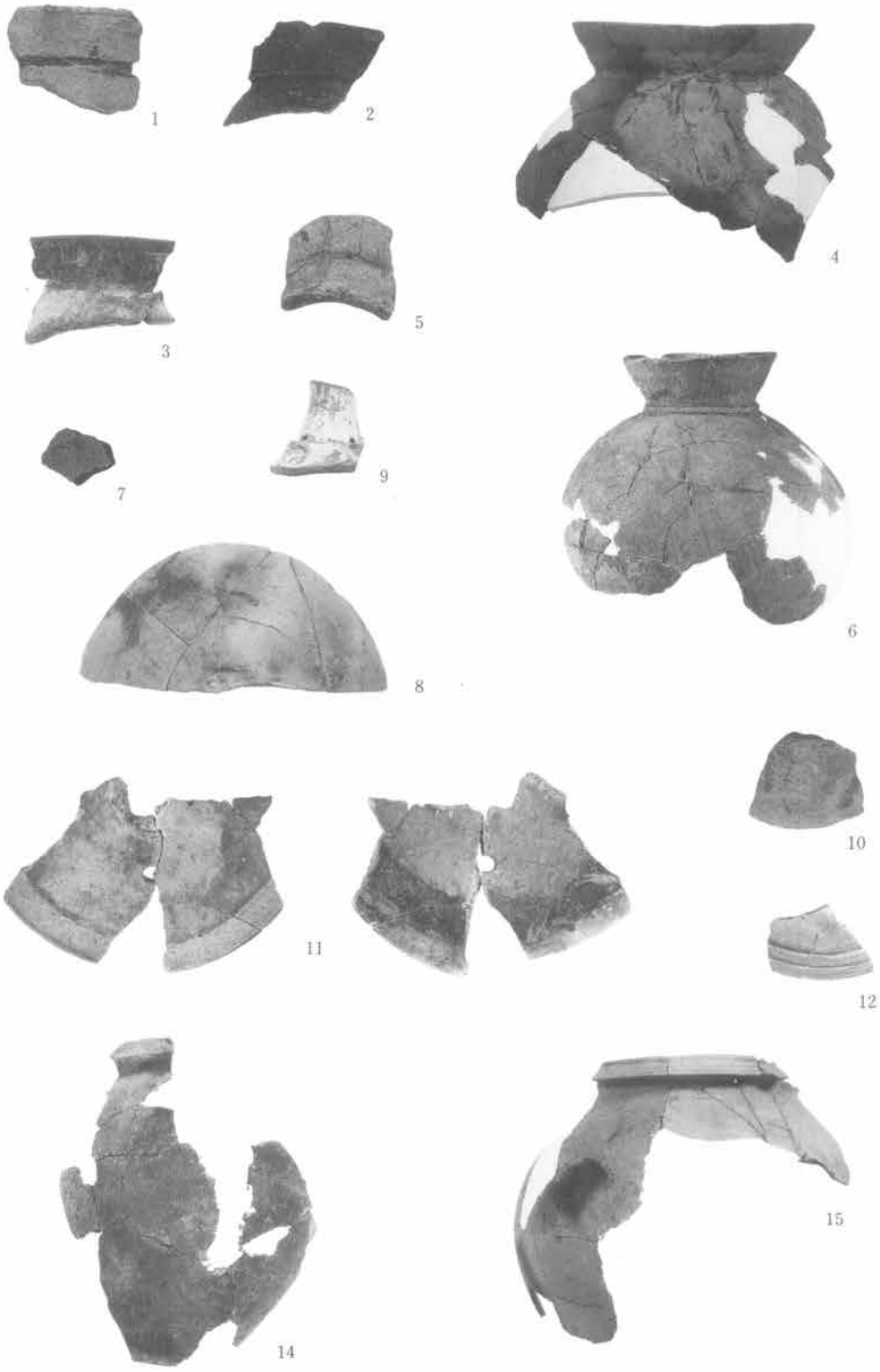
図版10

A調査区包含層下層・不明・表土



出土遺物(3)

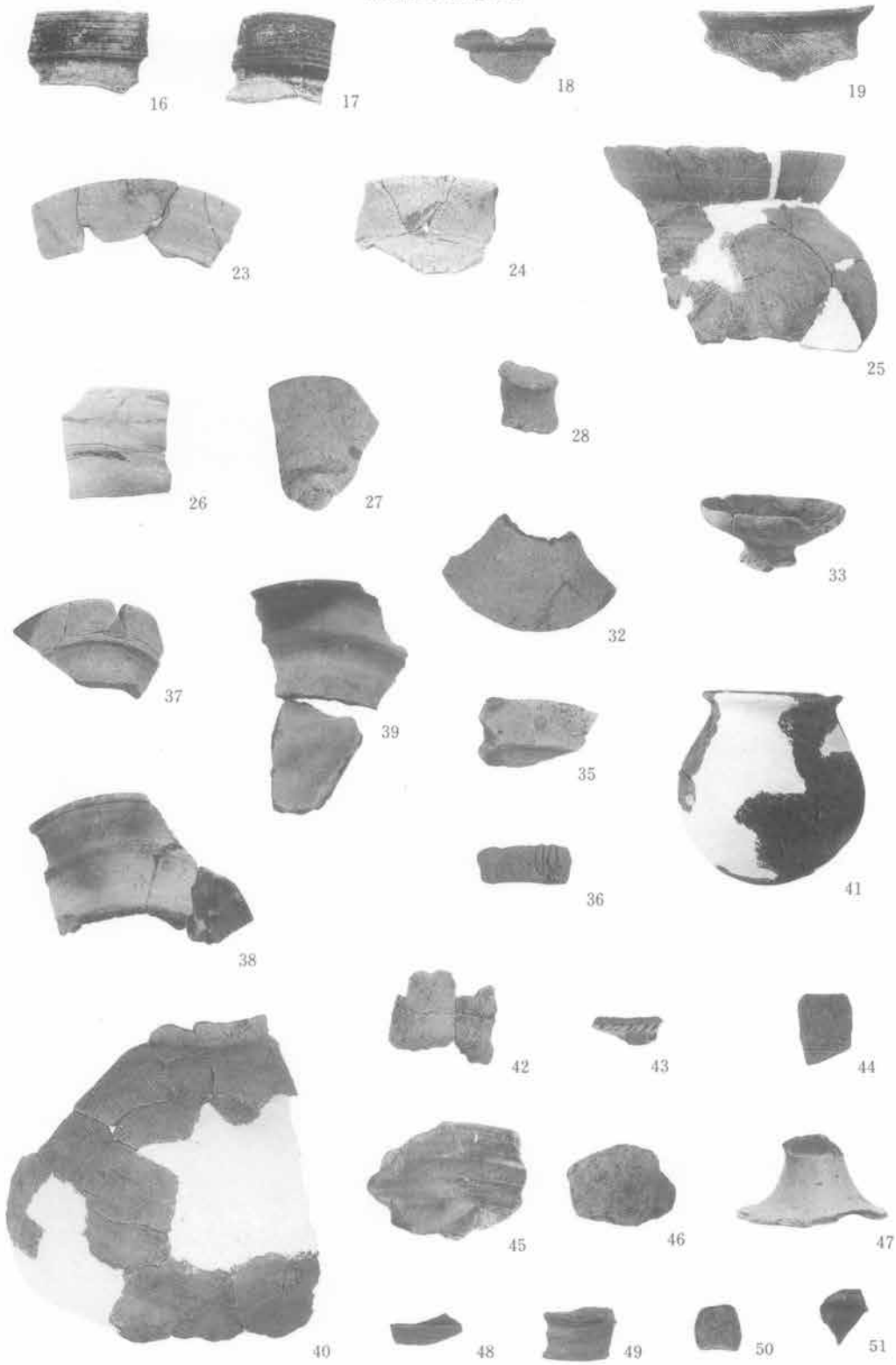
B調査区遺構



出土遺物(4)

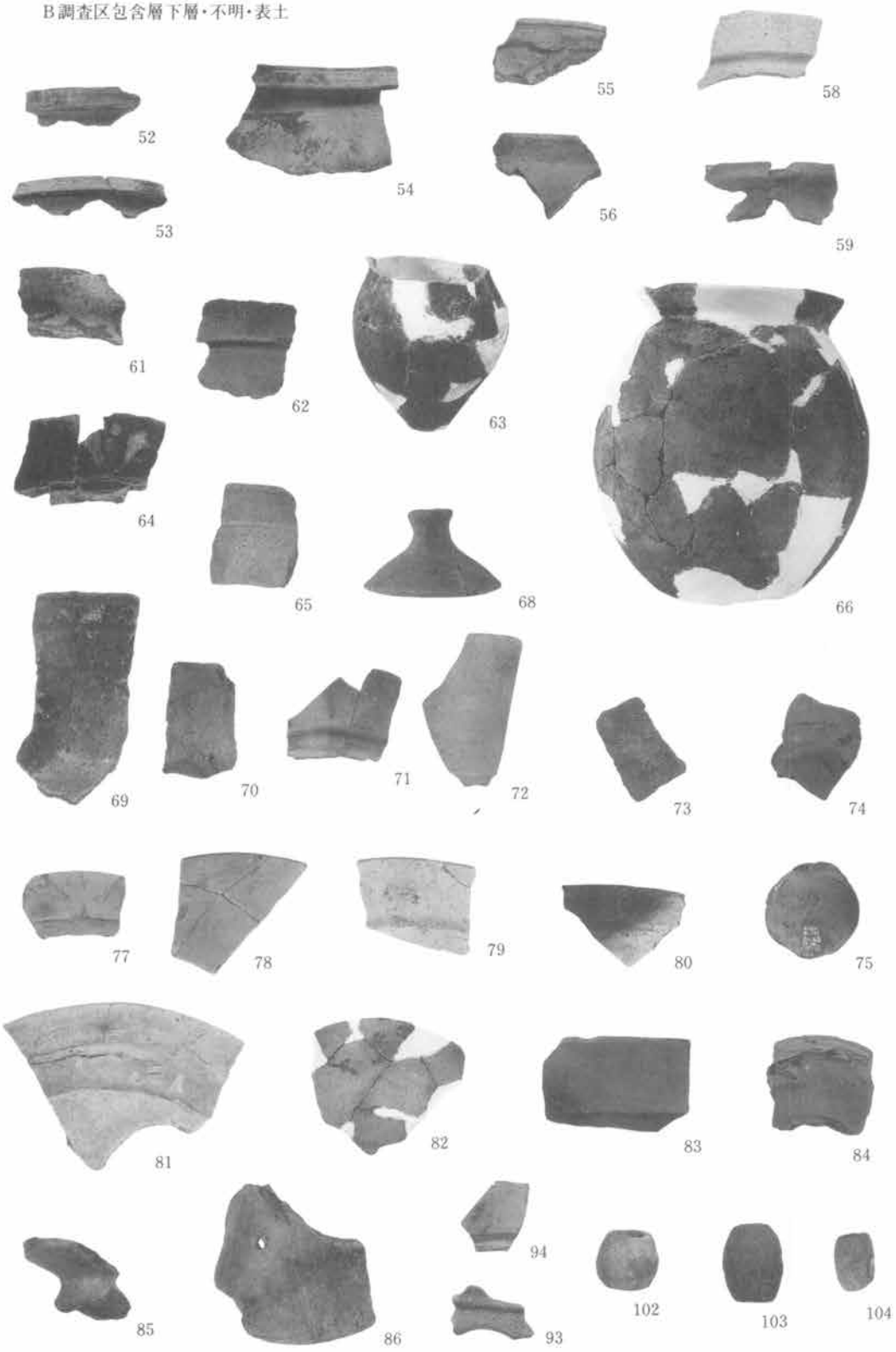
図版12

B調査区包含層上層



出土遺物(5)

B調査区包含層下層・不明・表土

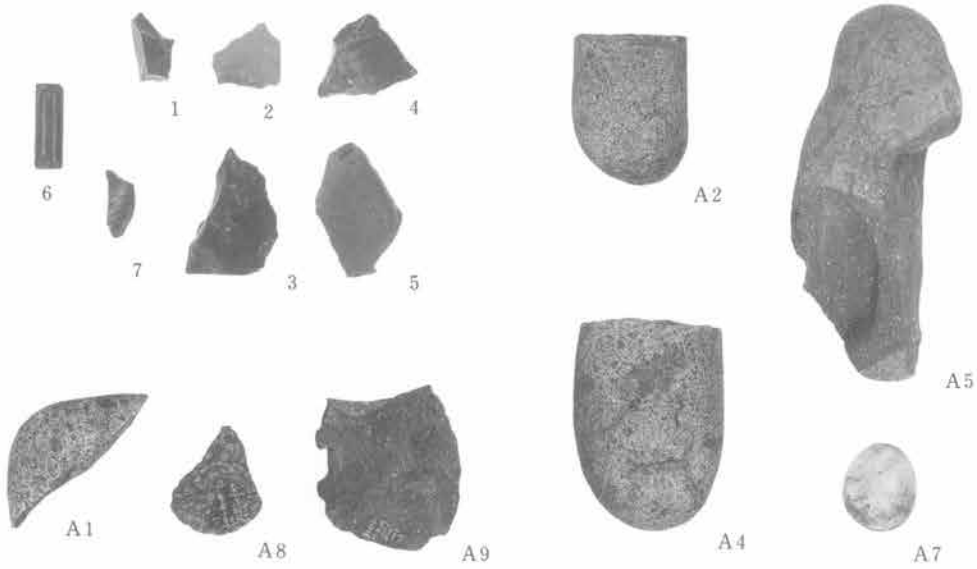


出土遺物(6)

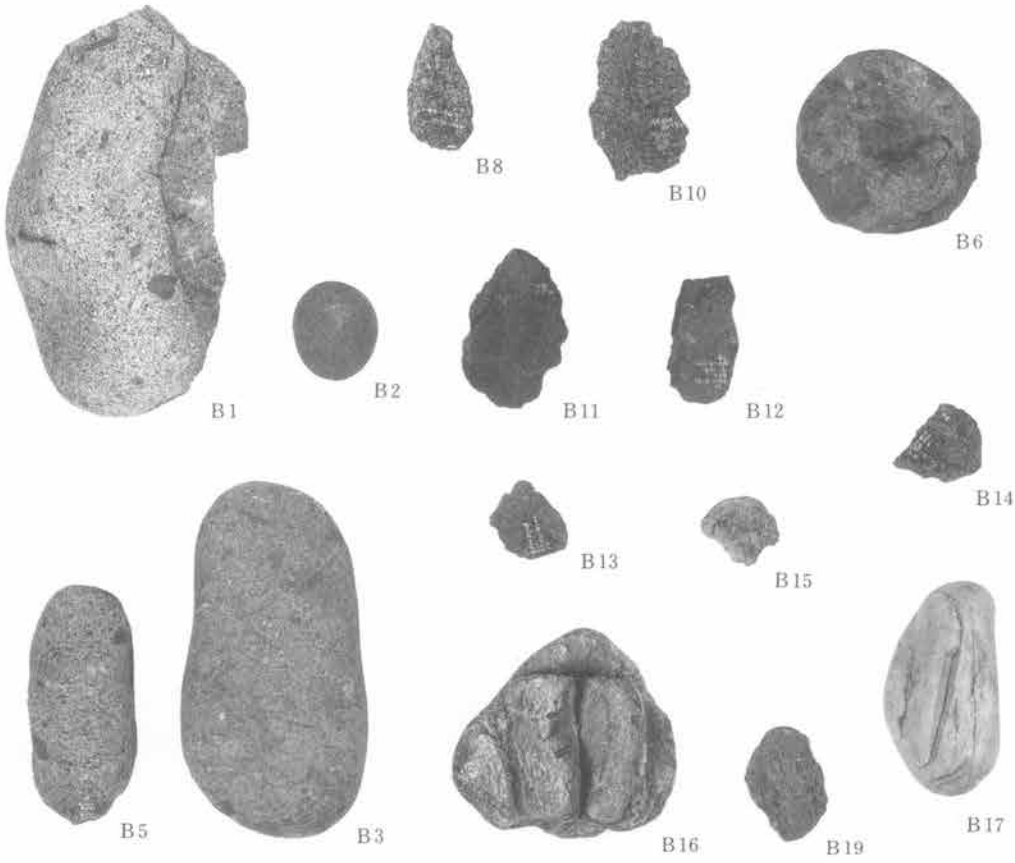
図版14

玉類

A調査区石器類



B調査区石器類



出土遺物(7)

松任市浜相川・相川新遺跡

平成5年3月30日　印刷・発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番(代)

印　　刷　株式会社　橋本確文堂
石川県金沢市大手町2－35

©石川県立埋蔵文化財センター　1993